明治三十二年六月五日發兌

女鑑

第百八拾貳號

東京國光社

女鑑第百八拾貳號

目録

毛利吉就の夫人



夏のたしなみ

時計のはりもたゆむといふ夏の日は、人心、ゆるむまゝにまかせおかば、如何にたゆむらん、如何にゆるむらん、よく／＼心をひきしめずばあるべからず、心ゆるめば身体ゆるみ、地心の引力をはじく勢も、力も失せて、たゞ身重く、手足たるく、起つ勢も、居る力も失せて、ともすれば足をのばし、身を横たへ、手をつかふも、口をとづるも物うくぞ思はるゝ、之たしなみなきが故なり。かやうの折は、一層心をひきしめ、勢を呼び、力を出さしめずばあるべからず。朝顔の花の一つは何處にもまかまほしきものなり。そうじて夏はねぶたきものなり、とり分けて、夏の夜はまだよひながらとて、いと短かきものなり、ともすれば、朝ねしたきものなり、されど、朝ね決してすべからず、夏は、あしたほど心地よきものはあらじ、流石にひ

んがしの空あかうならんとす、日の光まだむでからぬ方より、ふきくる清風さはさはと、新葉水葉を動かして、秋ならぬ露のほろれちたる云はん方なき空に、烏のねどころはなる〻聲、何となしめづらしう思はる〻に、朝顔のとくうつくしき顔見るまたなくすゞしき心地す。姫だちはかやうの折、少しく書物にてもひらききて、土曜中のたしなみとすべし。

黄金ある人は、こがねにまかせ、しろがねある人は、しろがねにまかせて、そこゝこの海水浴場、山又山の奥がの泉、清水なんど求めて、あつさを辟けん。されど、あらがねもとくると云ふ田のくろに下りて、はげしき日を、すげ笠一つにさけて、間草かる男女あるにはあらずや、之等思へば、さやうの所に徃かずとも、熱さの堪へられぬと云ふ事やはある。清き水一手さげ來りて、心をきよめ、身すゝぎ、よくよく心をしづめば、又泉のくみたらん心地すべし。夕はとく庭に水をやり、身をきよめ、晝のあつさを洗ひす〻ぎて、明日咲く朝顔の花をかぞへなどして、おくれじと心がくるも、身のなぐさみ、且はたしなみともなるべし。

又夏はよろづのものゝ腐りやすければ、食はよく〳〵つゝしみ、あしきを食べぬやう心がけ、またあまりに多くすぐるときは、捨つるがをしなど思ひて、しらず過ごす事あり。誠にすつるもをし、さればとて、腹中にくさるもおそろし、故に注意して食物るゐあまらぬやうするも女子のたしなみぞかし。

四季ともに身のまはりは清潔にせざれば叶はねど、とり分けて、夏は清くせずば健康を害するものなり。されば衣服はあかをつけぬやう、家のまはりはけがれをらぬやう、洗だく、朝ぎよめ、夕ぎよめ怠るべからず、而して、日高うなりてより、あまりに働く折は中〳〵に健康を害し、且は色もくろむものなれば、朝とく之等のきよめをすべし。はしため仕ふ夫人は、殊に、とく起きて、人々を御すべし。朝は一日のはじめなり、はじめをつゝしみてこそ終あるを見る。朝をつゝしみてこそ、其の日すゞしく、毎日すゞしくなりゆくものにこそ。げにしろたへのはちすの上のつゆのまもいさぎよからん心、身を求め、食をつゝしみ、身体をまめやかにし、而して、つゞりさせてふきり〴〵すの聲きかぬ間に、早く老いたる人、幼きものゝ衣服

はとり分けて、夫に耻かゝせぬやう、己もまた更衣の用意、すべてたしなみおくべし。



論説

祖父母に對するの道

岸田松三郎

家の祖父母は、即我が愛敬する父母を生育し、祖先より傳來せる家産を讓りて、我が父母に與へたりし人なれど、家に對する功勞と、世故を閲歷せる經驗より見ても、又我が父母の至鴻なる恩人なれど、我れ今日其の父母より享受する恩遇を思ふに就きても、是、皆、祖父母の賜なることを思ひて、敬愛の意を表し、之に事ふることは、敢て我が父母に異なることなかるべし。

總べて、祖父母の我に於けるや、專ら愛憐の至情を致して、我れを遇するものにして、其の優渥なること、徃々其の子に過ゆることあり。故に、世の諺に、惡くき嫁の胎内より、最愛らしき孫兒生ると、祖父母は實に、此の意を以て、我れを遇するものなれど、其の

恩愛周到にして、其濃厚圓滿の情は、却て父母に優るものあり。されど、已の既に老衰して、四肢身體、意の如くならざるに至りても、猶、我れを愛して、我が身を護るものなれど、假令祖父母の既に衰耗に赴き、其言行往々常度を脱することありとも、益之を敬し、之を愛すべし。決して、侮慢虚欺の言行あるべからず。

前上既に述ぶるが如く、祖父母は、即、我が父母の前代に生活して、其の世故を經ること多く、隨つて、萬般の經驗に富めり。されども、身體既に疲れ、神氣も亦既に衰ふるを以て、其の見聞する事毎に、心を勞すること敏なれども、其の割合に身體を自由に用ゐること能はざれど、注意の仔細に至るに過ぎ、却て壯者に厭はるゝことあり。又感動の過敏なるものなれど、其の出遇ふ事毎に、涙を揮ふことあるは、是老人の常態なり。故に、老人の注意を以て、無用の事となし、杞憂の事に屬すとして、之を輕ずるの心を以て迎ふるは、大なる誤なり。老人は、只何事も、已の經驗に徵して、利害を考ふるより、投棄し能はずとして、注意を與ふるなり。焉ぞ無用と知りて、之をなさんや。只其の事の次第により、時代の異なる所より、其の意見の取るべからざるものあるべしといへども、老人の意見は、徹頭徹尾陳腐にして、取るに足らずとするは、最不可なり。宜しく其の意見を敬承して、其の當否を考ふべし。若、其意見の取るべからざるものならば、冷

然之を放棄し去らずして、只之を胸中に藏め、他山の石として、後日の參考に供へなむ、徒に老人の感情を害はずして、又幾分の利益となるべきは、蓋疑あるべからず。

凡そ、老人は、其の身體既に衰耄して、神氣も亦衰へたるを以て、何事も其の爲すべきを知りつゝ、總べて懶きを厭ひて、偏に其の心を勞するを以て、之が孫兒たるものは、能く其の老人の意を體して、己の心身の許す限りは、務めて其の勞に代りて働き、假令、其の命ずることなくとも、能く其の意を迎へて、之を爲し、何事も氣輕に之を營みて、聊かも煩勞を厭ふ振舞あるべからず。女子は、男子に比すれば、温順眞密にして、殊に、家内の細事に當るに適するが故に、常に翼々として注意を怠ることなくんば、最能く老人を慰むるに適するを以て、老人たるもの、爭でか之を怡むざらん。且又、老人は、假令健康の時といへども、衣衾酒等の務に服し、閑暇ある時に在りては、肩を摩り、腹を按じ、務めて其の體を慰安すべし。猶、又、世間の珍談奇説にして、其の心を慰むるに足るものあらば、之を説語し、或は朋友知人の來ることあらば、常に怡々として、其の傍に侍し、孜々として、周旋すべし。大凡、斯の類の事は、短慮粗宕なる男性の、能くなすべき所にあらずして柔順緻密なる女性の、能く適する所なれど、聊も之を厭ふ狀あるべからず。假令婢僕を使ふ身にありとも、此等の事を躬からするを厭ひて皆婢僕に命じ

て、之をなさしむるが如きは、甚不可なり。總べて、老人の心には、最濃厚なる愛情を致して、其の兒孫を待するものなれど、婢僕に打任せて、之をなさしむるときは、爭でか老人の歡を盡さしむることを得ん。是を以て、柔順なる心思と、慇懃なる振舞とは、千金の滋味を求めて、食膳に供するに優ること萬々なりとす。

女子と内地雜居

三輪田眞佐子

眞に國を愛するものは、その國辱を雪ぎ、その民福を謀るべきのみならず、國家長久の策を講せざるべからず。今や、内地雜居の期に臨み、果して、愛國の實を盡すもの多きか、若も、姑息彌縫の策を以て、安ずるもの少なからざるにはあらざるか。

内地雜居とゝもに、おのづから、我が家庭思想に變動を起すべし。風俗人情に影響を蒙るべし。されど家庭の樞機を握り、風俗の淵源たるべき婦人の決心こそ、知らず識らずして、國家の大謀に關係すべけれど、婦女なりとて、内地雜居を以て、對岸の火災視すべきものかは。

目下雜居の準備として行ふところのものを見るに、先外國語を修め、立食の方法を學び若くは、舞踏會の練習をするなど、外形の摸擬をことゝするに止まるめり。おのれおも

へらく、世界の新智識を味はゝんため、外語を修むるは可なり、時として、立食の席に列し、舞踏の夜會に臨まんか、そは、外國の風習を行ふものなれど、その法式を知るは不可なりとせず、而れども、外國の風習を知りて、我が國風を無視するに至らば、可なる所以を知らざるなり。古語に曰はく、境に入らば、その國禁を問へと、そは、歐米の國民も、必、國際の法則として、是認するところあるべし。されば、雜居のため、我が國に來るべき他邦人こそ、先、日本語を修め、日本の風儀習慣を學び、以て、我が國禁を犯さゞるは、世界萬邦に通ずる大道なれ。然るに、我よりその常習を摸擬して、他邦人の來るを待つは、寧、禮にあらずして、諂なりと言ふべし。そは延いて國家獨立の體面を汚すに至らんも知るべからず、あなあはれ。

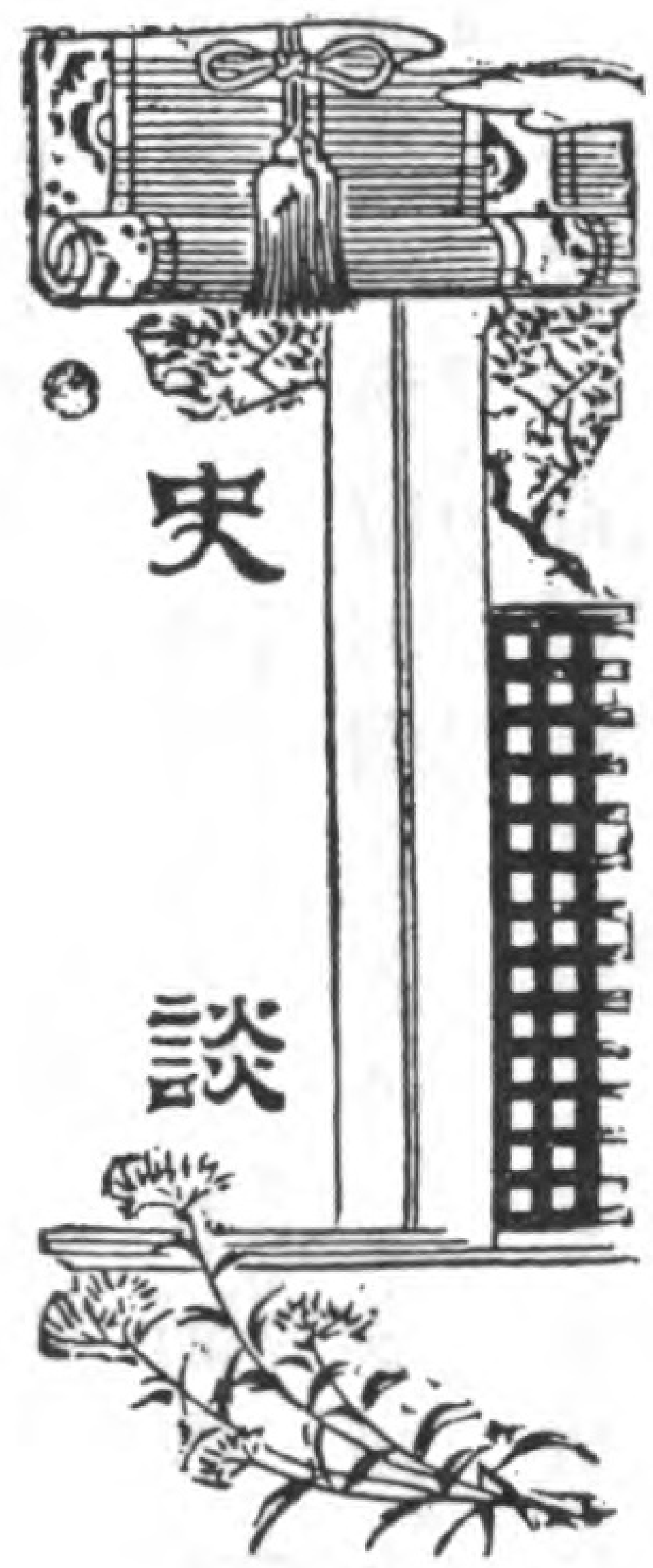
蓋、外事に心醉し、外人を崇拜するは、非なりといへども、徒に慷慨すべからざることを狂怒して、外人を排斥し、將、外人とし聞けば、悉、輕蔑し、罵詈する如きは、深く戒めざるべからず。幼兒が、外人を見て、赤髯と呼び、毛唐と稱する如きは、家庭敎育の及ばざる罪なり。決して、外人に不敬を加ふるは、愛國にあらず。反りて君子國の汚辱を釀すものぞかし。

雜居に際して、日本婦人の守るべき態度は、天眞爛熳として、君子の禮を以て交際すべ

し。勿論我と彼と富の程度も相異り、風習人氣も、亦、同じからざれど、その間に種々の事情起りて、我が婦人社會にも、必、金力のため、外人に媚を求むるものと、主義のため、外人に怒を含むものとの兩極に馳せんは、今日より豫言するを得べし。故に、おのれは、君子の禮を行ひ、貧しきものも、女徳を樂み、富まんものも、女禮を好み、敢て、譏らず、敢て諂はず、敬すべきは敬し、斥くべきは斥け、威徳以てこれに接し、和徳もてこれを服し、大に我が國女子の至美至善の徳行を、萬國に發揚するこそ、本願なれ。決して心醉に流れ、排斥に失する如き、小人の態度を採るべからず。

その他、社會萬般のことにつき、彼の長所を採り、我に同化すると、同時に、我が長所を以て、彼を感化する覺悟なかるべからず。などか、雜居の聲を聞き、周章狼狽すべき。敢て踏むべき女道を踐み、日進月歩の女學を修得して、止まざらんか、國家長久の策を定むるに、何の困苦かあらん。





毛利吉就の夫人

鹽井ふく子

狼狽てものをおとし、周章て事を損ず、かの治承のころ、平家、富士川に水鳥の立ちける羽音におどろきてすは、源氏のよせ來れるよとて、我先きに落ちんとしあわてさやぎて、弓とるものは矢を知らず、矢をとるものは、弓を知らず、我が馬には人のり、人の馬には我れのり、つなぎたる馬にのりて馳すれど、株を廻る事かぎりなし、鎧はおとし、甲は忘れ、弓矢はうちすて、劔ははかず、大帛をもうち忘れてあはてゝ逃げまどひ、

ふじ川のせゞの岩こす水よりも
　はやくもおつる伊勢平氏かな

などのそしりをとりたるもをかしく、司馬仲達、死せる孔明に逐はれて、逃げたるも又おかしきためし、げにあわてゝおかしかりしためしは少なからず、まして女子は度量乏しく、物に動じ、あわてやすきものとて、地しんにおどろきて火を失ひ、近きほとりの失火にうろたへてあんどんをひつさげて出で、我が子を捨ておきて、猫の子をかゝへ出る等、やゝもすれど、とむねをうち、我を失ふためし多き中に、毛利吉就の夫人ぞかり大度あるはまたまれなるべし。夫人は若うして、夫におくれ、はやうやもめとなられける後は、髮をも世をも思ひたちて、尼となり、麻布の屋敷にひとりこもられ、庭の貞松、みさを正しきを己が友とし、まどのくれ竹、直きふしをわけくれの心として、偏に身をつゝしみ、行ひを正し、わけて亡夫の忌日〳〵には髮を少しづゝつみ捨て、身を終るまで守り玉ふ貞節

あはれ、みさをを以て世にほこれる松柏も夫人を見ては、色なくぞ見えぬ。

夫人、殊に御心しづかにて、思慮深く、大度ましまして物に動じ玉ふ事なかりけり。元祿十二年の頃かとよ、麻布屋敷近邊より失火し、折りふし風はげしく、火勢甚だ盛んにして、飛ぶ火はあられとちり、雪とふり、居宅も今は危く見えけるに、家司も急ぎ退去あるべきよし申すゝめられしに、尼公はなほ從容、しづかに申さるやう、我れ、今、立ちのかんとせば、供に出るもの其のあとに心引かれて、さぞや難儀すべし。我身はもとより惜しむべきにあらず、殊に屋舖廣ければ、火のかゝるを見て立ち退くも遲かるまじ、又、我諸道具は、藏へ入れんと思ふなかれ、有るものはしばし失ふとも事足りぬべし、必ず我が道具には心をとめで、さるよりは、人々の衣類、雜具こそ大切なれば、是をよく片づくるべし。かやうの折りは、手前の火の元こそ心もとなければ、部屋〳〵によく心を付けよ、家中の妻子等は我立ち退く折り、もろともに立ちのくべし、必ずあわてさわぐなとて、泰然更にうごき玉はぬに、家司大に感じ、家中の士僕力を合せ、火を防ぎければ、さしも、はげしかりし火も遂に勢ひを失ひて、此處の屋敷にて、遂に消滅し、屋敷も殘り、人々もつゝがなかりけるも。實に夫人が大度による所にして、思慮あるものは、ものに動せぬとはかゝるを云ふべし。而して夫人は、酒井遠江守忠隆の娘にて、忠隆の母、忠直の夫人は、又度量と貞操とを以て聞えたる母なりき。あはれ茲に於て、家庭の要また知らるべし。

桂忠昉の室

加藤雄吉

天正十五年の春、豊太閤大に諸國の兵を召集して、島津家征討の師を出し、自十六萬の兵を卒て、薩摩國川内河の涯なる太平寺に本營を搆へしは、四月廿五日な

りき。高城、水引、高江等の諸城、靡然として降りける中に、平佐の城主、桂忠昉、獨守備を嚴にして秀吉に抗せり。忠昉性沈毅にして、膽略人に超え、僅かに三百の城兵を以て孤城に據れり。平佐城は川内河の南岸に在りて、大平寺を距る半里弱なり。廿八日、秀吉、小西行長、脇坂安治、九鬼嘉隆等に令して、平佐城を攻めしむ。忠昉自大手を防ぎ、搦手は其の部將谷山紀伊等をして守らしむ。忠昉の室、其の性質嬌邁の婦人なりければ、甲を擐き、劔を執りて、谷山等を助け、嬰城固守して搦手の方面を捍禦す。軈て、敵は愈愈城下に攻め寄せ、壘を攀ぢて登らんとす。忠昉の室、遽に城内の爐灰を聚めしめ、數十人の婢に命じて、箕を以て灰を敵に對ひて撒布せしむ。折しも勁風寄手の方に吹き覆ひたれば、敵兵多くは灰煙を蒙りて、眼を開くこと能はず。城兵此の機に乘じて、いで戰ひければ、敵兵狼狽爲んすべを知らず、城下の水田に陷りて、起つ事能はざるを室は、雄々しくも、女隊を指揮して、味方に助援し、大勝を得たりといふ。齡も未うらわかかりし此の女丈夫、計策を以て奇功を樹てし事、今に至るまで、士林の一佳話として喧傳せり。



茶の湯

茶禮初學（續）

孤峰庵碌仙齋不羨

關　葦雄

夜咄の茶の湯の事

註釋　不羨曰、夜咄は炉の時節に限るべし。都て主客の約促振は、正午の茶と差違ある事なし。道

具の組合に至りては、大に習のあることなれ共、是は修業數年の後にあらされど、解し得ることとかたかるべし。解釋も事延長に亘る恐れ有。一夕の談話に難レ盡。因て是は、後に解すべし。

夕七ッ時より掃除申付以下の文

註釋　夕七ッ時は、則今の四時なり。掃除申付とあれと、是は兼人々の身分にもよる事ならん。雖去令閨令嬢或は貴婦人にして、此事迄に負擔は實際難レ爲場合もあれど、從僕下婢歟、或は植木屋職の事柄に馴れたる者を撰み、是に可二申付一路次の掃除は物蔭木の下、植込の中抔に注意して、入レ念べし。現場見ゆる處は、意を不レ用して、奇麗に成もの也、飛石に水蒔、蹲居石の水も、中を能洗ひて、清水を入替べし。日暮たらぞ、待合へ行燈烟草盆、手焙を出し、燈籠に火を點すべし。(但此分は、燈心三本也)本文但書、外待合無之腰掛斗の所は、烟草盆、手あぶり、圓座、行燈等出すなり、座敷は、不レ殘戸を入る。其中窓一個所、程克き處是斗、障子にして置なりと、此但書は聞えへたる通り故、別に解釋を不レ要。

數寄屋の中掛物無レ之以下の文

註釋　不羨曰、數寄屋の中掛物を不レ掛事。是は夜咄の故實なり。夜間は燈火故、書の眞僞、或は細字は讀解に煩しき故、是を除去すと云ふ。若又用る時は大字の物は免すと云ふ。五字一行、或は横物二三字の大字に止ると云ふ。

短檠竹檠等以下の文

註釋　不羨曰、短檠、竹檠、燈心、七筋、長燈心なり長燈心と云は、燈心を產の儘置を云ふ。又長さを其儘散布し置ては、散亂して締り惡き故、三つに分別して、皿より外部に出る分は目貫に組、末の長さを取、玉結をして置もの也。木檠、木燈臺等は燈心六七寸にして五筋なり右何れも黑文字、揚枝た付置く。是燈心を搔立る材料なり。

不羨曰。此燈臺と云もの、品々、何れも昔のものにて、今は器械、所謂らんぷの類澤山ありて、燈光一層相增、中々に重寶なれど、只形容想像數茶席には不取合ものなり。近來短檠の上の輪へ、らんふを掛、穂屋を覆ひ使ふ人もあり。倘考へて發明せむ、便利ならん。

待合の設

註釋、上座の方に行燈、下座の方に手あぶり、煙草盆、圓座と並列べ置なり。　公

客、初發入、先薄茶を點るなり。終て炭を致し、夜喰を出すなり。此前茶は、必點る事なり。掛物花は、必なし。其餘はかはることなし。夜咄は、少和らかにするが法也。

（未完）

第一百八十壹號正誤

朝茶の湯の部

十五頁表、上欄七行目災炮錄は灰炮錄、同十一行目登の上は蓋の上の也。同十四行目、腕に置きは脇の誤りなり。

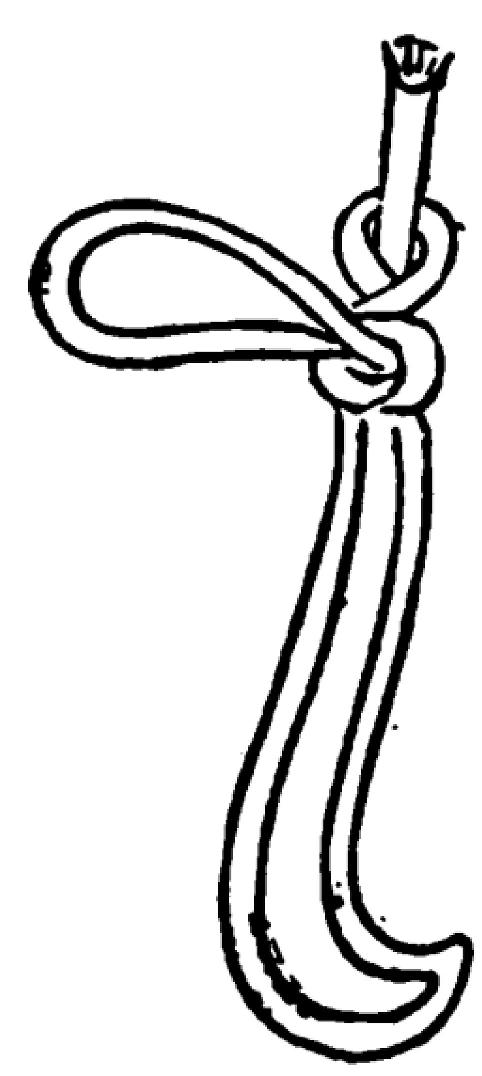
新撰

結物百種

百草庵一無

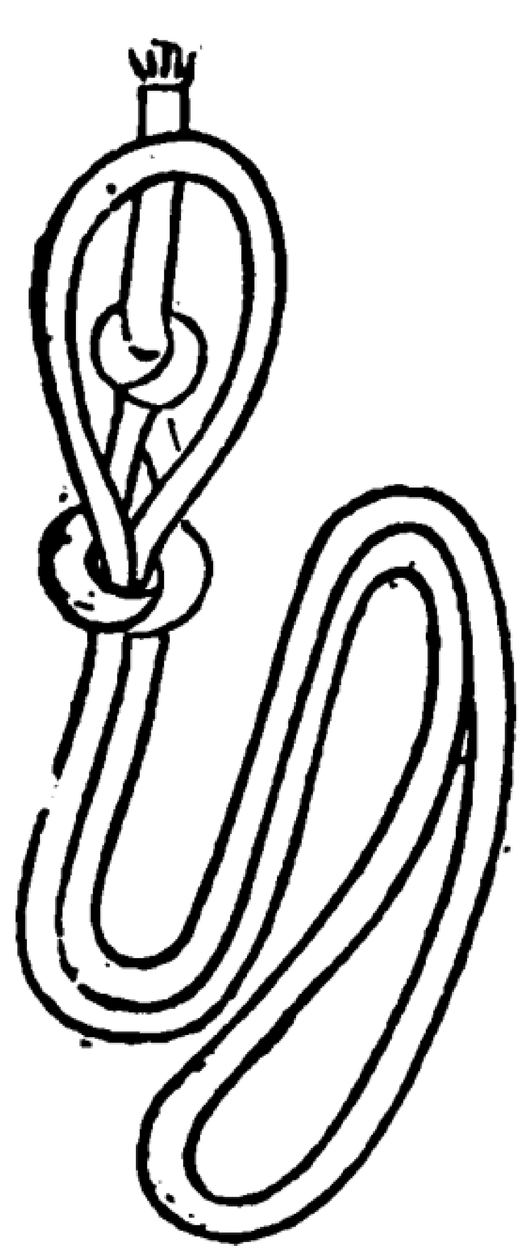
梅菊櫻桔梗酢漿草結　36　袋物の紐に結ぶ。

第一圖



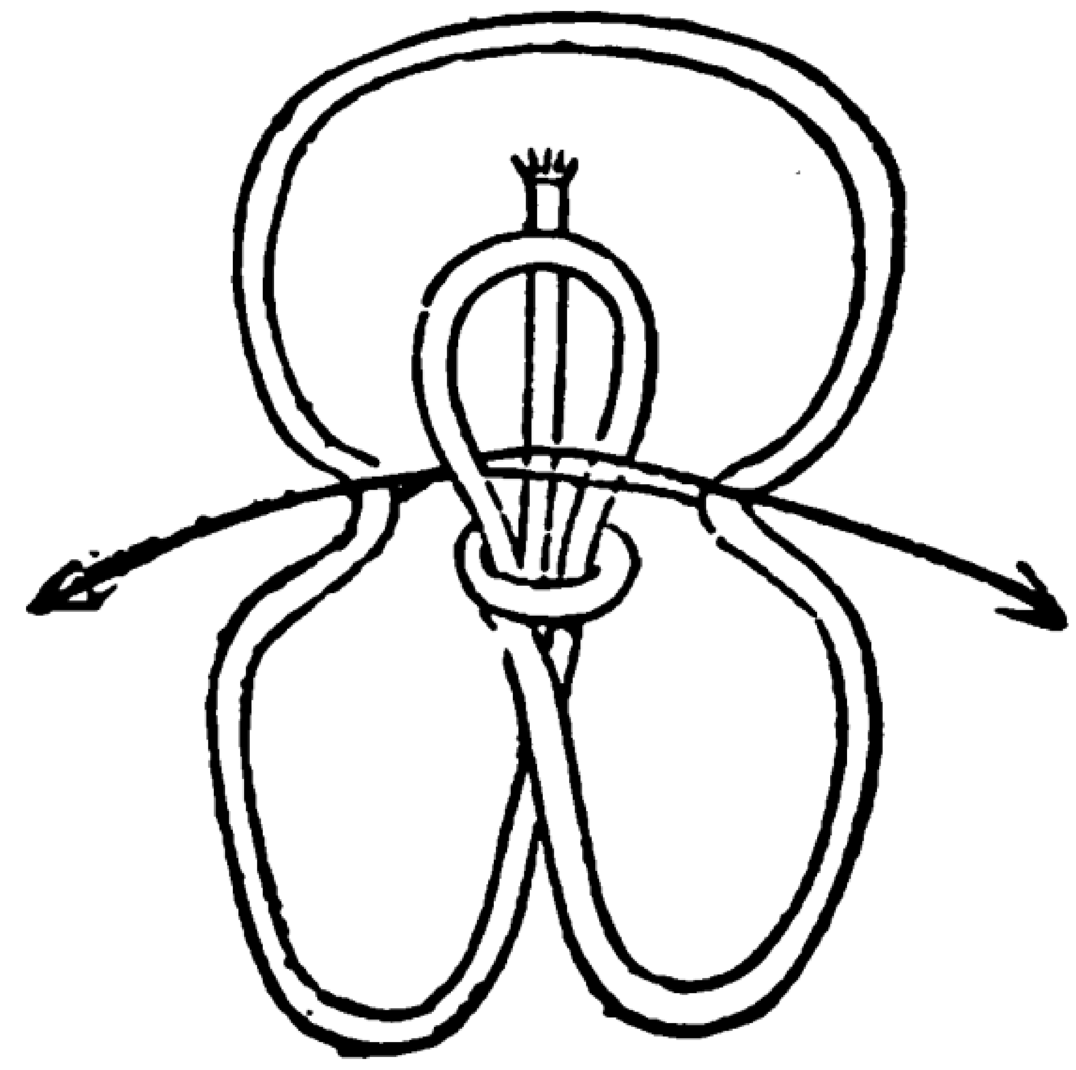
した結（一）

第二圖



した結（二）

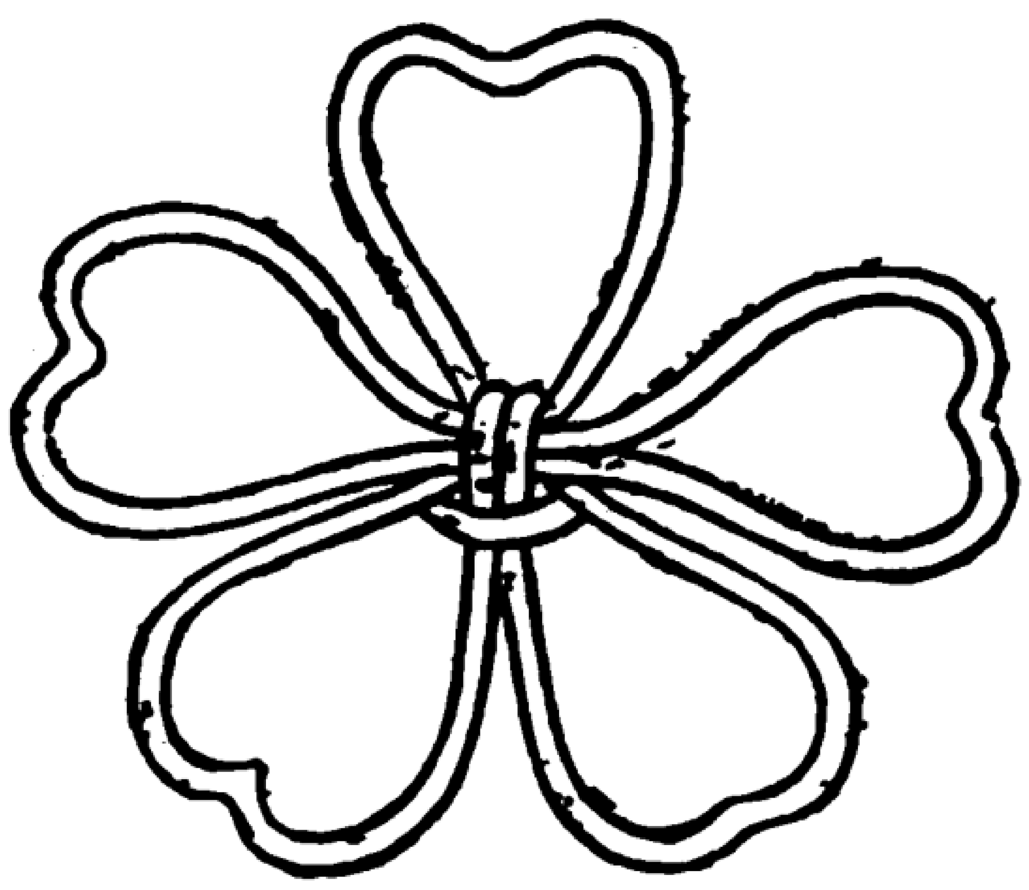
第三圖（甲）



黒線の通りに双方よく通し締めて第四圖となる

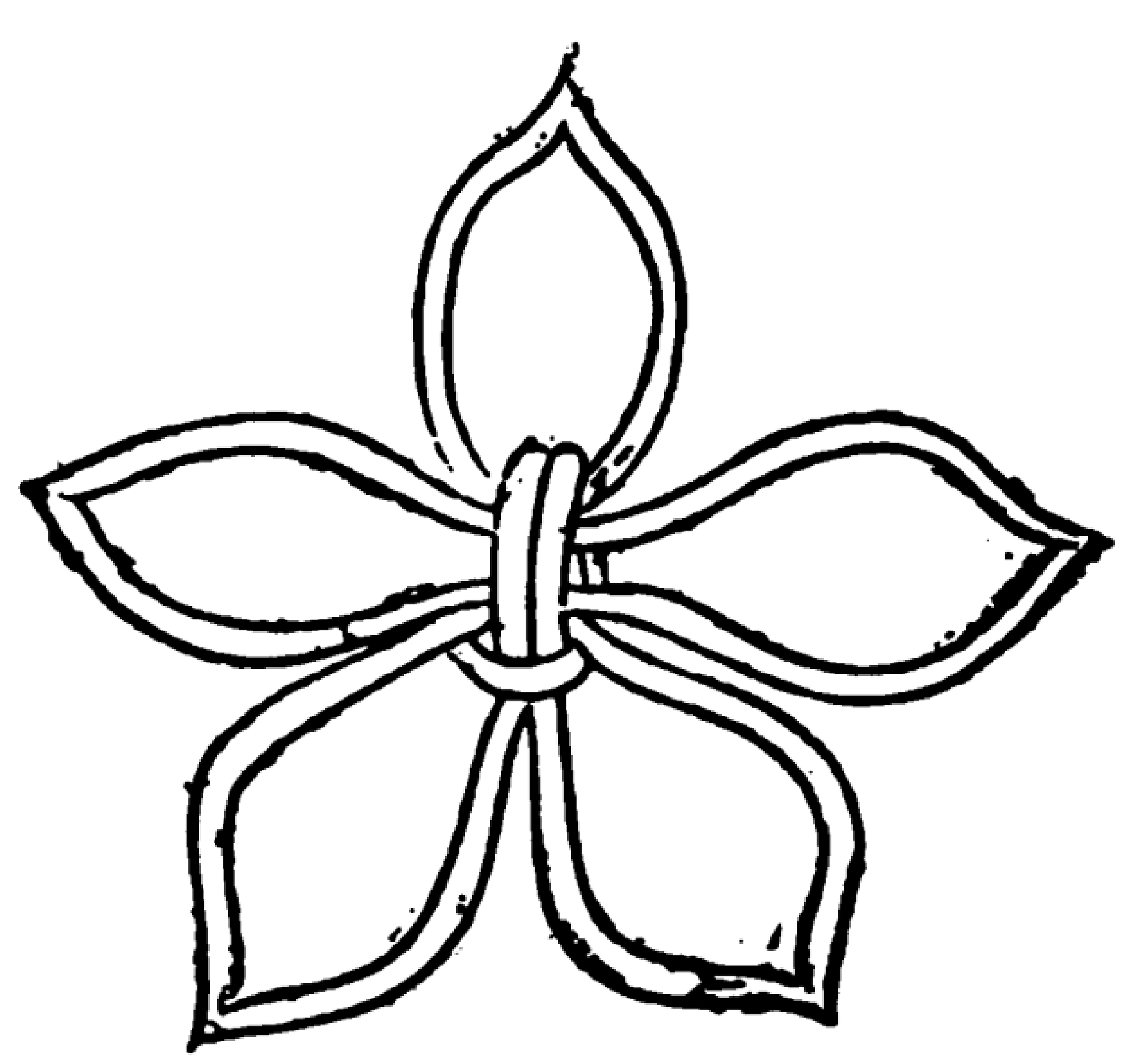
第四圖（甲）

櫻

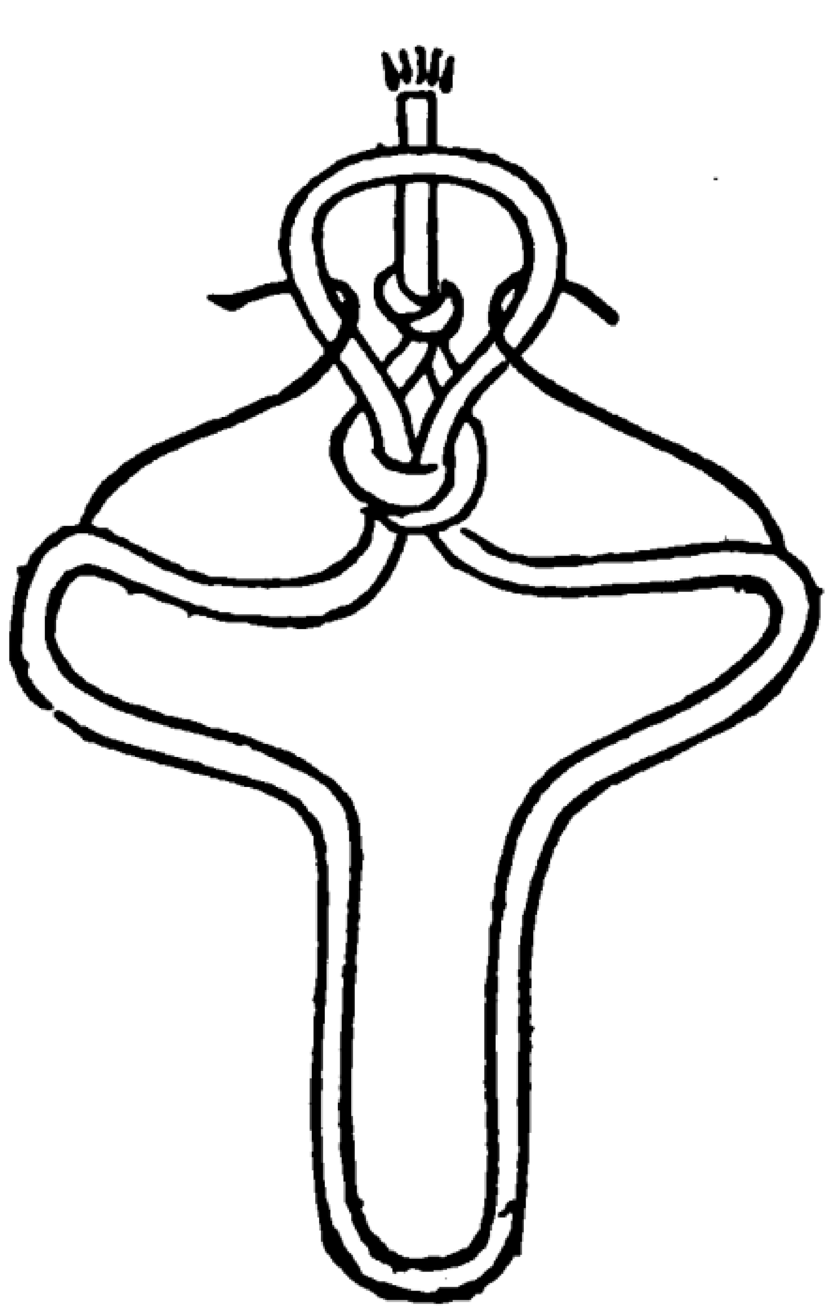


第四圖（乙）

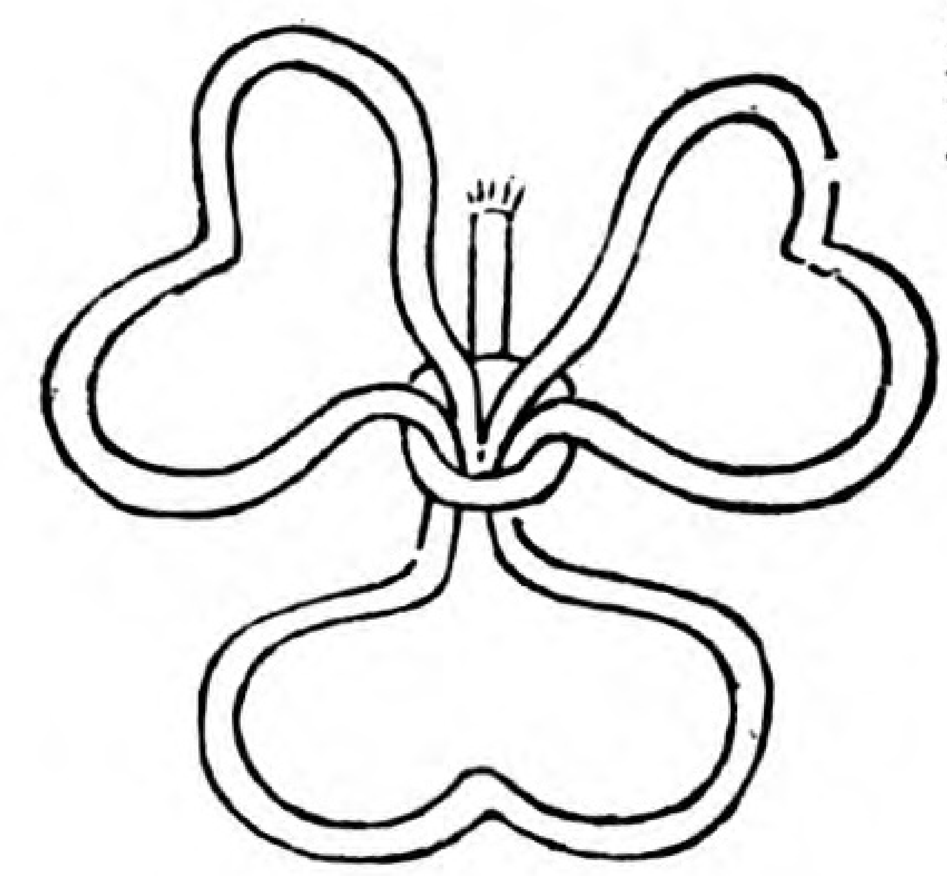
桔梗（ききやう）



第三圖（乙）



黒線の通りに兩方とも通し締めて第四圖となる



第四圖（丙）

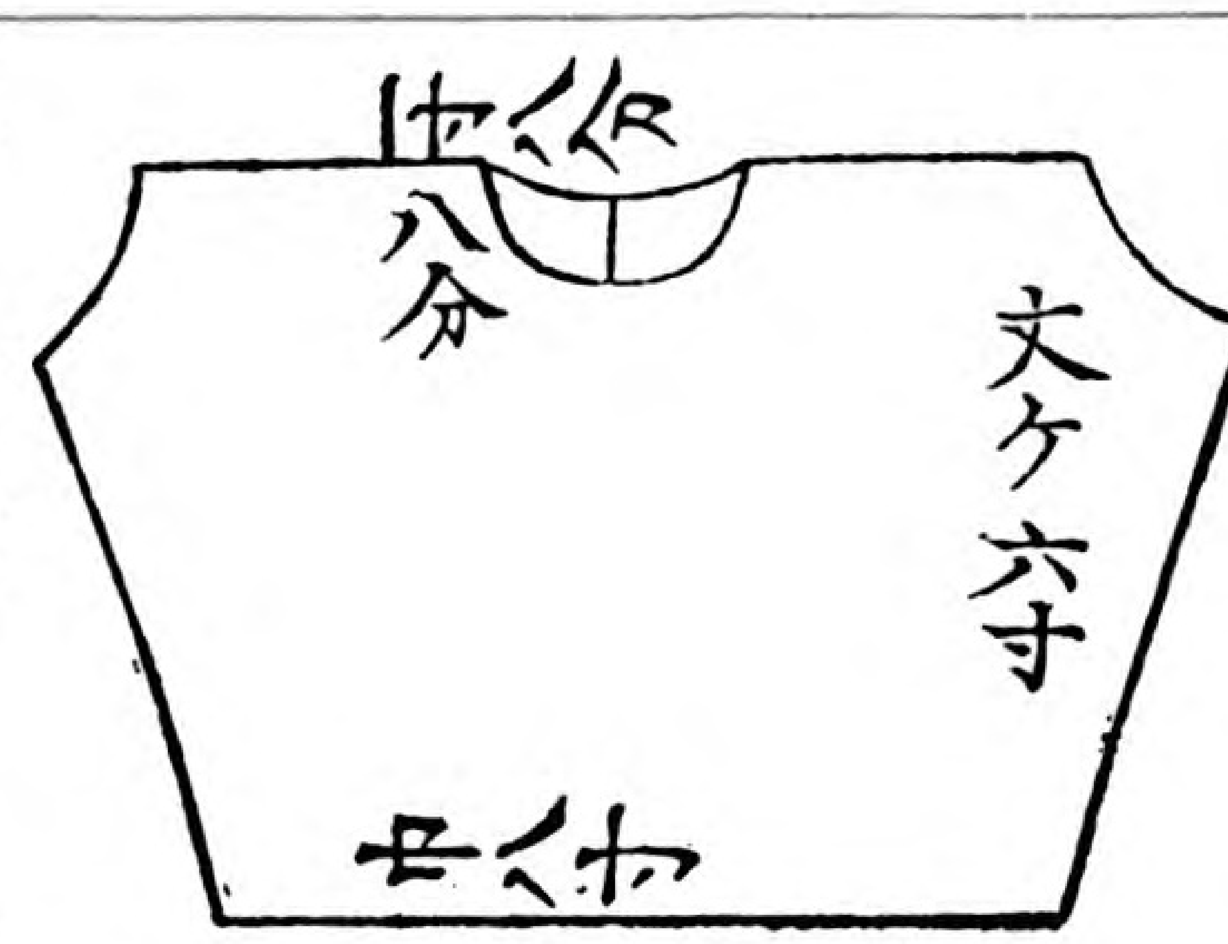
酢漿草

たちぬひ

西山たひ子

（百十二）小兒の夏服

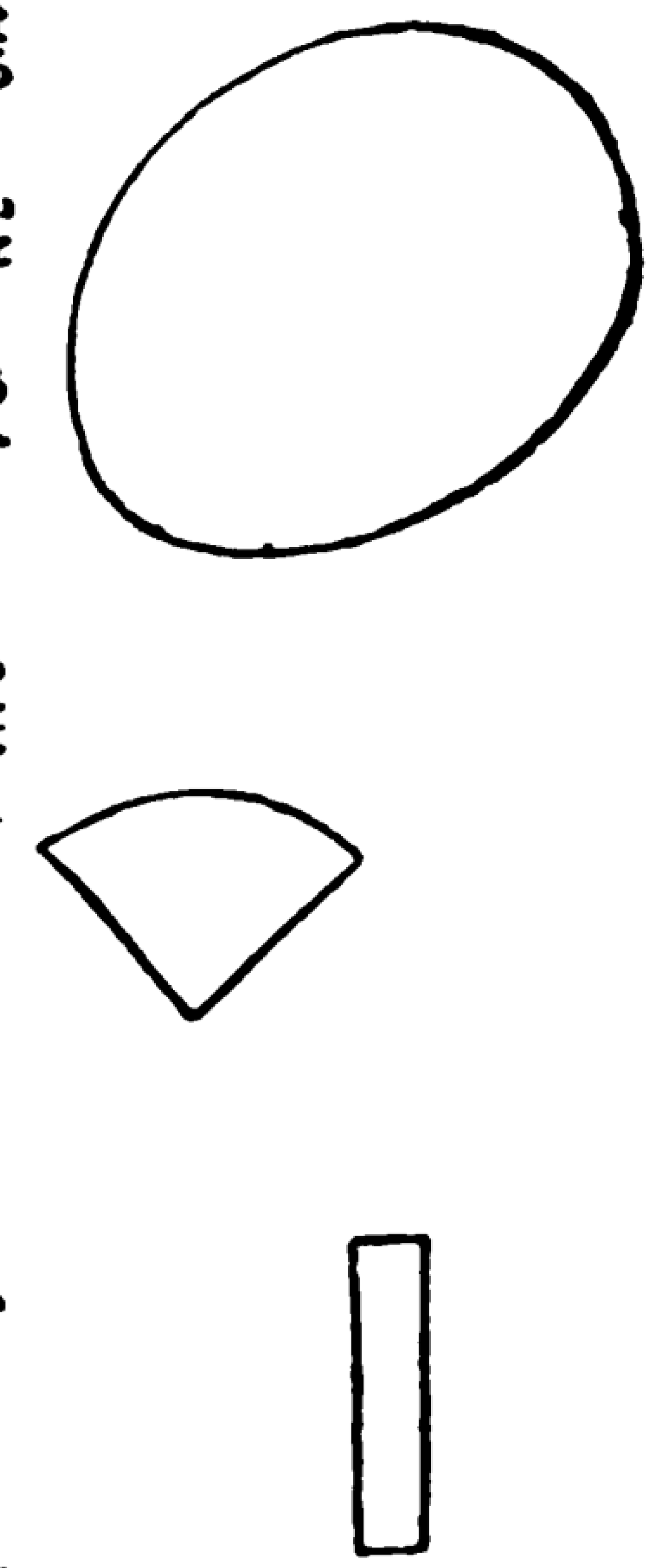
まづ巾七寸、丈一尺のもの、二つ裁ち、之を兩袖とす。



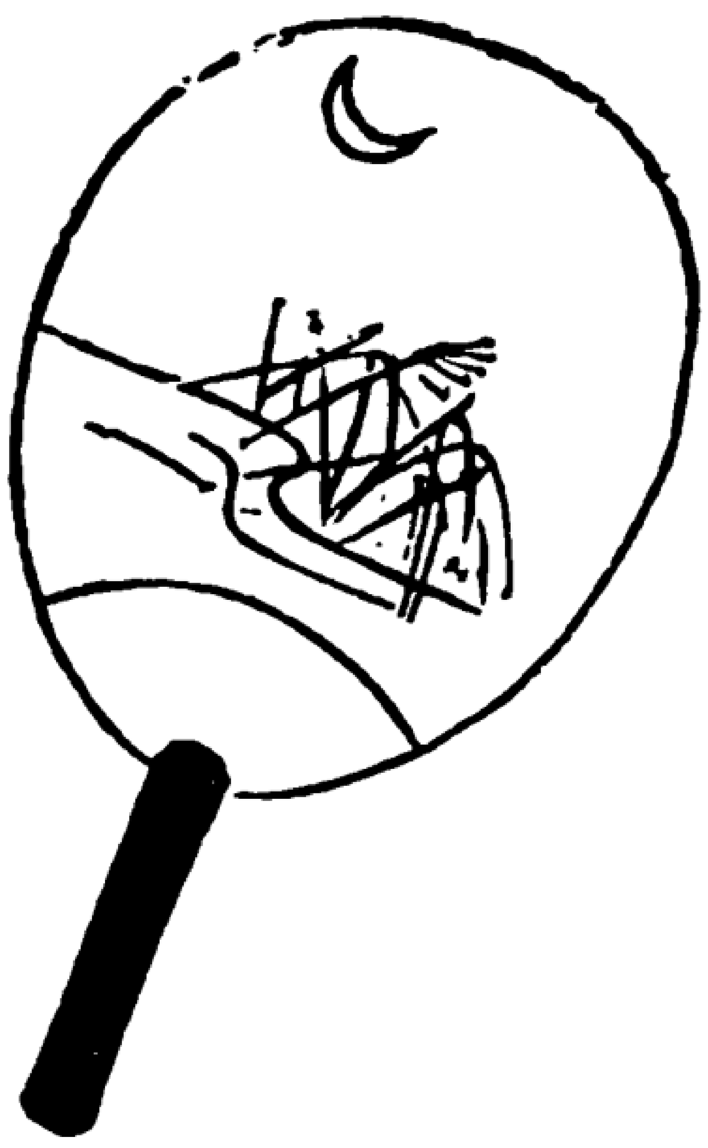
又木綿巾のものを圖の如くかきおとし、前はそのまゝになしおきて、うしろの背の眞中を、上より、五寸ばかり眞直ぐに切りわるべし、又かきおとしたる細き切は、うしろわけたる所のみかへしするなり、又腰まはりの切は、木綿巾にて、三尺ばかりを要す。但し、それなりにて袋としてつけるもよろしけれど、さやうにしては横切なれば、もし、たてにせんと思はゞ、丈一尺ばかりに切りて、はぎあはすべし。また帶切とて、胴と、腰切とをはぎ合せたる縫ひ目をかくすための切一寸、巾一尺六寸と、襟切、三寸四分、及び、かざり一寸五分巾の切、二丈六尺ばかりを要す。切は唐ちりめん、木綿、何にてもよろしく、かざりは、レース、又紅紫の唐ちりめん等を多く用ゆる。又、二重かざりとて、紅と紫、あさぎ、白等を重ねて用ゐれば、かざり切二倍

を要すれど、いとうつくしくなるものなり。但、之は、一ッ身を着る小兒のものにて、小し大なる小兒は、其の子の丈と巾とを見、之に應じて、つもりたつべし。ぬひ方は次回にゆるべし。

守りぬひ團扇



上圖の如く形を、厚紙に裁ちおき、丸き形の上は、綿少しばかりを入れ、白ちりめん、白繻子、白りんず何にても、すゞしの切を被せ厚紙の裏にかへして、のりにてはりつけ、裏を千代紙にてはりまた他の形紙にも、各切をはり、裏を千代紙にてとめ、圖の如くのりにてはりつけ撫子の花すゝきはたるなど、かきたるは、めでたし。



だいどころ

筍の附燒

竹の子の、中程より、うへの方をきり、二つに割り、串に刺し、兩側より、能く燒き、やけたるとき、胡椒、又は、きのめ抔、加へたる、醤油に、味淋、少しを、投れ、二三度、附燒に、なし、串をぬき、能程に、きりて、用ゆ。

蒟蒻がんもどき

蒟蒻を、たてに、二つにきり、又小口より、薄くきり鹽にて、もみ、能く洗ひ、醤油にて、味を、つけ、布巾にて、水氣を、去り、胡麻油にて、あげ、水に、浸して、油氣を洗ひ、醤油、加減よく仕かけ、前の、こんにやくに、はすいも、けづり牛房抔投れ、生姜汁の、口にて、用ふ。

慈姑海苔巻揚

くわゐを、能く洗ひ、皮を剝き、山葵おろしにて、おろし、摺鉢にて、能く摺り、メリケン粉と、醤油、少しを、加へ、摺り交せ、淺草海苔を、二枚程おき、其上に、すりたるくわゐを一分位の厚さにのせ、せり、三つ葉の類を、こまかに、きざみ、ぱらりと、ふり、端より、巻きて、胡麻油にて、あげ、小口より、能程に、きりて、用ゆ。

山の芋飛龍頭

山の芋の、皮をむき、山葵おろしにて、おろし、よくすり、豆腐、少量と寒ざらし粉、少量を、投れ、よく摺り交せ、推竹、木くらげ、はす、銀杏抔、ほそくきりて、入れ、能程の、形になし、胡麻油にて、揚げ、生姜醤油にて、用ゆべし。



源氏物語講義（廿七）

下田義天類

命婦はまだおほとのごもらせ給はざりけるをあはれに見たてまつる。おまへのつぼ前栽のいとおもしろきさかりなるを御らむずるやうにて忍びやかに心憎きかぎりの女房四五人さぶらはせ給ひて御ものがたりせさせ給ふ成りけり。此の頃あけくれ御覽ずる長恨哥の御繪亭子院のかゝせ給ひて伊勢つらゆきによませ給へるやまと言の葉をももろこしの歌をたゞそのすぢをぞまくらごとにせさせ給ふ。いとこまやかに有さまをとはせ給ふ。

話頭一轉してこれより物語は宮中のありさまを叙する

なり。
○命婦はまだおほとのごもらせ給はざりけるをあはれに見奉る。命婦は申すまでもなき靭負命婦なり。おほとのごもるは大殿籠るにて　陛下の寢殿に入らせ給ふことをいふ言葉なり。おほとのごもらせ給はざりけるは未御寢につき給はざりしなり。あはれに見奉るは命婦が　陛下の此の御志をあはれに御いとほしき事に見奉りしなり。此の所を萩原氏の　評釋に評して云はく。是より命婦が歸參りたる事をかたるなり、さて其の歸りたる事をば省きて命婦が思ふ心より書き出てられたる中々にめでたし。上に『夕月夜のをかしきほどに出し立てさせ給ひてやがてながめおはします』と云へる所をうけて繼ぎたる所なり。能く〳〵味ふべしといへり。この注意例のことながら甚よし。即第十九回の講義より前回の講までは二條の里亭の事を叙したるものにて物語のある一方面をあらはしたるなり。茲よりまた立戻りて宮中のさまを書きつゞけたる所なれば第十八回の終りへ引きつゞけて見るべき所なり。

○おまへのつぼせむさいのいとおもしろきさかりなるを御覽ずるやうにて、

○おまへとは御寢殿の御前をさしたるなり。清涼殿の西庭の事なり。○壺前栽とは少さき植込の事なり前栽は植込のことにて壺とは狹小を意味せること葉なり。今も中庭などのさゝやかなる所をつぼ庭といへると一般なり。○いとおもしろきさかりなるをとは其の植込中の秋の千草の花咲きこぼれていとおもしろき盛なるよしなり。延喜元年に清涼殿の西向の中庭に草を植ゑ木を加へさせ給へることありし由河海抄に見ゆ。その秋草の花ざかりにていとおもしろき最中なるをなり。御覽ずるやうにてとは、　陛下がその秋草の花ざかりにていとおもしろき最中なるを御覽ずるやうにてなり。やうにての字に眼をつくべし、其の實は叡慮此のおもしろき秋草の上にあるに

てはましまさねど殊更にこの花ざかりを御賞観あそばすやうにして桐壺の更衣の上を御追懐遊ばさるゝ由聞かせたる文字なり。上段命婦の詞に『云々むせかへらせ給ひつゝ且は人も心弱くみたてまつるらむとおぼしつゝまぬにしもあらぬ御けしきの心ぐるしさに云々』とありし所と同じ意味の御擧動にて深く人目を憚らせ給ひつゝ更衣を御追懐遊ばさるゝ趣をそれとなく知らせたる詞なり。

○しのびやかに心にくきかぎりの女房四たり五人さぶらはせ給ひて。　極ひつそりと小意氣な女中衆なかり四たり五たり御前に侍らはせ給ひてなり。

○御ものがたりせさせ給ふなりけり。御心やすめに古今の人の上の御話など遊はしておはします所へ靱負の命婦が歸參して御前へ伺候したるよりなり。御ものがたりせさせ給ふなりけるは御ものがたりせさせ給ふ所なりけりの義なり。即これまでが命婦の歸參したる時の宮中の様子なり。

○此の頃あけくれ御覧ずる長恨哥の御絵　長恨哥の事は第四回の講義に其の全文を揚げて委しく講じ置きたり。此の物語の下染となり居る所のものなり。こゝに作者が又候之をとり出して　陛下朝夕の御覧の料に供したるは態と其の下染の地色を顯はして長恨哥と此の巻との關係ある所を知らしめたる筆法なりさて、此の頃あけくれ御覧ずる長恨歌の御絵とは陛下が此の頃中明暮のやうに御覧遊ばす所の長恨歌の心を描きたる御絵と云ふ程の義なり。陛下が此の長恨歌を明暮に御覧せらるゝは更衣を揚貴妃になぞらへ我が御上を玄宗帝に比べさせられて御同情の禁じ難きに此の御擧動のあらせらるゝ趣なる事は勿論の事なれども嘗て此の物語の始即更衣の御存生中世間の人々が此の更衣の事を揚貴妃に擬したる由書き出したる所の結尾を付けむとて何となきやうにこゝに取り出したるものなり。作者の用意能く味ひみて察すべし。

○亭子院の書かせ給ひて伊勢貫之によませ給へる云々
亭子院とは宇多天皇の御事なり。此の頃七條の以南油小路の以東一町ばかりの所に亭子院といふ御殿ありて宇多天皇御讓位の後暫時こゝにれはし坐しゝ故に此の天皇を亭子院とは申すなり。宇多上皇御親彼の長恨歌の御繪をかゝせ給ひて伊勢と貫之とに其の賛をさせたる卷物なるべし。實際かやうなる御卷物の有りたる事ならむか。素より作りものがたりの事なれば其の有無の穿鑿は不必要なる事なれども伊勢の家集に『長恨歌の御屛風亭子院のかゝせ給とて其の所々をよませ給ひけり。御手にて、もみぢ葉の色見えわかでちるものは物おもふ秋の涙なりけり。玉すたれわくるも知らで寢しものを夢にも見じと思ひかけきや云々』とて猶あまたの歌を載せたり。貫之の歌は今の世に傳はらざれ共彼の御時代にかゝるものを作らせ給ひけむ事は推量り參らするに足るべし。此の物語はかゝる瑣末の事がらまで大かた其の準據とする所ありて放縱に筆を驅りたて架空の妄誕を書き綴りたることき痕跡は見えず。これまた此の物語を講ずる人の往古より敬伏し來れる所なり。心得おくべし。

○やまと言の葉をももろこしのうたをも、は申すまでもなく歌をも詩をもなり。

○唯そのすぢをぞ枕ごとにせさせ給ふ。其の筋とは長恨歌の事に類せむ詩や歌や若くは繪書文章等をなりまくらことゝは寢ものがたりなどにせさせ給ふ由なり。

○いとこまやかに有さま問はせ給ふ。かゝる所へ今靱負の命婦が歸參したる故に待兼させ給へる御樣子にて命婦に對していとこまやかに二條の里亭の有さまを問はせ給ふなり。

以上は再び取束ねて大意をいふ必要もなかるべし。

漢文學講義（十七）

大林弘一郎

十四、登富嶽記（續）

日既過晡。乃入一石室宿焉。及暮相集者二三十人共重被擁爐。團欒駢坐。終宵不能眠也。蓋石室者。柱梁以巨材。高五六尺。屋上屋外。積石圍之。大者可容六七十人小者不過容十數人。每合四五棟。制度堅牢。非尋常家屋之比也。屋上。積雪。穿竇取滴。以供烹炊之用。若茗一碗。殆貴於美醞。山上乏於水可以知耳。

この一節は、室に入れる時のさまをのべたるなり。日も既に、七つ過ぎたる頃となりしかど、乃石室に入りて宿りぬ。暮の頃に及びて、旅人の集るもの二三十人にもなりぬ。ともぐに、衣ものを重ね着て、爐の傍にうち寄り、まどゐして、よもすがら、眠ること能はざりき。さて、この石室は、大なる材木もて、柱とし、梁とし、高さは五六尺もあり、屋上にも、屋外にも、石を積みて、之をとりかこみ、大風を防ぎ、大なるものは、六七十人も容るゝ程もあれど、小なるは、十餘人を容るゝに過ぎず。每合に、四ツ五ツもありて、その造り方は、まことに堅固にして、通常の家のやうなるものにあらず。その屋根の上には、雪を積み上げ置きて、その雪に穴を穿ち、水の滴を取り、その水もて、飯を炊き、茶を煮などする用に充てたり。その不便思ひ遣らるゝ。されど、この處にて、一椀の茶を飲むは、殆、美酒を飲むよりも貴きなり。山上の水に乏しきこと、これにて知るべし。因にいふ。雪より取れる水にて、炊きたる飯は、異なる臭氣ありて實に、食し難しと。これは、米のとぎ方の不完全なるにもよるべけれど。

夜既過寅。導者曰。盍拜朝暾。衆皆望頂而去。余亦出室。凛冽透骨。手足欲絶。杳望東

方辣撻彩レ天。金烏將レ躍。升甚速。大如二車輪一。又升丈餘。星辰已沒。山色漲レ紅。下眺二諸山一。峰巒纔露。村落猶黑。仰瞻二絕頂一。壁立萬仞。攀路欲レ絕。與二平素所一レ見。大異二其觀一。自レ是躋甚艱。一路如二馬背一。左右皆壑。傴僂躪踏。漸達二于頂一。氣息喘急。目搖心悸。顧二看人顏一。蒼黃失レ色。若下不二火食一者上矣。

此の一節、室より出で、太陽の昇るを見たる景色を、頂上に達するまでのさまをのべたるなり。

夜は、既に、ふけゆきて、寅の刻、今の四時過頃になりぬれど、導者いふ「朝日を拜み給はずや。」と。一同これを聞きて皆出で、頂をさして上りゆけり。余も同じく室より出でしに、寒氣は一きは烈しく、骨に徹るやうにて、手足も裂くる如き思をなせり。皸は、ヒヾワル、ことひゞのきれることなり。さて、遙に東方を望み見れど、光焰辣撻として、天にさしかゝやき、日輪躍り出づるが如く、さし上ること甚速なり。その大さは車輪の如く、また升ること一丈餘にして、星の影もきえ失せ、山は日光をうけて、紅色を呈したり。下の方諸山を眺めど、峰のみ纔に現れ出で、村落は、なほ暗くして、たゞ黑くのみ見えたり。仰いで絕頂を見れど、壁のごとく直立し、萬仞もあらんやうに見え、攀ぢ登るべき路も絕えたる心地して、平素遠方より見る所とは、大に樣子かはりたり。この九合目より上は、ことに、山は急に、路は嶮しくなれる故に、躋るものは、甚、艱めるなり。馬の背の如き所、一筋の路あり。左右は皆深き谷なれは、傴僂して、身を屈め、躪踏して即足に力を入れて、上りゆき、漸、頂上に達しぬれど、いきざしもせはしくなり、目はくらむ如く心はおのゝきて、動氣なづまらず、顧みて人々の顏を見れど、みな、色は青く黃なる色に變じ、殆、仙人などの如く、火にかけたるものを食せざるものゝやうに見えたりき。こは、一つは、空氣の稀薄なるが爲にもよるべく、

又、一つは、高き所なる故、人々おぢけ心の附きたるによるなるべし。

絶頂窪然爲窪。半以雪埋。深不可測。蓋古噴火窖也。周圍里餘。有祠。以石疊之。爲淺間神廟。窖之四邊。突兀爲峰巒。其大者爲劍峰。高四十丈。其他名伊豆嶽成就嶽等者。巉峻崛起。輪次相連。衆皆一週窖端。廣狹不一。有不可並行之處。若誤一步。陷無底之坎。其危險不可道也。山頂巖窟中。有水二處。一爲金名水。一爲銀名水。味殊清冽。左轉至南端。大洋在眼下。島嶼之駢羅。船舶之往來。如僅撒布粟粒。過於小。不入觀。最遠之處。淡靄糢糊。茫乎不明瞭。與向所料度。不能無徑庭也。

此の一節は、頂上の景色を叙したるなり。

絶頂は深く窪みて穴となり、半は雪にて埋もれり。その深さ測りがたし。これ、即、昔時、この山の噴火せし火口なり。その周圍は一里餘あり。又一の社あり。石を積みて立てたり。これ淺間の御社なり。さて、穴の四邊は、突兀として、幾個も峯をなせり。その大なるものは、劍が峯といひて、高さは四十丈もあり。その他に、伊豆が嶽、成就が嶽などいふ峯もあり、峻しく聳え立ちて、次第に相連れり。

この穴の周圍を廻るを鉢廻りと稱す。衆とともに、穴の端を一週せしに、その路の廣さ一樣ならずして、處によりては、並び行くべからざる處あり。もし一步ふみ誤らば、底の見えぬ坎の中に落ち入るべし。その危きこと、いふべくもあらざるなり。又、山頂の岩の穿れたる處に、清水の湧き出づるもの二つあり。一つを金名水といひ、一つを銀名水といへり。その水の清くして冷かなるは、實に奇といふべし。これより、左の方に轉じて、南端に至れば、渺々たる大洋は、眼下に見えたり。多くの島々の駢び連れるさまも、船の往來するさまも、高き所より見る故に、い

かにも小くして、僅に、粟粒をまき散したるが如く、しかとは、目に入らず。最、遠き處は、淡靄のかすみこめたるが爲め、茫として、明かに見え渡らず。さきに、心に思ひはかりし所とは、大に、相違あり。徑庭とは、隔遠する意なり。

時山風稍起。流雲屢變。欲急覓故道而去。導者示走路。即與砂偕下也。容足僅數寸。欲停樹杖而坐。又下又停、至五合坂而止。砂皆輕鬆不甚小。瞬間走數里。快亦甚矣。再過駒廻。喘氣漸治。顏色復前時。未午。身憊足繭。偶有牝馬、邀客。乃駕歸吉田村。回首望嶽。白雲嫋嬝繞山腰。而孱顏尚露雲端。如莞爾而送我行。想朝遊九天之上。暮千歲之雪。夕坐十笏之堂。苦三伏之熱。一日之間寒熱相異。人世之盛衰、亦如此。而已。余於是有所感。遂剔旅舍孤燈記之。

此の一節は、山を下るさまをのべ結末、更に、感慨をのべて、この篇をむすびたるなり。

時に、山風吹き起り、雲のさまも、屢變じけれど、急に故の道を覓めて下らんとす。こは、この高山にありては、忽に、雲の起り、風の變じて、非常なる難に遇ふことと、まゝ之あり、實に、人々の恐るゝ所なれどなり、流雲とは、浮雲といふに同じ。

この時、導者、一の走路を示し、こゝより下らしめたり。これ、所謂、砂走といへる所なり。やがて、皆、この路を下れり。この路は、頗急にして、足を運ぶこと自由ならず、たゞ砂とともに、すべり下るなり。足を容るゝこと、僅に、數寸の間のみにして、もし止らんとするときは、杖を立て、之にすがり付きて息ふなり。又下りては息ひ、又下りては息ひつつ、五合目までは、僅の時間にて下り來り得て止みぬ。かく小石の上をすべり下る故、草鞋などは、暫時にして、破るゝといふ。又、砂は皆、燒け石なれど輕くして、すのあきたる如く、恰、かる石の如く

にして、甚小なるものはなしといふ。かく一瞬の間にして、數里を走る故、甚、快きものなりとぞ。さて、再、駒廻に至りて、胸の動氣も、次第に治り、顔色も、前の如くなれり。時刻は、未、午の刻に至らざれども、身は疲れ、足は、皮に皺を生じて、繭の如くなりて、甚歩行に艱む折柄、たま〳〵、牝馬の客を待つものありしかば、之を傭ひてうち乘り、吉田村に歸りぬ。さて、首を回して富岳を望めば、白雲、たなびき渡りて、山腰をめぐり、山頂は雲の上にあらはれて、笑を含める顔して、我が行を送れるが如くに見えたり。孱顔は巉巖なり。又山額を顔といふなり。)是に於いて、思ふやう、「朝には、九天の上に登り、千歳消えざる雪を食ひたりしに、夕には、十笏ばかりなる小さき家に坐し、三伏の炎熱に苦む、同じく一日の中に、かく寒暑の異るかと思へば、實に驚くばかりなり。凡、人世の盛衰ある理も、亦此の如きものなるのみ。」と。余は、此のことに感ありて、遂に旅舍の燈火をかき立てつゝ、この記文をしるしたりとなり。

九天とは、天に九重ありといへるより起れる語なり。十笏とは、笏の長さ二尺六寸を度とする故、その長さを十倍したる程の廣さといふ意にて、小なる堂をいふなり。三伏とは暑中のことにて、初伏、中伏、末伏の三をいふなり。金氣の伏藏する日なりなど、長き說あれど略す。たゞ、夏至の後、第三の庚の日を初とし、第四の庚の日を中とし、立秋後の初庚を末とすることゝ知るべし。

この篇は、景色を敘すること、順序ありて、一々目前に見るが如く、讀むものをして身、實際に山に上るが如き想あらしむ。句も、亦、巧なる所ありて、自、味あり。すべて、記事文には、その實況を文の上にあらはすこと、最、肝要なれど、これ、まことに難きことなり。讀者、心してこの篇を見るべし。

古來、富士の紀文は、都良香の作、富士山記を初とし、

近世には、荘子謙の芙蓉記行、松島坦の記文、平澤元愷の記文など、其の他、國文のものもあれど、或は、難字多く、或は、虚飾多く、各、得失長短ありて、初學の人の文範ともなし難き嫌なきこと能はず。この篇の如きは、平易にして、よく實況を寫したりといひておかるべしと思はるゝなり。

布美安波勢（七）

白松園主人寄

七月

秋の花どもうゑたる所

左勝　保世

秋の花をめでうゑられし、何がしの前栽よ、なにくれと木草おほかる中にも、目とまるは萩にぞありける。しら露の枝もたわゝにれきたるに、花の色いとつやゝかにうつくし。なまめきたる女郎花のうちなびくに、ぬしはとへどいはぬ色なる花のかげに、誰ぬぎかけし藤ごかまのにほひなつかしく、吹きくる風にいとすすきのあやなすに、はたれるむしの聲をも、そへまほしうなむ。

右　祝之

ひとつ葉の春べのほどは、むげに品なくしもけをされたりし下草の、今なん世にめづらしき花どもの、色いろさかりみせたるに、あやにしきのめうつしにも匂ひあまれる心ちのせらるゝに、大かたのますらをの、こゝろさへうつろひぬべけれど、まして所せきたをやめの、心やりにいとなみ立んは、名たゝる大井さが野の秋も、よそならずなん。

評判　左の文おもしろし。右の文ますらををとたをやめのことといへる、その心さだかにきこえかたしまけぬべし。

右勝　侚文

やり水のかたへにうゑたる秋の草ども、露いたうおきわたしたる花のいろ〳〵、萩のいとうつくしう、男鹿

のつまこひわたるもおもひやられ、女郎花のえんにやさしう我おちにきと人にかたるなど、ほうしだに口かためしけんもをかし。尾はなのうちまねく袖つき、こゝろひかれて、われかともとはまほしう、いづれもいづれも見すてがたう、さうじ明はなちゐたるに、また暮はてぬものから、虫もかつ〴〵なき出でゝ、あはれさかぎりなう。

右　清　風

秋の花を植ゑませたる、いろ〳〵咲きみだれて、つねの年よりもみ所おほく、つくりわたせる野べの色をみるには、夏のあつさもわすられて、涼しうおもしろくあくがるゝやうなり。おほくの花どもの中にも、おしなへたるをかしさは、すゝきこそあれ、朝露にぬれてうらなびきたるは、さばかりのものやはある。きちかうのはなは、むらさきのゆかりとおもへばあはれなり。いともなまめくをみなへしを、夜な〳〵露やむすばんとこれのみうしろめたうなん。

評判　左の文よし。右の文、なつのあつさもわすられてといへるもわろく、おしなべたるをかしさはといへるわたり、清少納言の枕冊子の文に似過たり、まけぬべし。

左　持　徳

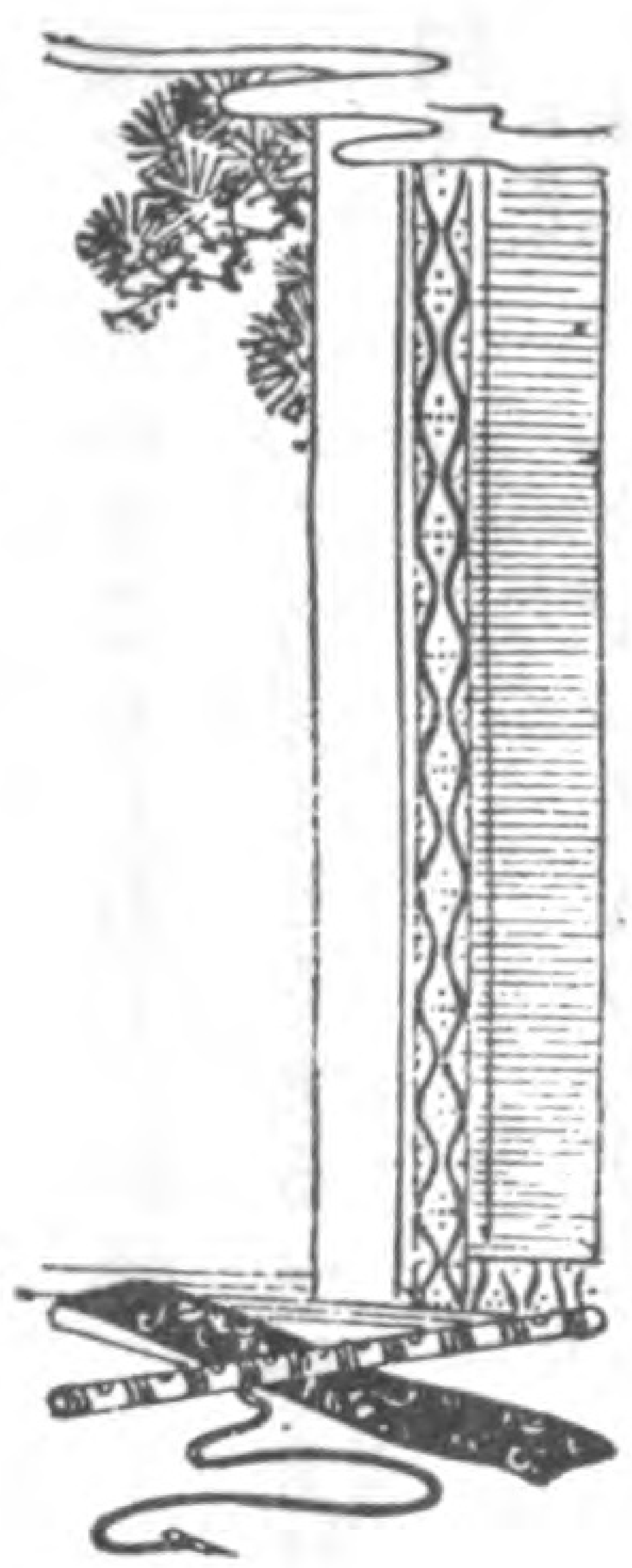
はかなき小柴垣など、ゆゑあるさまにしなして、秋の花のかぎりをうゑたるは、いと〳〵おもしろき庭の面なり。そのひま〳〵にたちまじりて、尾花の物よりたかうさし生ひたるが、風にみだれてうちなびくに、もゝ草の露どもを、たえにし玉のみだるゝやうにほろ〳〵とまろびておつるも、みどころありけるものになん。

右　重　豊

えらみうゑたる草の花どもの、今やとり〴〵にをかしうて、めもうつろふばかり咲きにほひたり。あるが中にも、ゑをに女郎花など、こよなうたけだちたる朝顔の、をかしげにはひまつはりて、おのれいざとき顔つ

きにさきゑみたるあした、眞萩がゑだの、ものよりたをやぎて、いとたもげなる花のうへにおきたる露の、ほろ／＼とうちこぼるゝゆふべなど、すべて此ころのあけくれの、あはれさらに／＼いひしらず、あなをかしの花ぞのや。

評判　左右の文とも、たくみにいと／＼おもしろくかきゑたり、もちなるべし。右の文の中に、さきゑたるとあるは、咲きゑみたるみの字を、うつしおとせるにぞ。



教梯抄（七）

古今集戀三

題しらず

こひしくば下にをおもへむらさきの
ねすりのころも色にいづなゆめ

よみ人しらず

後撰集戀三

おやある女にしのびて通ひけるを男もしばしは人にしられじといひはべりければ

なき名ぞと人にはいひてありぬべし
こゝろの問はばいかゞこたへむ

よみ人しらず

同

同

女のもとにつかはしける

藤原清正

つれも無き人もまけじとせしほどに
我もあだ名のたちぞしにける

同

同

女に心ざしのあるよしをいひつか

はしたりけれど世の中の人の心さ
だめなけれどたのみがたきよしい
ひて侍りけれど

在原元方

淵は瀬になりかはるてふあすかかは
わたり見てこそしるべかりけれ

同

同

男のけしきやう／＼つらげに見え
けれど

小町

こゝろからうきたる舟にのりそめて
ひと日もなみにぬれぬ日ぞなき

新千載集戀二

題しらず

法眼澄基

ことの葉になはてそまよへいつはりと
思ひもしらぬこゝろよはさは

古今集戀四

題不知

讀人しらず

いつはりの無き世なりせばいかばかり
人のことの葉うれしからまし

新葉集戀三

日前宮によみて奉りける五十首
歌の中に

前中納言爲忠

うきにたへてしたへどこそはあひ見つれ
長かるべきはこゝろなりけり

古今集戀四

題しらず

素性法師

そこひなき淵やはさわぐやまかはの
あさき瀬にこそあだ波はたて

拾遺集戀上

たいしらず

わすらるゝ身をばおもはず誓ひてし
人のいのちのをしくもあるかな
右近小將季繩女

玉葉集戀四

題しらず

我もかく身にしたかはぬこゝろもて
ひとのかはるを何かうらむる
前參議家親

古今集戀五

たいしらず

よみ人しらず

世のなかの人のこゝろははなそめの
うつろひやすき色にぞありける

同

同

題しらず

典侍藤原直子朝臣

あまのかる藻にすむ虫のわれからと
ねにこそなかめ世をばうらみじ

後撰集戀五

忍びてかよひ侍りける人今かへり
こなどたのめおきておほやけの使
にいせの國にまかりてかへりまう
て來てひさしうとはず侍りければ

少將内侍

人はかるこゝろのくまはきたなくて
きよきなぎさをいかで過ぎけむ

新勅撰集戀五

健保六年内裏歌合に

前關白

月のまへに風もふきあへずうつりゆく
こゝろのはなも色は見えけり

（以下次號）

國語漢譯の考

赤松景福

清の陸次雲が八紘譯史巻之一、東部日本とある所に我國の歴史の大略を識して、其末に我國語を左の如く譯せり。

譯語

唆刺天　只地　非祿日　讀急月　禿計月　虚路日　一故都年紀　去多子又去微且多一　扶達子又去且多二　窑子倏且多三　學子搖搖子四　意子子難難子五　後子六　乃乃子七　效八　个个乃子九　多十　三字水冷　挨撥水暖

おのれ嚮に大八洲雑誌巻之百四十五、古錢文考にもいひし如く、彼支那人が我國の事を記せるは、傳聞の誤多かる例にて、是もいといかゞはしく有れど、我國に關れるものなれど、今愚考のまゝ聊か爰に識す。右の譯語○唆刺は唆刺の誤にして虚をいふか、唆は彼音スヲフにてソに近く刺はヲなり、只は彼音ツゥイとあれど、地のツに用て或はチといふが足らぬにや。琉球國部の譯語には只尼とあり、非祿こは琉球國のにも非祿とありて全く同じ、非はフィなれど日に充たるものにて、下の祿の字いかゞあらむ、○讀急及禿計この二語は共に月ときこゆ。但し一は天象の方、一は年月の方なるべし。○虚路こは頃といふことにや、○一故都こはいかゞなり、○丟多子は一をいふ、多の音はトヲ、子の音はツゥなれば、多子をトツに用ゐたるなるべし、下にも此子の字多し。○扶達子は二なり、○窑子倏且多くは窑子の二字にて三と聞ゆるを、倏且多の三字あるは餘れるが如し。○學子搖搖子こは四を譯せるやうなれど、學の音やなれど學子は八といふに似たり、又下の搖搖子とあるもいかゞなれど、此等は學子又搖搖子といふ誤にもや。○意子子難難子此も意子子の三字にて五と聞ゆ。○後子は六といふなるべし、○乃乃子乃は音ナイ(本ヌアイ)なれど、乃乃をナヽとして、乃乃子は七と聞ゆ。○效音ヤウを八に用ゐたる

か、〇个个乃子此个は箇と同じ字にて、（常に何个國何个村などいふが如し。）音コヲなれどコに用ゐて、これは九をいふ。〇多は音トヲなれど十をいふ。〇三字水は寒といふなるにや〇挨摋水は暑といふなるにや。

嘉平田舍翁云、我御國言を支那人の譯したるも、天皇を主明樂美御德、あめたらしひこといふを阿毎多利思比孤、やまとを耶摩推又野馬臺、つしまを都斯麻、つくしを竹斯國まつらを末盧國など書ける類、吾儕字の例に異なる事なし、又彼國後世南宋といへる時に御國の僧安覺がいへる言を譯めたるを見るに、筆を分直、墨を蘇彌、頭を加是羅、手を提、眼を媚、口を窟底、耳を弭々、雨を下米、風を客安之、鹽を洗和、酒を沙婿などいへる類、世降りて音韻やゝ舛差たれども、猶古のおもかげ殘れる所あり。

おのれ按ふに、右の主明樂美御德（主は須とも書けり）は尤も古くより、和漢の書に見えたり。是は、好字の限り集めしものなれど、彼支那人の譯めたるものとは思はれず、偉次に安覺がいへる言を譯めたる中、筆を分直、分は彼音もフンにて直はでなれどふでなり、〇墨を蘇彌、この蘇彌はすみと聞え易し、我國にも蘇素等の字をスと呼べる物あり、〇耳を弭々彼音ミイミイにてこれもよく聞ゆ、〇雨を下米、下はアといふが、詩家の語に下三連などいへり、彼音下はヤア米はミイなり、〇頭を加是羅〇手を提〇眼を媚〇口を窟底〇酒を沙婿此等や、其轉訛あるやうなれど、大抵似通ひて聞ゆる樣也〇鹽を洗和とするは頗る遠きやうなれど、洗は彼音スイなれどヲにも用ゐて、（和蘭陀和尚などの和もヲと云り）シヲといふなるにや。されど正しくはシホといふべからむ、〇風を客安之こも訛りてもの遠きこゝちす。右はおのが試にいへるのみにて、素より自らも當るものともせざる也。我國の言語のみなるも、考得がたきもの多かるを、まして外國の譯語などに於て、いといとればつかなき心ちすれど、讀者幸によきに見直してよ。

浮世いかだ舟

作者不詳

●家をおさむるつゝしみの事

今はむかし、浮世坊御前にしてこう申せしに、家をおさむるには、いかにすべきと仰られしに、こたへていはく、家をおさむる事は、わざはひをはらふに過たるはなし。わざはひをはらふ時は、さいはひをのづからいたるべし。されど太上感應篇にいはく、禍福は門なし、人みづからまねぐ。善惡のむくひは、影のかたちにしたがふがごとし。此ゆへに、人の心善をおこせど、善いまだなさずといへ共、しかも吉神すでに是にしたがふ。あるひは心惡をおこせど、惡いまだなさずといへ共、しかも凶神すでに是にしたがふ。それ、かつて、惡事をおこなひし事あらど、後みづからあらため悔むべし。久々にして吉慶をえん、わざはひを轉じてさいはひとなすゆへん也といへり。善惡のをこなひよりまねく也。たとひその身にいきほひ有共、はこるべからず。さはいひ有共、をごるべからず。いはんや、まづしきとてあざむくべからず。天理まことに時有。それわざはひのもとは、をごるをのみ、欲ふかき此ふたつをたねとして、いつはりあざむきねたみへつらひて。天道にそむき、人をくらまし、思ひの外なるうれへにあふ也。胡文定公のいはく。大抵、人の家は、すべからく、常に不足の所あらしむべし。もし十分の快意を隄防すれど、不恰の好事有ていづといへり。物ごと十分に心のまゝに足ことなかれ。十分なれどわざはひおこる。をよそ事々に、をのれが心にかなはざる時は、咎をおふせて、天道をうらむる、是大なるあやまりなり。天道は、その人をめぐむに、厚薄なし。たゞわが身の非をおもひしるべし。わざはひすでに身にせまりて、にはかに神佛をいのる。それ神佛にいのるといふは、わざはひのきたるべき心になし給ふなどいのる事、つねづねなるべし。つねは天道にそむきて、利欲をむさ

ばり、一國一郡のあるしならず、百姓をいためて、非法をおこなひ、めぐみすくなく、わたくしをかまへ、家老出頭ならず、主君をあざむきくらまし、をのれがりぶんのため、よからぬ制法をすゝめ、追從表裡輕薄をいたし、人をたをし、あるひはあきんどならず、人をぬき、惣じてわらぬ外の悪事をいたす、是みな天理にそむく故に、わざはひ來りて身にかうふる、時にわたりて天に祈り、神に申てのがれん事をもとむといへ共、我身天理にたがひ、佛神にそむき、世にすてられ、人にうとまれはてゝ、かのわざはひをはらふべき所なし。天のなせるわざはいは、なほのがるべし。みづからなせるわざはひは、のがるべからず、此ゆへに、祈るにしるしなく、つゐに家やぶれ、身はほろびて、妻子に同じく此うれへにつながるゝ事、めのまへにためしおほし。たゞふかくつゝしみて家を守りおさむるには、分にしたがひ、身に應じて、たかきもいやしきも、をごりをとゞめ、欲をうすくするに有。みづから欲すくなく、分際をしりて、足とする時は、心ゆるやかにして、おそるゝ所なし。是逍遙自在の仙人なり。

●後言をいふべからざる事

今はむかし、こゝかしこの中間小者あまた一所にあつまりて、をのれ〳〵か主君のあしき事共を、たがひにかたりいだしてそしる。その家の小者、わが主君のあしき事をかたりいださんと思ひて、これの御屋形はどなはどこにもあるまい。もはや、人ではない、畜生ぢやと、いはんとして、うしろを見ければ、御屋かたどのうしろに立ておはしけるをみつけて、人ではないといひなをして、佛ぢやとかたりし。まことにおかしき事ながら、人のうしろごとをぞ、すべていふまじき事なり。孟子のいはく、人の不善をいはゞ、まさにのちのうれへをいかゞすべきといへり。かくしてひそかにはかる事だにも、天のきくを、いかづちのごとく、神のみることいなびかりのごとし。景行錄にいはく、言をすくなうして、まじはりをゑらぶ時は、かつてくや

みおしむことなかるべく、もつてうれへと恥とをまぬかるべしといへり。漢の馬援がいはく、人の過失を聞ては、父母の名をきくが如くにす。耳にはきく事を得べし。口にはいふことをうべからずといへり。人のあしき事をいふ所には、わすれても居るべからず。いはんや、和してもろ共にいふべきや。その事を、をのれが耳にはいるゝ共、口より二たびいたすことなかれ。かべに耳有、石のものいふ世の中なれど、ひそかにかたる事とても、かくしたる事のあらはれざるはなし。わざはいは、かくれたるよりおほひなるはなしといへり。ましてや、一日も片時も大恩をあたへ給ふ主君の御事、かりそめにもそしりたてまつる事、大なるあやまち也。そしらんよりは、隙を申て、そのもとを立のくべし。隙をあたへられずは、心をつくして、奉公忠節をつとむべし。それにも主君の心にかなはずは、天命よはしとしるべし。をのれをかへりみて、過を思はなど、世をも人をもうらむる事有まじ。しからぬながくわざはひをとをざかり、安樂活計の身たるべし。よく此事を思ひはかるべし。浮世坊かくぞ思ひつゞけゝる。

　津の國のなにはにつけてよしあしと
　　人の身のうへかたりどしすな

●浮世坊蛻たる事

今はむかし、うき世坊いかにもして、仙術をおこなひて、長生不死の法を得どやと思ひたちけり。しかれど玉體金漿更梨火棗は、是仙人の靈藥なりといへど、これらはこの世になきもの也。つたへきく、もろこしの偓佺といふ人は、松の實を食として、飛行自在の仙人となり、趙瞿といふ人は。松脂をねぶりて服せしかど、身かろく、ちからつよくなりて、山をすみかとし、年百歳にいたりても、かたちおとろへず、よるは身よりひかりをはなちたり、是心やすきくすりなり、服せどやと思ひ、まつやに十斤をもとめ、五たびねり〱して水にさらし、茯苓一斤をくはへて、あさゆふつねに

ふくしけり。かくて三七日の後、こゝろにおもふやう、今はさだめて身もかろくなりぬらん。とんで見むやとおもひ、書院ののきにあがりて、雨おちへとびおりけれど、あやまちてこしはねをうちおり、いたむ事いふばかりなし。くすりをつけて、やう〳〵にそのいたみはなをりしかど、いつかたこゝろのまゝにかけあるく事もならず、これにても思ひとゞまらず、引こもり居たりけるが、つら〳〵あんずるに、りやうでんには、十種の仙人をとかれ、道經には、五仙をしるせり。天仙飛仙のたぐひは、まことに、今の世の人をよぶべからず。われは蛻仙となるべし。蛻とはもぬけの事なり、せみのもぬけてかくれさりたるごとくならんとおもひ、うつぶしにふして、いきづみうめき、のびつかこふつせしが、せなかのとをり兩方にさけて、かうべより手あしまで、のこらずくすりともぬけて、ふるきからをかへり見れど、こよひ身引かけてふしたる大よるの物よりぬけいでたるなり、夢にてやありけん、しらず。うきよ坊は、ゆきかたなくうせぬ。天にやのぼりけん。地にや入けん。かきをきけるたんざくあり。よみてみれど、

今はわがこゝろぞ空にかへりける
のこるかたちはせみのぬけから

（未完）

君子喩二於義一小人喩二於利一

石舟道人

心と云ふ者は、本來善も思はねど惡をも思はぬ者である。亦惡も思へど、善も思ふ者である。そこで、心と云ふは、凝の義と解せし人がある。則ち惡にも凝れど善にも凝るからの事である。又こゝろの略語と云た人もある。則ち善にも轉々し、惡にも轉々するからの事である。そこで何に轉々するが、何に凝るか、其凝る方に轉々する方に依て、小人の心と君子の心と相分

岐する譯になるのである。されど、本來君子の心、小人の心と、先天より分れ定りたる者ではない。そは、上に云ふ通り、善も思はねど、惡も思ぬ者であるから、小人の心とか君子の心とか別々に心と云ふ者のある筈がない。されどもころ〳〵として惡にも凝り、善にも凝り、其の凝方で小人の心ともなり、君子の心ともなる。そこが亦善も思へど、惡も思ふ者であるからの事である。唯茲に何を思ひ、何に凝るかと云ふが、尤も大切の所である、佛書道書などには能く心田とか心地など丶云ふ字があるが、餘程面白き文字である。即ち心と云ふ者の體は猶空田地の樣な物である。そこで何がはえる場所であると、始より定た者ではない。其種子の蒔次第で、草の田地ともなり、木の田地ともなり苗の田地ともなり花の田地ともなる者である。そこで本來は同一の空田地なれども其種の蒔き方で種々樣々の田地と分れてくる。上田になそうと、下田になそうと、それは唯種子を蒔く時の心得一つである。心の空田地に君子と云ふ、種を蒔けど、君子の芽が萠へ、君子の根が蔓り、君子の枝葉が蕃茂し君子の花咲き君子の實が結び、どこからどこまで、皆君子田で。畦も畝も君子草計である。之に反して小人の種子を蒔付れど矢張、畦も畝もない、どこからどこまで、皆小人草だ小人草のはゆる田地は、小人田で、君子草のはゆる田地は、君子田で、唯最初一粒の種子を植付る時が、大事である。已に一たび小人の草の種子を心田に施して追々に芽が萠へ、枝葉が生ずる樣になつてから、狠狽して、君子草の種子を施して見よふが。一薫一猶の道理で、中々生育しないそこで、一粒の種子を心田地に蒔附ると云ふ時が、肝要である。君子草の種子を蒔んか、小人草の種子を蒔んか、今諸君は何をか擇んとする。そこで君子喩二於義一小人喩二於利一で、此所が君子小人の分岐する追分で、なんでも無き言の樣なれども、尤も面白き趣味ある敎である。義の種子を最初に蒔ど義田となり、利の種子を最初に蒔ど、利田となる。利田

は、小人の心田地にして、義田は君子の心田地なり。義にころ〳〵として疑るか、利にころころとして疑るか、兎角初の轉々し方、疑り方、即喩ニ於義ニ喩ニ於利ニかで小人となり君子となるのである。一旦初に利に喩りてからは、これでは行かぬと、君子の學をする積りに成つても、何時かしらん、塲合に臨んでどうも小人の魂情が出てくる。そこが六ヶ敷物で、佛家などに習氣と云ふ語があるが、即ち此意味で早く申せば一寸腥き物を摘んだ後で、乾物を握れば、腥いと云ふ物體は、現に摘みてれると云ふ、譯でなければども、其氣が殘りて、矢張り何處となく乾物に腥いと云ふ氣が移る樣なものである。そこで最初に喩ニ於利ニて、小人の種を蒔付くれば譬道に志し、學に志ざしても、動もすれば、小人心田の利と云ふ、腥い習氣が擧動の上に著れてくる、俚俗の言を爲す樣なれども、武士は劍、大刀の聲を聞て目を覺し、商人は、財布の音を聞て目を覺すと云ふも、即ち此所道理だ、心を初に劍太刀に喩れば、すはと云ふ時に先づ起るのは劍、大刀の心である。心を初に財布の上に喩れば、すはと云ふ時に先づ、動のも財布の心である。此所が肝要の意味だ。一旦、始に義に喩れば、其の後は常に先つ動者は義の心である。動きて義ならざるはなし。造次に於レ此し、顛沛にも於レ此。又左に動ても、右に動ても、躓いでも倒ても、皆な義ならざるはなし。君子滿身渾是義六尺の體、何處を打ても、義ならざるはなしだ。其反對で、一旦始に利に喩れば、其後は常に、先づ動く者は利の心ならざるはなし、造次にも於レ此れ、顛沛にも於レ此し、右に動ても、左に動ても、起ても、居ても皆利ならざるはなし、小人滿身渾是利六尺の體、何處を打ても利ならざるはなしだ。そこで始に喩る所の塲合は大事である王莽の如き、王安石の如き、曾て道に志なく、學に志なき人で無いとは謂へぬ。王莽は、矢張り、周孔の道を以て、漢の天下を傾けたのである、王安石は、矢張り周孔の道を以て、宋の天下

を誤りたのである。同じ周孔の道を學んで、何で小人となり、邪曲となり、君子となり、正義となるかと、謂へば、即ち其心の始、義に喩ると、利に喩るとで、或は君子の學となり、或は小人の學となるのである。そこで孔夫子は、或時、子夏に謂て、女爲㆓君子儒㆒無㆑爲㆓小人儒㆒と申さしめ。儒に君子儒、小人儒の二つあるは、笑可きことの様なれども、此所が則ち、利と義とによりて、同じ學に志し、同じ道を學と謂の中に、自つと小人儒、君子儒と分るので、最初喩㆓於義㆒の心から立脚した者は、君子儒で、喩㆓於利㆒の心より立脚した者は、小人儒だ。そこで同じ學問をするにても、自然に喩㆓於義㆒た者の仕方と、喩㆓於利㆒た者の仕方とは、振合が、丸で反對になつてくる。一口に道を學び、學に志すと云へは、立派に聞ゆる様なれども、中々そういふ者でない。其所を看破して、適切に教をなされしは、流石は孔子の大聖たる所以である。さて其振合が、丸で反對になる所を、一々擧てみれは、古之學者爲㆑己今之學者爲㆑人で、己の爲にするのと、人の爲にするとは、丸で反對である。爲㆑己者、喩㆓於義㆒者の學問の仕方で、爲㆑人者は喩㆓於利㆒者の仕方である。ちよつとなんでもなき様なことなれども、其間實に君子儒と、小人儒と云ふ、一大鴻溝を劃して居る。どうも古より喩㆓於義㆒者は、少くして、喩㆓於利㆒者の而已でありしと思はる。孔子の門弟子でさへも、どうも此所を免かれぬ處の者が、澤山有たかと考へらる。子夏なども動もすれど、其習氣が出様としたと思る。そこで孔子が告誡されたらしく見える。既に子張の如きは、學㆑干㆑祿とあるでも分る。そこで此の利と云ふ者は、唯貨財を殖すことを思ふ計のことではない、私を以て、公を滅し、己に適して、自ら便にし、以て天理公道を賊害するが如き所の者は皆な利である。そこで六ケ敷此所を謂はゞ、千古の學者、其小人の儒たらざる者幾人かあると謂んが如き者である。喩㆓於義㆒喩㆓於利㆒たつた、六字のことなれども、どう

も、一生玩味しても、味ひきれぬ道理がある。そこが聖人の言だ。學問をする人、志道の人は、多けれどもさて其何に喩るかと、繹てみれば、喩二於義一者は、誠に少くして、皆な喩二於利一者ばかりである。學者は羊毛の如くなれども、君子儒たる者は、麟角の如しだ。そこで、孔子も三年學不レ至レ於レ穀不レ易レ得也と（至は志の誤ならんこの說あり或は然らん）申された、穀を求んが爲に學び名を求んが爲に學び、人に知れんが爲に學ぶ、皆喩二於利一者で、小人儒である。そこで君子と、小人とは、其の始喩二於義一喩二於利一ので、其心術の行事の上に同一學問の現象か、其々に違て、顯れてくる。そこが白露も、紅葉に置けば、紅の玉で、同じ學問と云ふ白露なれど、君子の心の葉の上には、義の玉と置き、小人の心の葉の上には利の玉と置のだ。

（續）

花がたま

井上頼文

涼宵吟
黄金づくり

路山子

白元結の色きよく　鬢には伽羅をたきしめて
死後をよそひしたしなみも　今はやよひの花さくら
紅にほふ少女子の　涼しく輝くひとみより
戀の光を得む爲と　世の人皆の飾るなり
紅絹うら衣をきよそひて　追風ゆかしく大路ゆく
その弱腰にかゝやくは　黄金つくりの光なり
戀路にいそく身にそふる　蠟塗の鞘は淸けれど
やまと心をみかゝねは　刄の色もくもるへし
勿來の關に駒とめて　うたふ風雅を知らねはや
隅田の川に船うけて　空しく少女の酒に醉ひ
照る月波をかそへても　わか世ふけぬとおどろかて
淸き光をいたつらに　秋の夜長しとたのみつゝ

骨たくましき武夫の　身に粗布をまとひつゝ
朱鞘の大刀を横へて　大路せましと歩みつゝ
雪に埋れぬ梅か香の　高きかをりをならふとて
三河武士とて誇りたる　その氣慨のあともなし
國守るへき武夫か　春の長閑き日影にも
花の梢をとよもして　ふく山風を知らねはか
秋のさやけき月夜にも　にはかにおこる黒雲の
雨を喚ふとは知らねはか　たゞ月花にうたふのみ

＊　＊　＊　＊　＊

ほたる

くるゝ程より篭もちて　うなゐか騒く里川の
あやふき闇を逃れきて　高殿近くわれ飛へは
伊豫簾すゝしく掲けつゝ　月代まつかれはしまに
うすもの着たる小女子の　妹と共によりそへり
軒端にしはしたゆたひて　光をはなつわか身をは
めさとく人は認めつゝ　螢よ來よと招くなり
よはふ妹に聲そふる　姉の姿のゆかしさに
心ともなくあくかれて　簾のうちにさそはれぬ
かくありてより朝夕に　ゆかしき露のめくみをは
籠にうくれともわか燃ゆる　胸のおもひは誰けさむ

＊　＊　＊　＊　＊

ひと聲

一聲にかたらひやめてッゝ/\友とちも耳かたむけぬ山ほとゝきす
新わらにとり束ねたる洗髪こほれかゝるもなつかしきかな
みとり兒に乳房ふくめてその母もやかてゆめ路にともなはれつゝ

螢の詞　　三浦千畝

つれ/\なるこの頃の霖雨今夜はやう/\に晴れわたれり。庭のあたりはさなからあらひ去りたらむやうに少の塵をもとゞめす。いとうれし。前栽の木立いと小暗く一しほしげりて見ゆるも何となう心ゆくけはひなり。窓近く文机とり出しをすかゝけなとする程におの

か學業のおほろかなる心のやみをてらせとにやあらむ。軒端近く螢のとひかふ影いときよらかなり。昔車胤と云ふ男はあまた籠にあつめて文よむ窓の燈にかへたりとこそきゝしか。開けたる大御代の光にはかゝることして文見む苦もえうなきにこそ。あまりのをかしさにしはし庭のかなたをなかめやれは築山のあたり草葉の上なとにきらめける五月雨の名殘の露もそれにやとうたかはる。いといみしかし。螢とみるは中々に露なるもあるへく露ならむとおほゆるもまこと螢の影なるもあめり。

　草の上の露にうつらふおのか影を友とみつゝや螢とふらむ

なは遣水の邊をとひかふ影は下にうつりて一か二になりてそよ〳〵とふきおくる風になかるゝもいとたよわけなり。あはれこの虫よ時には學の窓にあつめられつゝ文よむ人にめてらるゝこともあれとなく虫よりもなとうたはれてみつから身をこかすいみしきすきものゝやうに云ひなさるゝこともあるめり。されと螢火なすかゝやく神といはましかは誰もおそろしとおもはぬ人はなかるべし。よろつおもひなしによるものにや。いふせかりし日頃の五月雨もこよひはなかなかにおもむきをそへたるやうになむ。

＊　＊　＊　＊　＊

養蠶　白雨樓

はや三眠も終りぬと語らふはこの家の少女なるべし。けつるいとまもあらねはにや髮はたゞ蓬のことくみたれたるを櫛にてつかねたるまゝなり。さかし。こなたのはいまやう〳〵眠るへき程なり。少しおそくやなり侍らむなとうちむかひゐていふは隣わたりのおうななとみゆ。すこしゆるしたまひてむやといふいふにしり上る。素より所せき賤か家なるを棚こなたかなたにたてわたしたれはいふせし。小くらき中に桑の葉のうつたかくもられたるかあまたあるにまたその間に桑の葉きさむもの筵をかふるもの虫をひらふものとり〳〵に

みなれなしさましたる女のいそしみあへり。嫗まはらなる齒くきあらはにいふやうあないさましのこの御勢や。あなたのもしの御さまや。人々のいたつき給ふもさこそはなくさみ給ふらめ。こなたあたりのはいかなれはにかれところへかたにていそしむもたのみなくてそと聲もれいたり。さな力をれとし給ひそ。これもれとつ日の頃はたのみ少く侍りしなり。また見直し給ふ事の侍らむといふはこの家刀自なり。なえたる衣もとりつくろはて虫ひろひつゝいふ。とやかくと桑のしろの事なとかたらひてれうなは歸りぬ。をりしも朝風すこしすゝしくふきたるにあるしの男なるべし。また露にぬれたる桑をれもらかに荷ひ來。背には鎌をはさみたり。畑よりきりきたるなめり。門の外にれろして汗などふくふくいふやうよべいかなるさがなものかわか畑の桑おほくぬすみゆきたり。あなはらだゝし。さらてたにたらはぬかちなるをとていきとほろしけなるに家刀自なともいてきていかにしてかなとおどろきかはにいふ。いとほしけなり。

かくてはかなく日數ふるほどに蠶もまゆつくる頃となれは賤の女の心つかひもやう〳〵しつまりゆく。されとまゆとなりたるをあるはしろにかへあるは糸となすほどなどまたそれ〳〵に心のやすむ暇もあらさむめり。しろにかへたるは少女のかしつかむ折の貯ともなりぬへく糸にしたらむは家の人々の衣ともなりぬへし。奴理能美の家にめつらしみ　昔とは事換りて上は九重の御内より下は賤か伏屋までもこの業の行はれぬはなきを今年のまゆやいかならむ。あはれことしの秋の御祭に村人の衣は新しく織らるべきか。いかに。

鶴相偶の首をたもつ

遠山いつ子

此のころの日長のつれ〳〵に、何くれの文どもとりいたし、よみもてゆく内に、左の一篇はいとゝ

あはれにおぼえければ、世のひめたちにもしらせまほしくてかいきよめて、おくりまゐらするになん。

長門國厚狭郡宇部村といふところに、鳥を打て領主に奉ることを務とするものに、片岡又十郎といふものありける時例の如く、鐵砲携へて已が家を出で、沖田原といふ野に出けるに、鶴二羽相並びておりゐたり。いとよき得物と思ふまゝに、いさゝかなる木立にかくれて、玉込しつゝ膝臺により、睨定めて放つに、一羽は倒れ、一羽は空高く舞翔れり。嬉しと鐵砲打すて馳寄りてみれば、あやにく鶴の細首を打たりとればへて、胴のみのこれり。かくて近きところに首れちてあらんと、草掻きわけてたづぬるに得ず。いぶかしと思ひたりしが、其のまゝにやみぬ。さて首なきを領主に奉らんも、いかゞなり。これは已が役得といふものなりと、獨言て家に携へ帰りぬ。なほ如此日毎に所々打めぐり、鳥をうちつゝ早くも、其の年くれて翌のとしになりぬ。かくてなほこゝかしこと、めぐりありきて、おもはず彼の沖田原にさかゝりつゝみれば、今年も亦一羽の鶴おりゐたり。又十郎去年のことを思ひ出て、去年はこゝに二羽おりゐたるを、一羽うちたるが、首を打きりけるまゝに領主に奉らでやみしが、今日はよきところをうたんと思ひて、心をしづめて打けるに、股の邊をうちえたり。これは領主に奉るによろしと、打よろこびつゝ其の首をとりて引立てみれば、何か羽合の内よりおつるものあり。何ぞとみれば、いとも乾きたる鶴の首なりけり。こゝに片岡つくづくとおもへば、去年一羽の鶴をこの野にて打しも、此月の今日とおぼえたり。さては彼の時、打きりたる首のたづねても見ねざりしは、此鶴去年の雄か雌にて、其時早くも、打斷りし首を已が羽合につゝみて、空高くとびあがりしならん。さるにても夫を形見と今日迄、身をはなさず、羽合にこめてありしものならん、鶴の心に月日しるべきことはなくとも、自然感應することあ

りて、人にしていはゞ、今月今日は、相偶の打れし日なるに、其命隕したる野を偲びいて、こゝに來つゝ去年を思ひ去りしことを悲みたるならん。さるにこの鶴も、同じくわが手にしぬといふは、いかなる深きよしあることならんと、又十郎は袖も絞りあへず、涙にかきくれて家にかへり、妻子にもこのことかたりつゝ彼の大鳥役を免れんことを願出たるよしなり。此は慶應三年のことなりとか。

浮世

倭文女史

『賣家と唐樣で書く三代目』凋落の恨、虛斷の哀をたゞに月花の他所事にのみ喞つ、なべて世人の愚さよ。淵瀬定めぬ世の中に、明白の我が身の上を思ひやれむ、人人なりとて何事も努力笑はれぬ物ぞかし。されや、古人も富貴は浮べる雲の如しとぞ誡め置かれし。

此處に、萬屋藤兵衞とて近郷近在に隱れなき酒店あり軒の看板、風に曝され、雨に打たれて、今は字体さへ、たぼろけなれど、げにも老舖の家柄とて、先は可成繁昌、腮の先に奉公人を追ひ回はし、懷手に一生を安閑と暮るゝも、また〳〵先代の餘澤なるべし。

さる程に、當代の亭主は何事ぞ、生來底拔の大酒飲、夫も隱居在世の程は、さすかに憚る所ありしが、一朝黄泉の人となるや、自分天下の氣樂さに、打て變りし氣隨我儘。朝とも云はず、夜と云はず、我から浴びる狂人水。醉眼、暢と見開て、相手欲しげに睨め回すに、娘小供は恐れて近寄らず。さらぬも氣味惡がりて客足日毎に遠ざかれど、主人一向に頓着せず。商賣そこのけの大亂醉。臭いものには蠅たかるの諺にもれず、此の界隈の破落漢共、是幸の巣窟と、日毎夜毎に立交り入交り、れだでるやら、叫くやら、笑ふやら怒るやら、謡ひつ、踊りつ、扨も飲むは〳〵、たとへむ長鯨の百川を吸ふも愚かや。是では千兩箱山と積む

とも、只燒石に水ぞかし。

殊に此の頃は、毎夜〳〵妻子の寢息を窺ひ。通ふや何處。里の裏手に當りて晝猶小暗き鎭守の森中。破落漢共と車座なして、焚火の下に奇偶を爭ふを、人は知らじと思ふはうたて。天知る、地知るの譬に漏れず。末は如何なる我が身ぞと知らで迷ふぞ哀なる。

妻のお霜は夫が此の頃の素行を見るに付け、聞くに付け、世にもあられず心をいため、何かに付け屢々諫めて已まざれど、夫の耳には空吹く風。家政日に〳〵左前になる儘に、愈々募る自棄酒の果は、馴れもせぬ彼の投機に手を出した上句、あはれや、瞬く隙に、數代相傳の家、土藏、敷地迄も去てやられ、今は是迄とあらう事か。あるまい事か。人の物は我が物、天下の寶は持廻りの大野心を起して、假初の一度が二度となり、二度が三度の果には、現に白刄を人の枕上に突立て〻、威文句を並べ立つる、全くの本物と化り畢りぬ。天網恢々、神は何時迄此の兇漢を見遁すべき。此の事遂に其の筋の耳に入り、やがて縛られ、拘がれ、責られて、逐一白狀の結果、聞くも恐ろしき北海の果へ護送の身となりぬ。

跡に殘されしお霜の歎き、將、何にか譬へつべき年來住み馴れし家には離れ、杖とも柱とも頼むべき。夫はかくの始末。まして夫の亂行に爪彈きして見向きだにせぬ親戚知巳の許へ今更手を下して憐を乞ふとも誰一人力を添へむ者もなし、十方に暮れし今日は昨日に引かへて漸く膝を容るゝ裏門屋の侘住居。扨洗濯賃仕事夫も女の手一つにては此の頃の米高に三度々々の粥の湯すら啜りかぬる始末。まして娘お菊の衣類まで手の屆かう筈なく幾度か洗曝去た古襤を其處彼處縫合せて漸く膚に纏ふ丈がまだしも也。斯る苦しき中ながら、せめて一通りの讀書丈は教へたく且物縫ふ術も手はどきだに習はしめむものと里の學校へ通はしあれど朋輩誰一人相手にする者なく「ヤレ盗人の娘よ乞食の子よと出るにつけ入るにつけ口穢く罵らるゝに幼心に緊と

悲しく只一人物陰に泣暮す事日毎のやう也。それも家に在る折は打わけて親の心傷めしむるが心ぐるしくてや、泣顔かくすいぢらしさ、是が九ッや十になる子の所爲かや…………………

さても其の後、お霜には假初の風邪の心地に打臥せしが、こらへ〳〵し心の痛みやら、背ては馴れざりし疲勞の一時に出でしものと覺しく、いたましや、次第に枕も立らぬ大病となりぬ。さらぬだに、其の日〳〵の糊口にさへ、堪へかねし瘦世帶の斯くては、如何で過されむ。お菊、今年ははや十三の春を迎へし事とて、母の手助け何呉れと、力を合はせし者の、もはら、母の看病にかゝづらひては、走り使に賃仕事の夫さへ心の儘に任せず。偶々の人のなさけも、藥買ふ代にさへ足らねど、ましてれのれは、物食はぬ日も多かり。斯くては果てじと、近きわたり、老實なる老女のあるを、賴み、母の看病の事呉々もあとらへ、置きて、行へも知られず。さても、此の先の事知りたや。

大和ばなし

蓬生屋女史

むかし西方に熊襲と云ふ國あり、國人、げに熊の如くたけく、ともすれど國をかみ、人をかみて、其の猛をほこりぬ。景行天皇の御世に、たける、たけしと云ふ兄弟ありけり。げに熊の中にも尤も猛く、尤も力ありけれど、國人は云ふまでもなく、その近傍のものも、悉くおそれ、熊の王と仰ぎて、誰一人、此の王の仰せに背くものなかりけれど、建兄弟は天下に敵なしとます〳〵ほこりて、遂に天皇の御敎化にも化さず、ます〳〵たけりあらぶるに、天皇、御子、小雄の命に命じ、之を征伐せしめ玉ひぬ。御子、時に御年やう〳〵十六歲、かしこくも詔をかしこみ奉じて、出で、其姨倭比賣の命をとひ給ひぬ。姨之にあひまし、之を聞こしめし、自からつけ給へる御衣御裳をとりて與へ、又小劍をも給はりしかど、尊は之を承け、懷にして、男

男しくもひとり立ち給ひ、やがて九州に下りて熊曾のやうすを伺ふに、その家は、熊のあら男どもをして、



三重、五重に圍ませ、用意いかめしく、中には、あまたの女をつどへ、多くの酒食を設け、さま〴〵の歡樂を奏して遊びぬ。尊よろこび、乃ち、やう〳〵額に結ばゝるゝ御髪を童女の如く梳づりたらし、姨命の給はりし御衣御裳を服けて、手弱女の姿をこらし、童女の中に交はりて、敵陣に入り給ひぬ。もとより空死を信と見る如き才智なき熊心、誠の孃子と思ひ、已が傍らに座せしめぬ。命、酒をくみ、舞をまひ、熊襲ます〳〵樂に入り盛宴を究めぬ。やがて夜ふけて、人も歸りしかど、梟は醉ひ倒れていねたり。命は、此時、かくし持ちし懷の劒を出し、熊曾の衣をとらへ、其のむねをぐざとばかりにさしつらぬきぬるに、弟たけし、之を見、おどろき畏れて逃げんとするを尊逐ひすがり、其の室の椅の本に至り、其の背の皮をとり、御劒を尻よりさし通し給ひしに、流石

の川上梟兄弟、この勇におどろき、命が貫ける劔をおさへ、刺されながら御名をとはせ給へるに、吾こそは、まきむくの日代の宮にいまして、大八州國を知ろしめす所の、大帶日子淤斯呂和氣天皇の御子、倭男具那の王なり、汝少しの勇をほこり、天皇の仰せをかしこまず、無禮なれば、之をとり殺ろせとの大御言給はりて茲に及べるなりと答へ給ふに、熊襲誠にかしこみ、西方に我が兄弟二人を除きては、未だ、かつて、たけき人、一人もあらず。しかるに、君は我等にまさりてたけくぞましましぬ。かしこけれど、御名を獻じまつらん。今より以後は倭建の御子とまをし奉らせ給へと申しをはりて、遂に仆れたり之より日本武の命とは申し給ひぬ。之によりて熊襲悉く平らぎ、しかしがほどは背くものなかりきとなん、あはれにもまたいさましき事にて、日本は實にむかしより他國におとらぬめでたき人の多くありて、またあでたき國柄にこそ。

病の神

田端の留守居

貧乏神ありと云ふ、しからば病の神は如何に、人は云ふ、疫病の神、熱病の神、風の神ありと、誠ありやされど、まさかに貧乏神の如く、人の招く所によりて生づるにもあるまじ、我知己にひとり子あり、其の親、其子をいたく愛で、その子風をひかぬやうにとて、冬は衣をあつくし、襟をまき、足をつゝみ、あたまを被ひ、すとうぶに、だんろに、身をあたゝめ、夏はあつさにまけぬやうとて、彼處の海水浴へ、そこゝの瀑布へとつれあるき、食には玉子、牛乳、そつぷ等の滋養物ある限りをつくして、養生に養生してはぐくみ育てしかど、其の子つねによわく、さむかり温かに着せしを、遂に風をひきこみ、氣管をそこね、一朝ジブテリヤといふ病のためにみまかりぬ。さやうに養生して遂に病にかかりたる。これ決して人の招ぐ所にあらざるべし。如

何に。あなや、それもまた人の招ぐ所なり。人あまりに子をいつくしみ、風ひかん事をおそれて、幼なきより温かにきせ、だんろに、灰燼に、温めのみなしされど、ふと、すきまもりし風のいたく身にしみわたりて、遂に氣管をそこね、肺を損じ、熱になり、ジブテリアになり、リヤウマチに、其の他もろ〳〵の病にかゝるに至る。見よや、乞食の子、一重の衣に雪の夜をあかしても、凍ゆる事なきを。彼れは、寒中、子を生むも、決して湯にてうぶ湯をつかはせず、汲みおきの水に投じて、たゞ汚れを注ぐと云ふ。故に寒ぶになれをれど、如何につめたき風にふるゝもおかさるゝ事なしと云ふ。又、彼は、土曜中、笠をもさゝで、幼きより母の背に負はれて、あつさにも馴れをりぬ。故に又、暑にも冒さるゝ事なし。彼は、疫病の神にも徃々とりつかれぬ。それはきたなきをいとはず、くさりたる食物をもえらむず食すれどなり、疫病は水あしく、食あしく、けが　たる處に生ずる神にや。我知る人、いたく胃病をおそれ、食物をいたくえらびて、こわきもの、消化あしきもの、決して食はず、米はかゆに、菜は消化よき滋養物のみを食せり。されど、ともすれど胃をそんじ、腸をそこねて醫師にかゝり、やがては持病のくすりを絶えずのめど、それもまた聞かざりき。醫師のくすりあしきにやとて、一日、他の醫へ診斷を乞ひけるに、あまりに、平日、やわらかきものゝみを食しをれど、胃の消化力よわりて、少しくかたきもの入るときは、忽ちに損ずるなりと云へりとか。むかし西洋のある豪富の家の主人、つねに病にかゝり、うつ〳〵と日をくらしけるが、或日、醫師の許へ至りしに、その醫師、已が家の馬車に共にのせて、程遠き里はなれし田舎へつれ行き、其所にて、其の人をおろし、已は馬にむちうちて、何事も云はずひとり家に歸れり。病者はいかれども呼べども、醫師はかへり見もせず、あたりはせきども、家なく、人なき地なれど、たのまん馬も車もなく、遂にあへぎ〳〵歩行して家に歸れり。かへり

て、其人病愈えたりと云ふ。之れ、富者なれど、食はあるにまかせ、事は人にまかせて出るには車あり、馬あり、運動足らず、食過ぐ、故にうつ〳〵として病にかゝれるなり。肺病、胃病、風の神、又多く招く所に來る、故にまづしき者は病少なく、富めるものは病多し。之れまた招ぐ所にあらずやは。

妻（承前）

安藤紫光譯

レスリーハ終に打明けたりしなり。

余、問ひけらく「彼の君はいかなるさまなりし」と。「天使のことくにてありけり。其は寧その心を安むせしめしとみえ、近く余によりそひて、近頃我を憂欝ならしめしは、たゞこの事にすぎざるやをとひたり」友はかく答へたる後、猶詞を加へていへらく「されどあはれなる女、妻はわれらがうけさるをえさる變化を認め能はぬなり。即その貧といへる觀念につきては、たゝ是を理論的に知らるのみにて、實際にいかなるものなるやをわきまへぬなり。戀と貧とをともなへるものとして唱はれたる詩をよみて、之を知れるのみ。彼女は今まで欠乏を感せしことはあらざりき。今まで常に便利華美に慣れ來て、そを失はれたる事はあらざりき。されどわれらが實際にその痛ましき心配そのいやしき欠乏そのあはれなる屈辱を經驗せむ時、その時こそまことの心をぞ試みうべきなれ」と

我はいひぬ「さて君は最困難なる事、即妻君に打明くるといふ事をし終へたるを以て、今はその失敗を早く社會に知らしむべきなり。そは早けれど、早き程よし、成程打明くる事は、苦しからむとも、そは一時の苦にすぎずして速に消滅せむ。然らざれど、君は常に若しやこの事か社會にあらはれはすまじきやとの憂をいだきてくるしむべし。落ちぶれたる人は、貧苦のそれに堪ふるよりも世間體を繕ふ事に多く困しむぞかし。世に誇らむとする心と、空しき財嚢との間の爭間もなく

如何ともし難き境遇に陷らざるを得ざるに外見を維持せむとするは、煩心を苦しむべき事なり。貧窮をわらはさむことをおそるゝ勿れ。然らど君はその最はげしき貧の刺衝をまぬかれ得べし」と、此の點につきては、われハレスリーの充分覺悟せるを認めたり。また妻も偏にその變じたる運命に適ふやうに處置せむと望みゐたりき。

其の後數日ありて夕つ方レスリーハ我をとひぬ。レスリーハその住宅を賣放し町より數哩なる所に、一小舍を購ひたるにて、今日は家具を運ぶむ爲いそがしかりしなり。さてその家具も新居は格別の道具を要せず。極めて質素なるものにて、事足りぬへけれど、以前の住居になりし立派なるものはその妻の縦琴の外は、すへて之を賣拂ひき。而してその縦琴につきていふ所をきけど、妻といふ觀念と、この縦琴とは、甚密接に相伴へり即そは戀愛の一小話中のものにして、そのいと樂しかりし求婚の時の間、その樂器に倚り、恍惚たる女の聲音に耳傾けしことありしをもへは、之を手放すに忍びざるなりとぞ。われはこの愛情濃き夫が婦人に對してこの小說的の心を有せるをきゝて、微笑を禁じる能はざりき。

レスリーハ、今その妻が今日一日整頓に從事せる家にゆかむとする所なりき。わが心はこの家族に關する事件の、すゝみにいたくそゝのかされたると、且は晴れたる夕方なりしかど、我は彼とともにゆかむといひていでたり。

レスリーハ、今日一日の勞働に勞れてありき。然して歩み出しゝ時に、彼は憂鬱としておもひにうなたれたり。

終に「あはれなるメリーよ」との聲は、重き嘆息とともにその唇よりいでぬ。われはいひぬ「何事ぞ、何事か彼の君の身の上におこりたるか」

彼はいらたちたる目付にて、いひけらく「何といひ給ふぞこの賤しき身分に陷り、このいたましき小舍にと

れちこめられ、その極貧なる住居にありて、殆卑しき務に服せざるをえざる事なるを、君は何ともあらぬ事をいひ給ふか」と、

「さらど、かの君はこの度の異變につきて、何かつぶやき給ひしか」

「つぶやきしかと問ひ給ふかなか〱に彼女は、滿身渾へて、是快樂とよき性質たるに外ならざりき。げに妻は嘗てわがかくありと知りしよりも、一層よき心を有せるか如し。わが身にとりて彼の女はすべての愛情優婉慰藉たりしなり」

「感すべき孃よ」とわれは叫びぬ「わが友、君はみつから、貧なりといひ給ふされど君は、今より富みたることはあらざりしなり。君は今までその婦人に於て君が有せる無限にすぐれたる財寶をは決して知らざりしなり」

「嗚呼、されどわが友よ、若この小舍に於ける始めての會合が濟みたらむには、われは幸福なりうへしとおもふ。されどこはそのまことの經驗にあへる最初の日なり。彼女は賤しき住所に導かれそのいたましき家具の整頓に、終日立ちはたらき始めて家内の務の疲勞を知り、始めて家に於ける身のまはりにあらゆる華美なるもの殆あらゆる便利なるものが欠乏せることをおぼえ、而して今は勞れ、且落膽して將來貧窮のありさまを、沈思しつゝ坐せるならむ」

かく友の想像に描けることは、幾分かはさもあるべしとおもはるゝことなりけれど、われも抗言する能はざりき。かくて我等は無言にて歩みゆきぬ。

本道より曲りて充分俗塵を離れたる有樣を呈せる森の樹にて、あつく覆はれたる小路に入るに、われ〱は小舍を見うる所に來りぬ。その小舍の外見は最多くの田園、詩人が好みて、住ゐぬへき程に清素なりき。野生の葡萄蔓は葉簇繁茂して、その一端をおほひ數幹の樹木はうるはしく、その枝をさしいだせり。然して又わ

れはその戸のまはり、または前面の草地に盆栽の花のおもしろく配置せられたるを見たり。小なる門の開かれたる中には一徑あり。徑は戸口までつゞける灌木の間を縫ひゆくなり。恰これに近つきし時にわれらは音樂の響をきゝぬ。スリーハわが腕を確とにぎれり。われらはとゞまりて耳傾けぬ。そはメリーの聲にして、その夫か殊更に好めりし一小歌を最、人を感動せしむる、誠實の調子にてうたひつゝありしなり。

余はわか腕を握れるレスリーの手のふるふを感したりき。彼は一層明に聞かむ爲、前に歩みいたしゝか、砂礫の上のことゝて足音はひゝきぬ。これをきゝつけてなるへし、輝きて美しき顔は、窓よりあらはれしが、やかて消えて輕らかなる足音は、きこえぬ。然してメリーは我等を出迎ふる爲、いそきいて來りたり。メリーは白色のかなり質素なる衣服をまとひ、野花二三をその美しき髪に挿みたるか、その頬はうるはしき櫻色を呈しそのすべての容貌は笑を以てかゞやけり、是より以前にわれは決してかくのごとく、愛らしきをは見さりき。

「わか君」と女はさけひぬ。「よくも來給ひぬるかな。今か今かと待ちに待ちて、或は小路まて走りて君やき給はむと望み見たりき。妾は家の後なる美しき樹の下に、卓子を据えまた妾は極めてよき、草苺をあつめれき侍りぬ。そは君の好み給ふを知れる故、またわれらはすくれてよき乳皮をも有せり。然してあらゆるものは皆心地よし。此の處にありて、嗚呼」といひその手を夫の手におきてよろこむしけに見守りつゝいひけるやう、「あゝわれらはかく幸福なるべし」とあはれむべきレスリーハ、その妻の温情にうちかたれぬ。その胸に妻を擁し、その手に妻を擁し、あまたゝひ接吻したり、レスリーハ情にせまりて物いふ能はさりしかども、涙は眼より迸りぬ。かくてその後、彼は幸運にあひて榮え、實際その生涯は幸福なるものなりしかとも、彼はこの時よりも一層すくれたる幸福にあへることはなかりき

とは、度々われに確言せる所なりき。（完）

緑陰叢談（二）

白松園主人

日は既に沒りて、夕飯も果てにけれど、そともに立てる楢の木の、枝ざし四方に廣ごりていみじう、茂りたるが下に、床几を据ゑて涼みをるに、螢三ッ四ッ飛びかひきたる、誰がためにと、われから燃ゆるらんいとをかし。とかくありて、まどかなる望の月は、久世山の樹梢をはなれて澄み登りぬ。「桃李不レ言春幾暮、烟霞無レ跡昔誰栖」とは管三品が人生の悲慘を歌へる者にして、そのかみ鬼哭啾々たりし、武城原頭の鶉の床も、百磯城の大宮どころとなりなんとは、變れど變る榮枯得失、されどとて昔を問はん都鳥もなく、草離々たりし跡絶えて、軒より軒に入る月は、洞庭の影に異ならねど、塵烟ものむづかしけれど、心を吳湖にすましむべくもあらず。石川やせみの小川の清きには似るべくもあらねど、江戸川の水上は、さすがに住む家まばらにて、田の面の蛙の、ゆふさりつ方より、諸聲に歌ひ出でたるもあはれなれど、こゝになん假の宿は定めけるなり。

零露瀼々として、貫きとめぬ玉と見るまで、草葉にきらめくをながめつゝ、「三五夜中新月ノ色」など口吟むをりから、近きあたりの稍やおとなびたる童等、五人六人集ひ來けるが、日頃馴れたるにまかせて、やよ例の昔物語聞かせ給へと、うるさく責め乞はれて困じにけれど、はしたなくいひこらさんもさすがなれど、含笑つゝうなづきて、何をか話さんといへど、保元平治の亂、或は南北朝の事など口々に罵るを、中なる女の童は怨めしげに、男子たちは昨夜も軍物語聞き給ひつれど、けふは妾等のために、めでたき女子の話し給ひてよといへど、否そはわりなしなど爭ふを、をなかま、靜りぬ。けふは女の子の少けれど、少き方に方人せんぞ

といふに、本意なげにうちまもる男の子もをかし。そも我國のむかしは、軍おこりて、世の中騒がしかりける時にても、男にも女にも優なる事おほかりき。わきて女はあはれにやさしく、今の世の人には、假初にもありがたき事なんおほかりつれど、今わが話す事のめでたしと思ふふしもあらど、よく覺えおきて、身の心得ともなし給ひね。されど今先づ話さん事は、女として必ずしも美はしき事にはあらねど、昔は卑賤の婦女子も文學の嗜好ありて、其のふるまひの優にをかしく、折にふれて事様の哀れなりといふこと丶、學校にて習ふ歴史のたすけともなりなんやうにいふべけれど、さ心して聞き給へ。男の子も亦心得べき事ぞ。

「人生勿レ作二婦人身一、百年苦樂因二他人一」とは、唐土の白樂天が歌へる所にして、婦人の身を憐むと共に、其の驕奢をいさめし警語なりけり。そも〳〵、我國婦人社會に於て、最も勢力ありし時代は、平安朝の右に出づる者なし。平安朝とは桓武天皇の京都平安宮に都し給ひしより、源平二氏が政權を握る頃までをいひて、其間貴族文學の盛なりしこと、前後に比類なく、中にも宇多醍醐の御代より、一條三條の御ころまでは才媛一時に輩出して、後世の文學史上に一異彩を放ちぬ。當時漢文詩賦の道も大に行はれて、此の四角なる形象文字を男文字と稱して、朝庭の記錄正史および家牒に至るまで、專ら漢文をもて記されぬ。之れに反して、女子は皆平假字を用ゐて、之れを女文字と稱し、日記、物語、和歌、紀行及び雜史等は、悉く之れを用ゐぬ。紀貫之が土佐日記の初めに「男もすなる日記といふものを、女もして見んとてするなり」と書けるが如きも、假字文なれど、わざと女めかしたるなり。されど日本文の今に傳はれるもの丶うち、多くは當時に成れる者多くして、和文の巨擘と稱せらる丶、源氏物語、枕草子をはじめ、婦人の手になれるもの大半を占めたれど平安朝は殆んど女子文學とも稱しつべし。かゝれど女子の位置もおのづから進みて、華奢の風高まると共に、

貞淑の德を欠きしは惜むべきことなり。世降りて源平氏の時に至り、兵亂相つぎしかど、王室衰へて花の如くなりし平安文學も、貴族社會を離れて、僧侶の手に歸し、鎌倉時代は遂に桑門文學となりぬ。されど當時の文學は、多くは佛敎趣味を帶びたり。但し平安文學の餘燼は、未だ絶えざりけん、平家一門の武士中にも、和歌に巧みなるもありき。かゝれど、多少平民間にも落ちしならん。それかあらぬか、平相國入道淸盛、天が下をおのがまゝにふるまひけるとき、白拍子の上手に、祇王祇女といふ姉妹ありけり。淸盛祇王を召し入れて、こよなういつくしみ、そが母と妹とには、よき家作りて住まはせけれど、屋のうち俄に光みちて、世の人めざましう思ひけり。かくて後三年經て、加賀の國より、白拍子の上手ありて、洛に上りけり、名をど佛とぞいひける。今年十六なりけり。ある日みづから、淸盛の館に推參して、恐けれどもおん慰みのため、舞の手いとつ御覽ぜさせんと、申し入れけれど、淸盛いたく怒りて、こゝには祇王のある者を、知らず貌に、推參せることそ奇怪なれ。とくれひかへせといはせけれど、佛はすげなういはれて出でんとしけるを、祇王情ある者にて、たとひ召させられずとも、白拍子の推參するは、常の習に候を、年さへいまだれさなきを、すげなうかへし給はんは、いかに本意なう思ふらん、對面だにゆるし給へと、さまざまになだめしかど、やうやう前へぞ出されける。今樣ひとつ歌へといはれけれど、佛かしこまりて

君をはじめて見るときは　千代も經ぬべし姬小松
御前の池の龜岡に　鶴こそむれゐて遊ぶなれ

うるはしう妙なる聲に、みたび歌ひすましければ、滿座耳目を驚かしぬ。次に舞をもまはされけるに、丈けなる黑髮匂ひやかに、姿貌いとめでたくて、聲も節も上手なりければ、淸盛いといたくめでよろこびて、之れに心の移りにければ、佛をそのまゝ邸にとゞめて、祇王には暇とらせて出だしけり。佛いと心うがりて、れ

のれに暇たまへといひしかど、露ばかりも聞かざりけり。
いと情なきことなれど、祇王口をしく悲しけれど、さてあるべきことならねど、三とせが間すみなれし、居間の障子に、一首の歌をぞ書きつけゝる。

　萌え出づるも枯るゝもおなじ野遊の草
　　いづれか秋にあはではつべき

嘆息す人間萬事非なりとかや、さすが昨日けふとは思ひもよらざりしに、俄に暇賜はりて、孤舟の嫠婦となりぬる身は、母や妹にあひ見ても、泣くより外のことぞなき。
かくていつしか、明くる年にもなりけれど、清盛祇王が許へ使を立てゝ、いかに祇王、此の頃佛御前が、余りにつれ〲げに見ゆるに、來りて今樣をも歌ひ、舞をもまひて、なぐさめよとぞいはせける。祇王はあまりのくちをしさに、物もえいはでふしにけり。清盛重ねて使者を立て、なぞて返事には及ばざる。いよ〲來らざらんには、はからふ旨ありとぞ申しける。祇王はたとひ命を召さるとも、來るまじとは思ひけれど、母なんいたくおそれまどひて、かくてはいかなるうき目にか、あはんずらん、もし孝の一字を忘れずば、母に憂目をかくるなとて、さま〲にすかしけれど、母の言を背かじと、泣く〲も出でたちける、心のうちこそむざんなれ。
日頃召されつる所へは入れられずして、遙に下りたる座敷へおかれけれど、こは何事ぞや、我身にあやまつ事もなくて、出されしだにあるものを、剰へ坐をもさげらるゝこのと、くちをしさよと思へど、おつる涙の村雨は、抑ふる袖のひまよりも、余りてほろ〲こぼれける。佛御前之れを見て、余りに哀れにおぼえければ、是れへ召され候へかし、情なき御わざぞと申しけれども、聞かれざりけれど、力及ばで立ちにけり。
いかに〱、祇王は何をか物思ふ、早く歌ひも舞もして、佛を慰めずやといひけれど、祇王涙をおさへつ、曇

れる聲をやう〳〵つくろひて、今樣一つぞ歌ひける。

佛も昔は凡夫なり　我等も遂には佛なり
何れも佛性具せる身を　隔つるのみこそ悲しけれ

とおしかへして、ふたゝび歌ひければ、その座に並居る、平家一門の人たちも、皆感涙を催しけり。清盛もげにと思ひけん、時にとりては、よくも歌へるものかな、以後は召さずとも、をり〳〵來りて、佛を慰めよとぞいひける。

かくては又、いかなるうき目をか見るらん。今は都のうちにはをらじとて、嵯峨野の奥なる山里に、柴の庵をひき結び、かしらおろしてぞゐたりける。時に年二十一、花咲きそむる初春の桃李の色香忽ちに、夕の嵐に散り果てゝ、蕭々たる夜の雨殘燈壁に斜めなる、我身の影こそ悲しけれ。母も妹も之れを見て、天上の五衰人間の八苦、盛衰常なき月かげの、宿れる水は掌底に、掬べるよりもはかなきに、誰かは今は劣るべきと、母も妹も諸共に、さまを更へておなじ所にこもりけり。

梓弓推して春雨ふりしより、夏もいつしかたけぬれど、秋の初風吹きそめて、あまのとわたる梶の葉に、思ふことかくころなれや、雁の翼の玉章も、いひ告げやらん人もなく、夕日の西の山の端をのぞみては、西方淨土に願をかけ、すぎにし方のうき事ども思ひ、絕ゐても絕えせぬは、包むに余る淚なり。

夕暮告ぐる鐘の音に、黃昏時も過ぎぬれど、燈火かすかにかき立てゝ、親子三人諸共に、念佛して居たりけるに竹の編戶をほと〳〵とうち叩く者ありけり、あれは水鷄か然らずば、魔魘の襲ふにやあらんずらん。たとひ如何なる鬼なりとも、名號ひまなく稱なば、させる事もなかるべし、念佛怠り給ふなと、互に心を戒めて、おそる〳〵竹の編戶をあけて見れば、月の光に彳めるは正しく人とぞ見えにける。なほよくすかし見るに、こはいかに、我等が仇となりにける佛御前にてありしかば、祇王は驚きいぶかりて、こはそもいかに佛御前と

見まゐらするは、夢かや現かといひけれど、佛は涙をおさへて、おん身の暇たまへるとき、「いづれか秋に」とかきおき給へる言の葉、又いつぞや召され給へるとき、「我らもつひには佛なり」と、歌ひ給ひしにつけても、かたはらいたきは我身にて、この頃聞けど御身等は、此の處におはするとか。つら〳〵物を案ずるに、娑婆の榮花は夢のゆめ、蜻蛉稲妻よりもはかなきものを、一旦の榮花に誇りて、後世を知らざらんことの悲しさに、今朝よりまぎれ出でたるにてこそあれ、御覧候へとて、かづぎたる衣をうちのくるを見れど、尼になりてぞゐたりける。さこそにくしとはればさめど、かやうにさまをかへたる上は、日比の恨をゆるさせ給へ、もろともに往生の素懐を遂げ侍らんと、さめ〴〵とこそ泣きにけれ。

一たび物うき事にあひて、世をうとみ尼になるなどの、厭世心を起さんは、今の世の婦人にはとるべき事ならねど、佛法の盛んに行はれて、鬼神を信じたる時なりければ、かく遁世の身となるも、あながち今より咎むべきにあらず。

嗚呼かゝる賤しき家に生れて、卑しきわざにすぐす身ながら、その志のあはれにいみじく、言の葉さへ優にやさしきを見れど、今の人文明の世に生れ、名ある家にそだち、多年もの學びに身をおきながら、心どへは無下にいやしくて、なまさかしらに、なり行く者のみ多かるは、口をしき事ならずや、戰國亂離の世にありて、教育なかりける民間にも、心うるはしかりしことは、古への人いたくまされり、あはれ御苑に植ゑたる牡丹の花の、薔薇とならんも心うし。垣根にねふる大和撫子の、鬼百合と咲きなんは、いと口惜しきことならずや。

（未完）



○見聞隨筆（其二）

なにがし

いつの頃にかありけむ、新橋に物いふ花の巷なる芳町を、繿縷をまとひたる一人の少女、小脇に笟をかゝへつゝ、ガラスの毀れあき罎のお拂と、呼びありきける聲の、いと淸らなりければ、道にかしこき某やの主人、ともなく顧れば、容貌さへ人並には勝れたりけり。あはれ日にはやけ、垢膩てそつきたれ、磨かば、十乘を照らすべき玉手箱ともならんと、呼びとめて、ランプの毀れたるを一つ二つとらせ、さて、いひける樣、おことは、などて、かゝるあやしき生業をかする、いとをしのことや、藝妓といふものになれかし、容貌もみにくからず、聲もいとほがらなり、必よき客もつかん、われ、奥に居るを見よ、衣裳は、當世のすきをつくし、食は、美味膏粱にあき、朝湯に入りて、化粧三昧に日を送る。世に、心安きは、上こすものあらじ。いかに、翌日より、わが家に來りなんや、その繿縷に代ふるに、絹布をもてせん、その笟に代ふるに、三味線をもてせん、櫛笄かざしも與へん、下駄も與へん、また善からずや、とすかしぬ。少女は、面をあげて、いと冷かに、妾が業賤しとはいへども、人の軒に立ちて物を乞ひ、途行く人の袂に縋りて、哀をこふにはあらず。資出は薄しといへども、利益は些なりといへども、正しき一の商業にてはべり。藝妓とやらんものを聞けど、心にもなき笑をつくり、人にもてあそびとなり、晨に誰客に愛を賣り、夕に越客に媚を賣り、はては、人を誑かして、千金の子を溷溜に陷れ、あらぬ罪をつくるものとかや。身を萍の風のまに、きのふは東、今日は西と咲かんこと、まこもの下に埋もるゝ、菖蒲草にも劣りなん。妾は、ガラス屑とあき罎とを賣れど、かつて心をば賣らじ。妾が生業と、藝妓の業とは、孰れが貴く、孰れが賤しき。妾が繿縷は、藝妓が着べき絹布とはかへがたし。妾が手は、人の爲に彈くべき三味線をば持たじ。許させ給へと、にげ去りきとなむ。あな奇しき少女かな。今の世に、

この少女に愧ぢさるもの幾人かある。さるにても、この少女、今いかにかわる、聞かま欲しきことにこそ。

隨感隨筆（四）

白松園主人

○婦女子の勇

之れを聞く、文政の頃、洛東、樵夫七兵衛といふ者ありけるが、一日例の如く山に行きけるに、夕つく日の影は西に沈めども、歸り來らず。其の妻、いといたく思ひ煩ひて、心あてに山に分け入りて、そこはかと尋ね求むるほどに、いと大きなる樹梢に、そのふとさ斗の如き巨蛇の、尾は末にありながら、首は木の本に低れて、揚々たる色の、いかにも人を呑める樣なりしかど、妻はいたく愕きしかども、蛇と思ひ定めて、持てる鈍鎌をひらめかして、直に巨蛇の口を目がけて斬りかゝりしに、巨蛇は眼を怒らして、一口に呑み込みぬ。さりけれども妻は呑まるゝときに、鎌を口にひきかけて、腹に至るまで斫り割き、夫を扶けて偕に出で、遂に免るゝことを得たりしとぞ。古の巴、板額は、聞ゆる剛力にて、度々の合戰にさへ、少しもおくれを取らざりしほどの、勇は萬夫を凌ぎしかども、女子の性格として、變則的の者なれど、いかに之れを眞似むんとも、到底普通の女子の、及び難きわざならめど、此の樵夫の妻の如きは、眞正なる女子の勇なれど、時に臨みて凜然たる事、必ず彼が如き勇なかるべからず。

○所謂基督敎者の勇

おのれ此頃、伹わる耶蘇會堂の前を通りけるに、手を擧げ案を撃ちて、頻りに演ずる聲の、ふと耳にさはる事ありしかば、立ちどまりて見るに、辯者は日本人にて、聞く者も日本人なりけるが、大方は若き婦人なりき。彼の壇上に立てる男、說いて曰く、「アヽ君たちよ、眞正なる勇を養はんと思はゞ、早く我等が門に來れ、眞正なる氣を振はんとならば、速に基督の敎を受

けよ、基督の教は實に宏大精妙にして、例へば造化の作用の如し、膚淺薄弱の法に非ずして、確乎不抜の大勇なり。劒を撃ち馬を躍らすが如きは、賤野陋卑なる兒技に過ぎず、忠孝の道、節操の教の如きは、偏狹野蠻の風なるのみ。武士道といひ、大和魂といふが如き、畢竟迂愚の言なるのみ。諸君、幸に席に進め、基督の洪恩、天地に遍滿する教を講ぜん。」と演べ終つて得々たり、かゝる狂者にかゝづらはんは、不狂人も走るの嫌あれど、さて立ち去りしが、このたはごとを、有り難げに聞きゐたる女子等こそ、かたはらいたけれ。親を棄て君に背き、夫を侮り子を慈まざるも、耶蘇を奉ずれど、罪とするに足らず、惡とするに足らずとかや。彼の徒が平生の行爲に照すに、淫奔汚穢は、彼等が所謂大勇を養ふ所以にして、禽獸狗鼠の道は、彼等が勉めて鼓吹する教と云はざるを得ず。要するに彼の辨者の如きは、餬口にさし支へし劣等漢にして、彼の聽者等は、開化氣取の無智蒙昧男女等なりと知るべし。

○識別の明は難し

蝙蝠軒に掛りて、人の倒さまに歩むを笑ふ。俄に他を陋なりとして笑ふこと勿れ、世間此の蝙蝠に類する者多きをや。己れに偏するは、自ら信ずるの度に於て鞏固なる點多くとも、識別の明あらざれば固陋に陷る者也、假名世説に

ねなし草に云、門松は冥途の旅の一里塚とも氣はつかで、無上に新春の御慶と壽き、懸棘鬣魚も魚の死骸と悟らねど、めつたに目出度ものと覺え、熨斗鮑をかへせど、しのとよまれ、四の字を嫌へど、五の字もでねるといへど、油斷ならず。戀春川町がうたに

龍宮でいむべき魚のなきがらを
取りかはす世ぞめでたかりける

學問の主義も、亦かくの如きものあり、教育に宗教に、因襲の弊、誤信の妄、甚だおぼからんは、先達の士も後進の輩も、免れざるところなり。嗚呼難いかな識別

の明。

〇猫をやしなふ道

柳澤淇園、奇警の言多し。その著雲萍雜誌に

猫を飼ふもの、多くは猫をやしなふことをしらず、飯をあたふるに鰹ぶしを入れ、肉味を加ふ、猫は常に厚味を食とするときは鼠をとらず。猫は麥をたきて、味噌汁をかけ與ふべし、その他の食をあたふべからず、常に肉食にならはすれば、肉なきときは必ず他の家に至りて魚肉を盜めり。人を養ふも亦復しかり。

「人を養ふも亦しかり」の一句、寸鐵奇拔の言といふべし。余も之れに附して曰く、子女を敎育するも亦復然り。

〇色道の論

柳里恭曰く、「年若くして色なければ、無骨にしてしとやかならず。老て色なければ、慳貪にして邪見なり。世に色氣といふは、專愛敬のつやをかねいひて、あながちに婬欲のみにあらず。士として色なければ、人なづかず、農として色なければ物育たず。工として色なければ、巧なく。商として色なければ、人問はず。天地の間、何物か色なくしては、一日も世に立つことを得ん。孟子にいはゆる、大王色を好むの辯おもふべし。」云々、又兼好法師が之れを論じて「あだなるちぎりをかこち、長き夜をひとり明し、遠き雲井を思ひやり、淺茅が宿にむかしをしのぶこそ、色このむとはいはめ」といひ、又「すべて月花をば、さのみ目にて見る物かは、春は家を立ちさらでも、月の夜はねやの内ながら思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ」。あるは「さきぬべきほどの梢、ちりしをれたる庭などこそ、見所おほけれ。」と論じたるが如きは、志操上の快樂、即ち理想的の色をもて、高尚なる者とせるなれば、多少の哲學的志操を、持ちたる者ともいひつべし。所謂中庸をもて道徳の標準とせる、歐洲の哲學者アリストートルは、高尚といふをもて、あらゆる道徳の最上至

極とせり。是等の點によりて見れど、肉體的の快樂よりも、精神的、理想的、志操上の快樂をもて、高尚なりと認むるは、東西相同一なるを知るに足りなん。されど今、柳里恭、兼好等の説ける色道の論は、實に閑雅優美にして、鄙猥ならざるを見る。古今集に「戀なくば人は心はなからまし物のあはれも之れよりぞしる」とあるも、げにさる事ぞかし。

○女子の讀むべき日本文

我國今日、日本文の教科書とすべき書、甚だ困難なり。中古以來の、物語、日記、和歌など少きにはあらねども、中には婬靡の文、多くて、年若き男女には授け難かり。されどとて、悉く讀む事を禁ぜんも、難きわざなり。かゝる事は、只師として授くるを憚ることは、さる事ながら、到底底止なき事なれど、放任せんより他にせん方なかるべし。されど女子たらんもの、彼の伊勢物語、源氏物語、枕草紙などの書をよまんにも、よく讀むべきさまを知りて、いはゆる活讀せんことを要するなり。常山樓筆餘に之れを論じて曰く、

かなにてしるせる書の中、神皇正統記は、議論確實なりといふべし、其餘多く其詞美なりといへども、理趣に遠きが故に、世の學士名教に背かん事を論ぜり。源氏物語におよびては、殊に誹りて淫を導くの書とせり。顧つく〳〵是をよむに、吾邦禮樂文物、此物語に存する事多し。孔子告朔之餼羊を惜みたまひし事あり、此物語も、羊存といふべきにや。されども人に語らば、必世の學者と爭はん事を慮りて、自信せしのみなりしに、熊澤太夫の源氏外傳を見しに、予見る所と符を合せたりしかど、自信して、知者を竢つて語るべきなり。

此の書に對する、國學者の評論はたほけれども、漢學者として此の言あるは卓見といふべし。げに心して讀まざるときは、眉を顰めぬべき所多かり、されども軍記雜史に至りては、この病少く今日の模範文として上乘の者多し。又徳川時代、漢學者の手になれる隨筆類

の、見るべき者殊におほし。我中古文を讀まんには、大抵有職古實を知らざるべからず、有職古實を知りて之れを讀めど、歴史文章相竢つて其の資する所亦莫大なるべし。

（未完）

張合（その五）

白魚女史

親の尊ぶものはおのづからゆゝしく、親のなづかしむものは、おのづからしたはるゝが子の情、文代、父が尊び、父がほめたる叔父、從兄、まして田舎になれたる心にそゞろやんごとなく、かしこく思はれ、浪男に逢ふ毎に己を耻ぢけるが、只今、叔父と、浪男との論、思はずもまどのくれ竹の元にて、ゆくりなく聞き、とむねをうちけるが、叔父はなほ語をつぎ、こりや、浪男、よつく聞け、兼ねて手紙にても聞かせ、又歸りてよりも語りたる通り、己は、白川家の二男、信ならで此家は兄の家、兄の心、兄の居る事を我れ知らで、此の家は斷絶しやうとも、己もまたつがざりしものを、さやうの事とも思はず、兄は死し、相續人はなしと思ひて、是非なく家督をつぎ、そちにまでゆづりたるが、不思議にも兄を得、其子を得たり、家督歸す、ゆづるは安き事なれど、さりとて聞くべき兄にもあらず、うるさき事云はんよりは、其の子を向へ、此の家をつがせなど兄の心にもそむかず、己が心もすみ、殊にそちは何と思ふあの子を、無邪氣ながらに愛敬もあり、才色も乏しくはない、父にゆづらぬ氣性も供はりをれど、まだ若竹の若くはあれど、みさをの色も供はりて見ゆる、己が眼には、又とはなく見ゆる。迷ふな、迷ふまいぞ、容貌は少しはまさる人あるとも、かしこさ、やさしさ、さつぱりした氣性のある、情のある、彼れにまさる女が何處にある、彼を妻になしおかど、そちは一生幸福に過さるゝ、父の眼によつく見をつた、其方は、西海に渡り、白人の中に入りおつて、色の黑き

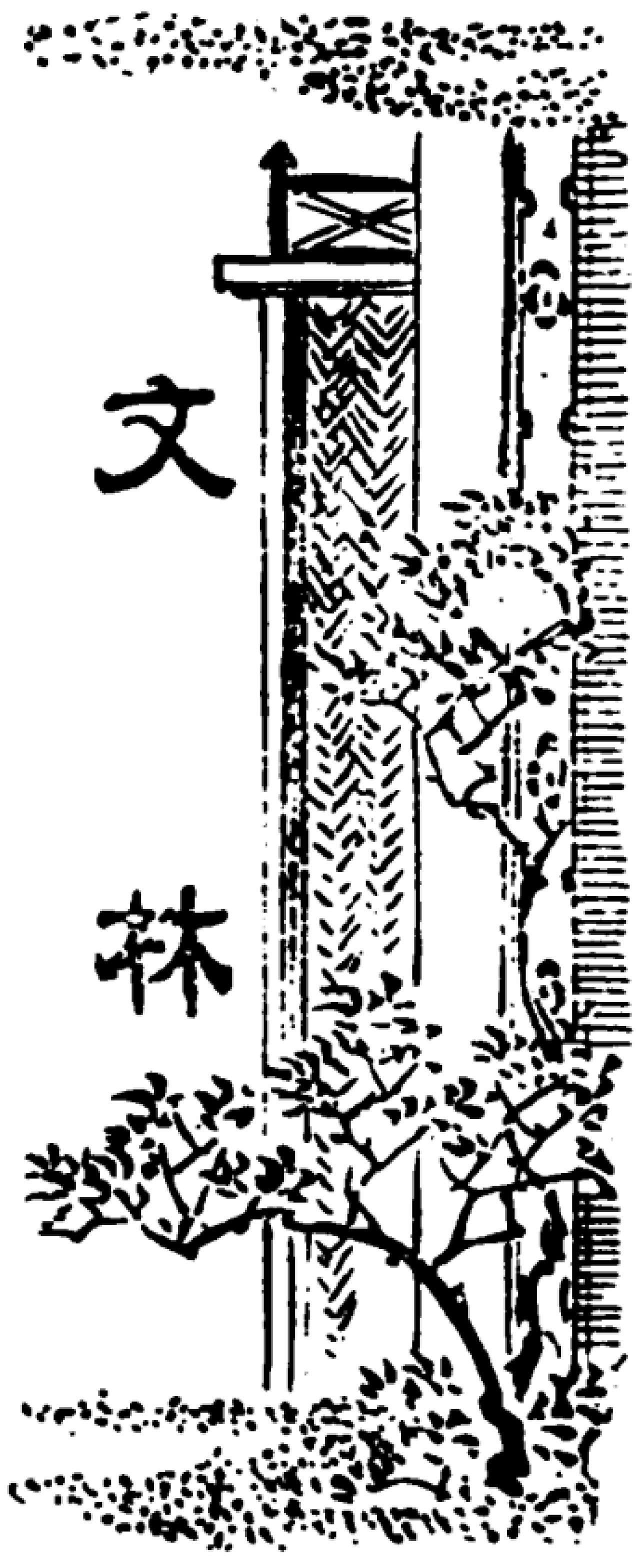
か氣に入らぬか、誰を見てもれくめんなく、なれ〳〵しげに、ちきに手を出してにぎらんとせぬが、心に合はぬか、まさかにさうではあるまいな、何處が氣に入らぬ、いざ聞かん、聞きて、尤もと思ふふしあらは、父は強ひてはをしつけぬ。あれにまさる女があらばゆるさう、いざ〳〵と疊みかけるに、浪男、端座、膝を正して、父上、さやうにせかせ給ふな、私も道樂息子ではありません、又、西洋風に自由結婚を好むにも候はず、父上のゆるさぬ人を強ひてと申すにも候はねど、私も若輩、佛國に渡る前に、早く我が友の妹を思ひまして、もとより言葉かはせしにもなけれど、約束も致さねど、我はとく其人を思ひ、其の人もまた私をと思ふたやうす、歸らば人に語り、父上にも乞はんとひとり心にひめつゝ、海山をこえ來れり候。忘れぬは大和男子の偏心、かやうの忘れぬ心をかくして、文代ぬしを娶らば、叔父にも僞るにて、且つは文代殿も、誠に父上の仰せ給ふ通り、めづらしき少女、またますものなく思ふ人はさはなるべきを、はやく一心そめたる我れよりは、二なくめづる人にそはせんが、互ひの幸福と申すも慈悲深き父上にあまへての言、しひてと仰さば もとより、背きは奉らず、忍びて父上の御仰に從はんのみと、顏色をもかへず申述るを、文代はゆくりなく聞きて、もえかへり、消えかり、我、我にもあらぬ折りから、又や父の何事をか云はんとして、煙管叩く音高し。子供ながら立ち聞くははしたなく、庭の面に歩をめぐらしぬ。文代、誠に無邪氣、たゞ少しく浪男を戀しく思ひたる念も、まだ淺澤の淺けれど、之や深さはじめなりけれ、いとゞ悲しく、涙のみなぎりかへりて前後を知らず、悲しき時はそゞろ父の戀しく、思ひ出る事は、やがては父が我の如く、浪男に思はれよと云ふ言の葉、思ひ出づれば いよ〳〵涙しどゝ、父樣〳〵、拙き身は浪男樣にいとはれ侍りたり、父樣とて我知らず聲を放つ空には、深みどり、孤雁の霞にむせるが如くなり。



文代は何處にぞ、文代、文代よと叔父の呼ぶ聲、泣き聲きかれてかと文代はおどろき、涙をぬぐひつゝ、なほ答ふる聲を失ひぬ。文代は文代はとて、叔母も尋ねぬ、浪男も共に庭に下りて、文代さん、あなたそこにおはすにや、何處へと思ひきとて、ほゝ笑みよりくるに、文代は中〳〵はづかしく、顔も上げずなほ答ふる聲もなし、浪男は少しく文代が顔さしのぞきて、文代さん、何をお泣きのと尋ねらるれど、文代はなほ答へなし、文代さん何か悲しいのです、私の心がですかととはれて文代はいよ〳〵すゝり涙のわき出でゝ、答へんとする聲をふさぎぬ。おろかの私を貴孃は深く思ふてゐすか、文代さん、文代さんと云はれて文代はいよいよすゝり泣きの聲高まるのみ、浪男惻隱の心うかびてか、いと氣の毒げに、しむし手をとりたるまゝにて、ぼう然となしをりしが、文代もう僕は心を改めやう、あだし心は忘れてしまはん、孤兒の心をいためたは、あしかりしとつぶやき、空を見て嘆息するを、文代、父の心をうけたるか、まけをしみつよく、否、一に思はれぬ人にとの心、にわかに浮かび出で、

何にかは涙はかけぬ厂がねの
ひとり消えゆく空をながめて

かう身にしむは父の御國のものにやと涙を他に事よするもあはれなり。



首夏月　久我建通

うくひすも花ものこれる山ざとは
霞まぬつきになつを志るかな

張良　前田利嗣

高き名のよに殘れるも三たびまで
さゝげしくつのひかりなる覽

野水　津軽承昭

立よりてくむ人いかにかれはからん
のなかの清水うはにごりせり

雲　竹屋光昭

いつみても懸らぬ日こそ無りけれ
富士の高根をわたるしら雲

藤原藤房卿　宮地厳夫

世をすてしのちも心にかゝりけん
よし野の山のはなのしらくも

田家卯花　北郷久政

賤のをが田中のいほのうつ木かき
ぬのさらしたる心ちこそすれ

郭子儀　阪正臣

位やまたかくさかえてこずゑさへ
しげき大木をたれかあふかぬ

夜話　萩原厳雄

あたゝむる酒はなけれど宇治山の
木の芽だに煮て一夜かたらん

芍薬　千葉胤明

ゑびす草さきいでにけり敷しまの
大和なでしこうゑしそのふに

雨中山吹　加藤義清

ちり易き八重やまぶきの花の上に
いたはりげなくそゝぐ雨かな

倭建命　岡部譲

そらよりも翔りますべき御こゝろを
仰げどかなしやひろしら鳥

大原女　鍋島榮子

頭にはおも荷をのせて大はら女の
ゆく足もとのかろげなるかな

傘破崙第一世　蜂須賀随子

島やまのいりし月こそかなしけれ
たかき雲井にすみもはてずて

夏夜雨　前田朗子

ともし火もきえん計りに風さはひ
　降くる夜半のあめぞすゞしき

殘鶯　西四辻茂子

みつ枝さすかきねに今朝も聞ゆ也
　昨日のはるのうくひすのこゑ

岸上藤　柳原愛子

わたられぬ向ひのきしの松がえに
　懸りてさけるふぢなみのはな

殘花薫風　南郷柳子

をしかりし春のかたみのさくら花
　殘るかをりをかせなちらしそ

橋下落花　岩崎寧子

河かせにちりにし花も橋のもとに
　しばし淀みてしらなみぞたつ

踏落花　三條章子

心なくふむにあらねどみちのべに
　ちりしく花はさけんかたなし

禁中落花　坂田泰子

春の夜の月のひかりもたましきの
　にはにはしろくちるさくら哉

山影映水　河村重子

動きなき山のすがたをうつしつゝ
　なかるゝ水のおとぞしづけき



●西京行幸啓の事に就きて　此の程、世上にて、兩陛下には、京都へ行幸啓あらせられん事に御内定相成たりと傳ふるものあり。されども、こは、たゞ、推し量り奉りて、言ひいでたることとなるべし。畏けれども、陛下には、近頃、宵衣肝食といふ御有樣にて、御運動の御暇たにあらせられざる、御模樣なれど、玉體の御保養を切望し奉る至情より、侍醫、さては、御側近

う仕へ奉れる人々は、折にふれつゝ、京都行幸啓の御儀を勸め奉れるに、未、とかくの叡旨を下させ給はざる由にて、御內定と申す程には進み居らずとぞ洩れ承りぬる。さりながら、かく、侍醫、その他の人々の、切に、勸め奉れる事なれど、何時かは此の事、仰せ出されんなど思ひて、其の筋にては、ひそかに、用意に怠なしとか。此の程、小笠原主殿頭が、かの地に出張中、御所、二條離宮、泉涌寺等を巡視し、半田侍從も、同樣にて、御所にては、紫宸殿、其の他御殿の御疊替を急がれ、又、月華門、其の他の御修繕にとりかゝられたるは、他日の御用意ならんと思はる。されど、目下の御模樣は、前述の如くにて、御治定と申す迄には至らずとぞ。かくはかりなむ。

●中央幼年學校行幸　天皇陛下には、去月廿九日、中央幼年學校へ臨行せさせ給へり。同日午前九時三十分御出門、御豫定の御道筋を經て、十時頃御着遊せらる。時に、大山參謀總長、桂陸軍大臣を始め、參校奏任官以上は、玄關前、同校諸官は、校門內に奉迎す。此の時、奏樂（君か代）あり。校長伊崎中佐の御先導にて、便殿に入御せさせ給ひ、暫時御休憩の後、參校勅任官以上、並に、校長に、拜謁仰付られ、次に、伊崎校長の御先導にて、講堂に臨御、順次に、左の課業を天覽に供ふ。但し、同校奏任官は、東出口廊下の一側に整列し、通御の節拜謁せり。

第一、講演。先、卒業優等生渡邊良三氏は、足利時代の歷史の一節を講演し、次に、同優等生杉原美代太郎、畑俊六の二氏は、排氣鐘に關する化學の實驗、及び說明をせり。

第二、圖書講堂に於て、卒業生徒圖書優等のものを、天覽に供ふ。

第三、障碍通過。卒業生徒、之を行ふ。

第四、器械體操。卒業生徒、之を行ふ。

右終て、便殿に入御せさせ給ひ、御休憩の後、校長御先導にて、卒業證書授與式場に臨御せさせ給ふ。伊崎

校長、卒業證書を授與し、右終て、便殿に入御、暫時御休憩の後、十二時過、還幸仰出されぬ。今回の卒業生は、合計、百四十一名なりしに、此の中の優等生たる渡邊、杉原、畑の三氏は啻に、前記講演天聽の光榮を賜はりたるのみならず、卒業證書授與式の節、御手づから、賞品として、雙眼鏡、各々一個宛下賜はり、無上の面目を施したりと云ふ。尙、當日、參校の諸官は、大山參謀總長、大迫同次長、桂陸軍大臣、中村同次官、寺内教育總監、上田陸軍大學長、柴山海軍大學長、岡澤侍從武官長、黑田東宮武官長、高木士官學校長等を始め、各隊各部の將校等、百有餘名なりと云ふ。

●皇太子殿下の御近狀　皇太子殿下には、先つ頃、海軍少佐の御職務を帶びさせ給ひて、淸水港わたりへ、御航海遊ばされん御豫定にておはしましゝに、折あしくも、御乘艦と定め奉れりし旗艦富士號内に、痲疹類似といふ、いまはしき病を患ふる者出で來にしかば、折角の思し立ち給へる、雄々しき御航海も、一時、御見合になりたりとぞ。其の後、風邪の御氣味に渉らせられ、のび〳〵になり來りしを、此の程は、御風氣も、御輕快に趣かせられ、折々は、御庭前の御運動を遊ばせらる、程なりとぞ承はる。さりながら、侍醫よりは仍、十分の御靜養を勸め參らせつゝあれば、此航海の儀は、速急には仰出さるまじとの事なり。

○東宮殿下の御近況　東宮殿下には、地久節に御參内あらせられざりしにより、豫て、御違例に渉らせられし御事なれば、御病狀如何と、御氣遣ひ申上ぐる向も尠からざるべけれど、殿下には、素より、御かりそめの御風氣にて、御熱、少々あらせられしかども、御容體書をも、宮中に差上げ給はざる程の御輕症なりしかば、追々、御快方にて、最早、御床拂もあらせられきと申す。又、兩日前、某伯が、御機嫌伺に參殿したる時なども、折柄、御庭前御散歩中にて、庭前にて拜謁仰付られしに、御氣色御麗はしくあらせられたりとぞ。

●東宮御殿の御造營　東宮御殿御造營に就きては、先つ頃、特に、御造營局を置かれ、局長以下、既に、夫夫、御任命あらせられ、目下設計中の趣なり。ほのかに承れば、新御殿は、洋館七分、和風三分の大建築にして、下圖は、片山工學博士の許にて調製中なりしに既に、此の頃出來上りたれば、程無く、舊御殿の取毀、地均等に着手せらるべしとぞ。又新御殿に要する鐵骨は、獨逸に注文せらるゝ事となり、片山博士は、其等の御用を帶び、彼地へ渡航する由にて、先發員は、過日、既に出發したりと云ふ。尙、新御殿の落成は、向六ヶ年の豫算なりと云ふ。

●地久節の御祝典　五月廿八日は、畏くも　皇后陛下の御誕辰に當らせらるゝを以て、同日午前十時三十分より、宮中に於いて、御祝典を行はせ給ふ。其の御摸様を承るに、午前九時半より、皇后宮職、式部職の職員、內殿に參向して、諸般の準備を爲し、十時頃より常宮、周宮の兩內親王を始め奉り、有栖川宮、閑宮院、小松若宮、同御息所、小松大宮御息所、北白川故宮息所各殿下には、何れも御參內あり、幷に拜賀の榮を辱うせる、松方、靑木、桂、山本、田中の各大臣、井上、土方、榎本、大木の各大臣禮遇者、德大寺侍從長、大山參謀總長、伊東海軍々令部長、長谷川近衞、川村第一兩師團長、寺內敎育總監、大迫參謀次長柴山海軍大學校長、諸岡軍務局長、東久世樞密院副議長、以下各樞密顧問官、山田撿査院長、松岡行政裁判所長、官、南部大審院長の三親任官待遇者、川口宮內次官及各宮中顧問官、麝香間、錦鷄間兩祗侯、各宮內省　勅任官（以上孰れも夫人同伴）同省　奏　任官、何れも參內し、此外一條公爵　及　同夫人、久我從一位、中山二位局にも參內あり、宮中東　溜　の間に參列、斯くて十時半、皇后陛下には御洋裝にて、桐の間に臨御、此處にて華族方を始め奉り、前記の諸官、及　奏任待遇以上の女官等へ拜謁仰付られ、一同御祝詞を申上げ、陛下には玉顏麗はしう、軈て、內殿に入御、一同へは、豐

明殿に於て酒肴を賜ひ、何れも　陛下の萬歳を祝し奉り、恩賜の酒肴を頂戴し、正午頃退下したりといふ。當日　皇太子殿下にも、御參内あらせ給はん御内定なりしに、昨夕侍醫の奏上により、其の事あらせられざりきと申す。又當日宮内省の各判任官へも、酒饌料を賜はりたり。　陛下には内殿に入御遊ばされてより、各内親王殿下を初め奉り、各皇族方を召させられ、御酒宴を開かせ給ひきと承りぬ。

●追恩謝徳祭典　神戸報國義會にては、會場の新築落成せしを以て、五月二十四日午後一時　英照皇太后及び故北白川宮能久親王に對し奉る追恩謝徳の祭典を執行し、伏見第十師團長宮殿下、東本願寺老法主の臨場ありきと。

●英國女皇陛下の誕辰　昨日は、英國女皇陛下の誕辰なれば、各國公使館にては、朝來、國旗を揭げて、祝意を表し、午前十時、宮中より　、御使として、三宮式部長を、一番町なる同國公使館に差遣せられ、同時に、田中宮内大臣、青木外務大臣を始めて、各大臣、川口宮内次官、内田、林兩局長以下、外務省高等官、露、獨、佛、伊、墺、蘭、清、白、西、墨等の諸國公使は、何れも、相前後して、正午頃迄に、英公使館を訪問し祝辭を述べられたり。

●大日本赤十字社　同社の氣運、年々に、其歩を進め、最新の統計に據れば、全國を通じ、五十八萬三千三百六十七人の社員を有し、就中東京府は、二萬千七百十七人、大阪は三萬四千七百八十一人、京都は一萬三千二百九十八人北海道は七千七百十一人、沖繩は二百五十八人、臺灣は七千六百九十三人、外國人三百三十四人ありと云ふ。

●篤志看護婦人會　赤十字社篤志看護婦人會京都支會にては、五月廿八日午後一時より、知恩院方丈に於て、第二回總會を兼ね、看護婦の修了証書授與式を擧行せり、當日は、舞子に御保養中なる、小松大將宮殿下にも、特に御臨場相成りしとか、承る、因に記す。

今回の修了証書を授與せらるべき人員は、合計三十二名なりとぞ。

●肥滿の婦人　吉原香川縣知事の北堂は、本年八十九才なるが、脂肪に富み、體量三十六貫あり。常に、吉原氏に向ひて油を取る器械を買入れよと要求すとぞ。稀有なる體量かな。

●女子大學校　成瀨仁藏氏の首唱に係る女子大學校は、其後資本募集中なりしに、設立位置に就き、東京の有志家は大阪は淫靡の風盛にして、女子教育に不適當なりと唱へ、且、東京ならば、良教師を得る便あれども、大阪は、此便なし。尙、東京には、帝國圖書館あり、大學文庫ありて、參考書に富めども、大阪は、之を缺けりなどいひて、東京に設置せんことを望み居るに、今回大隈伯の西行を機とし、大阪にては、其相談會を開く筈なりとぞ。引張凧となれるもをかし。

●師弟の情　醍醐侯爵家の慘事は、人皆の知れることなるべし。同令孃ため子は、華族女學校生徒たりしかど、同校學監下田歌子女史は、直に醍醐邸へ駈つけ、重傷に惱み居るため子孃を見るより、悲嘆の涙にくれ、須臾は、顏さへ揚げ得ざりきとぞ。這は、女史が、特に、同孃を愛し居たる故なりとか。同孃の容躰は、其の後如何になりゆきけん、氣遣はしき限にこそ。

●速成書法　書家成瀨大域氏は、速成書法實行論といふを作り、書法奬勵に付き文部大臣に建議なせしとぞ。

●女子の海外派遣　音樂學校教授幸田ゆき子女史は、この程、墺太利へ、三年間の留學を命ぜられたりといふ。女史は、曩に、歐洲に遊びて、音樂研究に從事しつゝあり老人なり。

●赤痢患者　大阪天王寺字一ッ家なる人力車夫吉村源三郎といふは、なりはひの賤しきにも似ず、心ざま正しくて、惠深き性なりければ、大分縣の人藤江豐松といふが、糊口にせまりて便り來しを、其身の貧しきをも忘れて養ひ居たり。さるに、豐松は、此の程、赤痢に

罹り、桃山病院に入り、間もなく死りしが原にて、源三郎の妻たねにも感染して入院し、これも、遂に死亡しければ其筋より、交通遮斷を施行せられたり。源三郎は、稼ぎにも出られず、忽、朝夕の食に支ふるに至りしを、近隣の者等、いと不便に思ひて、金品を惠み與へ、同所の衞生組合よりも出費して、一家の者を養ひ居しに、五月に至り、源三郎も發病して、直に送院せられ、猶、又、今年三歳なる女の子にも傳染して入院せしむるに至れるよし。いと〳〵不幸なる人にこそあれ。

●府下の赤痢豫防　府下の赤痢病は此の程、次第に蔓延し、患者の數、全國中の第一位を占むるに至れり、且、市内の同患者は、各區に亘りて、愈々流行の兆あれども、府廳に於ても今は、默視するを得ず、先つ頃小松原次官、千家府知事、大浦警視總監等の人々、會合して協議せる結果、市長に向ひては、至急に、臨時市會を開きて、費用の支出を議せしめ、避病院を開き、ぬ、豫防委員を設け、清潔法を布及せしめ、充分の豫防法を實施せん筈なりと云ふ。

●實布的理亞豫防に就き　當府下實布的里亞流行に付既記の如く、知事より、豫防に關する訓令を發したり。同病は追々蔓延の模樣にて、昨年は、患者九百人、(内死亡三百四十二人)なりしに、本年は、一月以來、既に、四百六十七人(内死亡百六十四人)に及び、未半年を經ざるに、昨年の半數以上に達したり。此内、市は、三百十九人、(死亡九十五人)郡は、百四十九人(死亡六十九人)にして、市の方は比較的に多し。されど、府廳衞生課にては、右豫防の爲、夫の血清療法を普及せしめん見込の由なり。之に關する當局者の談話を擧ぐれど、要旨は左の如し。

傳染病毒の、人體に侵入する路を大別すれば、凡三種とす、即、第一は、飲食其の他の關係に由つて、消食器より入るものを、虎列拉、腸窒扶私、赤痢等とす。第二は、外皮の創傷より侵入するものを、脾脱疽、ペスト等とす、第三は、空氣と混合し、呼吸に連れて入るものを、痘瘡、肺結核、實布的里亞等とす、豫防上より、其の難易を

論ずれば、第一、最も易く、第二、亦難からず。第三は至難なり。而して、今、大阪府下に於ける明治二十六年以來、八種傳染病の消長を見るに、赤痢は、二十六年に於て、流行を極め、二萬四千五百四人の患者を出し、翌年は、六千百九十八人に減じ、爾後四年間は、一千三百人より、一千四百人の間に昇降し、三十一年は、一千百三十九人に止まれり。發疹窒扶私は、二十六年に、二十七人ありしに、漸次減少して、三十一年には、僅に、二人ありしのみ。腸窒扶私は、二十六年に、千二百十五人、二十七年は、千五百九人ありしに、二十八年より、追々減じて、三十一年には、四百二十六人となれり。痘瘡は、二十六年と三十年とに、虎列拉は、二十八年に流行を逞うせしも、其の後は、漸次減退せり。大體上より言へば、府下の傳染病は、年々歳々減少するなり。然るに、獨、實布的里亞は、二十六年に、三百人、二十七年に、二百四十五人、二十六年に、二百三十九人、二十九年に、三百七十三人、三十年に、六百五十三人と、漸次増加し來り、三十一年に至り、九百人の多數に上れり。○此の趨勢を以て推せば、前途、其の止まる所を知ざるが如し。是、甚憂ふべきことにして、必、之が防遏の策を講ぜざるべからず。然れども、如何せん。病毒の經路は、主として、空氣に在りて、夫の虎列拉、赤痢杯に於て、飲食物を消毒するが如く、確實に豫防し得べきものなく、去りとて、今日の學術の程度に於て出來得る限りは、豫防の手段を講ずべきこと勿論にして、其手段としては、從前より施行し來れる、患者の唾液、喀痰に觸接せし器物の消毒隔離等充分必要なれども、北里及びベーリング氏に由りて發明せられし免疫血清を、治療上に使用するのみならず、豫防の目的にも使用するを必要なりとす。抑、實布的里亞血清の、治療上卓効あるは、既に學者間の實驗にして、政府に於ても、血清藥院を設け、血清の賣下げをするに至りたれば、効力の上に就きて、今更、喋々するを要せず。夫の、天然痘を豫防するに、牛痘苗を用ふるが如く、實布的里亞治療血清を、健體に注射して免疫せしむること、即、其の侵襲を避くることを得べけれども、何分、天然痘に對する種痘の如く、長期間の効力なく、僅に一二週間に過ぎざれば、甚遺憾なり。併しながら、假令、一時だりとも、免疫を得ること確實なるが故に、流行時に當りては、此の血清を用ひて、豫防する外、他に道なく、少くも、患家、及び近隣に於ける豫防としては、血清を以て、随一の利器といふとも決して過言に非ず。今回、知事の訓令に基き、一廳縣郡市町村吏員に於て、一面は醫師に於て、消毒隔離を勵行すると共に、豫防的注射を勸誘し、年々歳々、猛進の勢ある實布的里亞を治療するに至らんことを企望して止まざるなり。尚、一言したきは、實布的里亞を治療するに當り、血清を用ふるときは、一に、其効を、血清に待ち、病症局處の治療、體力維持を忽せにする傾きあり。宜しく、注意すべきなり。

●令徳會　神田和泉町なる神道金光教會東京分所長畑徳三郎氏は、今回皇國の婦女に、古より備はれる令徳を保たしめむといふ目的にて、新に、令徳會といふものを企て、五月廿八日午後二時より、同區錦町一丁

目なる斯文學會にて發會式を擧行せり。式場の正面なる、一段高き所には、大卓を据ゑて、琵琶菖蒲なんどの生花を飾り、少し下りて、主唱者の席、顧問席等を設けたり。來會者は、凡、三百人ばかりにて、其中、婦人は半に過ぎぬ。

來賓席には、稻葉子爵、重野文學博士、井上賴國翁、又婦人席には、國分操子、奥田照子などの人々を見うけたり。

斯くて、式は、午後三時とも覺しき頃、唱歌と共に始りぬ。主唱者まづ、發會の辭を述べ、次に君が代の唱歌あり。勅語奉讀、次に、金剛石の唱歌あり。次に兩陛下の萬歲を唱へ奉る。夫より、佐藤範雄、下田義天類二氏の演說、國分操子の祝文朗讀、奥田照子の演說あり。次に、唱歌、閉會の辭あり。了て來會者一同に、茶菓酒饌を饗して、七時頃散會せり。同會は、日本主義を本として、婦人の智德を養ひ、賢妻良母を造出するの目的にて、既に、千餘名の加入者あり、定時講演及雜誌發行等の準備も整ひ居れど、七月頃には、雜誌第一號を發兌するに至るべしと云ふ。

●正直者　去にし月の半頃、住吉停車場にて二枚の五圓紙幣をひろひし者なり。落し主の知れぬより、驛長に預けおき、其のよし、大坂朝日新聞に投書せしに、そのおとし主は、谷町二丁目　竹原安兵衛といふものにて、その投書を見て、直に、驛長の許に到りて、その遺金を請取り、更に、投書に　拾ひ主の宅を問ひ、南區八幡町の宅に至りて、厚く謝し、菓子料として、金一圓を贈りしに、其の人、これを受けず。竹原氏は、再三、これを强ひしかど、其の人、然らば、今後、朝日新聞に載らん貧困者に、其許の名にて惠贈し、いづこまでも、我が本名は記さぬ樣にせられたしといひしかど竹原氏も、今は、其の意を戾きかねていふがまゝにしたりとぞ。今の世には、ありがたき心掛の人といふべし。

●老書師の譽　此程府知事の官舍に開きたる大阪婦

人慈善會に出品せし老書師上田耕冲翁の筆に成れる、稲に日の出の圖は、流石に、圓山派の餘韵を留めて、設色あざやかに、趣致け高くて、げに、八十一翁が、多年の修練を見るに足れりとて、こたび、宮内省の御買上となりぬとぞ。翁の光榮とこそいふべけれ。

●X光線と彈丸　ある英國の一軍醫、オムドルマン戰役後の負傷兵百二十一人を治療すべき命令を受けたりしに、此等負傷兵の體内には、彈丸潜入せるを以て、之を除き去らざるべからず。然るに、其の中の廿一人は、普通の方法にては、彈丸の潜在所を知ること能はざりしかど、X光線を使用せしに、明に其の所在を知るを得て、容易く、之を除出すことを得たりと云ふ。

●小兒科の診察時間　醫科大學第一醫院の小兒科にては、從前、新來患者の診察申込は、毎週月水金の午前九時までなりしを、先つ頃より、一時間繰り上げ、午前八時限りと改めたり。然るに世間にて往々、これを知らずして、定の時刻より後に申込み、當日の診察を斷られて空しく、歸るものありとぞ。斯くては、徒に、時日を費すのみならず、治療の時機を過まり、氣の毒さも大方ならねど、爾來は、人この注意を望むと、同科の醫員は申されき。

●捕鯨上の一發明　工學士藤田常一氏は、佐賀縣の人なり。豫ねてより、本邦捕鯨術の進歩の遲々たるを慨き居しに、去年の夏、大學の業を卒へて後、ひたすら、捕鯨法に付きて、種々に思をくだき、あまたゝび試驗を重ねて、去にし四月に至り、遂に、其の方法を考へ出でたり。其の法は、電氣の作用に據るものにて、一艘の小舟に、クロライド蓄電池、及鐵砲を据ゑ置き鯨の水上に浮ぶを見るときは、長さ二尺餘にて、後端の、一きは高き銛を、右の鐵砲に込め、其の筒先に、銛の後端の引掛かる位なる鐶を安置し、鐶の下部より、電線を通じ、鯨の居所まで達する位の長さにして、發射す。其の線は、豫、電氣の、水中に離散せぬ樣に造り置くなり。かくて、銛は、電線と共に、鯨に中れど、

該電池に据付けたる廻轉離成器を廻轉して、適當なる電壓の交通電流を起す。かくする時は、鯨は、忽、電氣に打たれて、恰も、眠れるが如く動かすなるなり。さて、一方に用意せる捕鯨船を走らして、鯨に近附き、動脈等の機關を切斷して、死に至らしめ、陸に引き來る仕組なりといふ。氏は、去月二十日、長崎縣五島近海にて、其の地方の漁夫等が、網に罹りたる大鯨を捕ふること能はざりし時、右の法方にて、容易く捕獲したりとぞ。氏は、五月以後に至らむ、小汽船を購入して、此の業を、盛に營まんと期し居る由なり。よき發明といふべし。



明治三十二年度女鑑歌文月並兼題

六月廿日	歌	浦夏月	六月十日〆切
	文	遠方より母の病を訪れたるに答る文	
七月五日	歌	團扇	六月廿五日〆切
	文	待雨	
七月廿日	歌	橘姫	七月十日〆切
	文	蟻	
八月五日	歌	泉聲秋近	七月廿五日〆切
	文	故鄉	
八月廿日	歌	霧中虫	八月十日〆切
	文	舟遊	
九月五日	歌	閑居月	八日廿五日〆切
	文	水害を見舞ふ文	
九月廿日	歌	海邊霧	九月十日〆切
	文	暴風	
十月五日	歌	擣衣所々	九月廿五日〆切
	文	菊の花につけて友におくる文	



教の庭

六月五日兼題　瞿麥

天

ひのもとの國のなれつる花としも
思へはゆかしやまとなでしこ　東京四谷區南いが町四十九　牧瀬かう子

地

つゆにたへぬ花とみゆれど撫子に
みさをのふしはこもりぬる哉　日本橋區濱町一ノ廿四　諸井久良子

人

家にはに多したてつゝわたし世の
いろにはそめじなでしこの花　伊賀府中村　服部かつゑ子

秀逸（十首）

から日本とりどりにこそ匂ふなれ
國のなでしこはなのさかりは　肥後　佐々有鄰子

いつしかとたれふし立てたる瞿麥の
花のさかりをみるそうれしき　三河　永井さい子

くさ花の何はあれともめてたきは
つゆにはへるなでしこの花　甲斐　坂田きみ子

大きみの深きめぐみの露をおびて
さきこそまされ大和なでしこ　信濃　金原吉子

咲きしよりから紅ににはへとも
さすかにゆかし大和なでしこ　下野　青木たま子

わはれにも母がころもの袖かきに
すがりてさけりなでしこの花　信濃　齋藤かつ子

とり〳〵に色か麗はしく匂ふかな
わかそでかきのなでしこの花　横濱　綿野りき子

なつ草のしげみの中にまじれとも
いろかゆかしき大和なでしこ　福原　菫子

しら露をたまとかざしてゆしきは
よもぎがやどのなでしこの花　三河　村田多豆女

麗はしく咲きそろひとも匂ふかな
をしへのにはのなでしこの花　長崎　日高かず子

（以下原稿到着順）

住みあれしそののなでしこさきくれば
みだれながらにはなさきにける　濱口貞子

たらちれのをしへの庭のつゆおびて
いよいよいろそふなでしこのはな　澤井しん子

我やごのにはのなでしこけさみれば
つゆもたわゝにほゝゑみにけり　澤井國子

ふりすてし我ふるささのなでしこは
へたてぬいろにはな咲きにけり　安孫子かず子

夏ののにたかふりすてしなでしこそ
いさわかやさにうつしうゑてん　横山柳子

しきしまの大和にしきさにほふなり
すかたもきよきなでしこのはな　高橋かれ子

白つゆのちぶさなるらんひめつゆの
そひふししたるなでしこのはな　石井登子

はぐくみしかひ社みゆれなでしこの
よにめでらるゝさきはきにけり　吉富彦子

植ゑおきし庭のなでしこはなさきて
つゆのにほひもさかりなりけり　松永信子

起きいでゝまづうちむかふ花そのの
つゆによそへるやまさなでしこ　佐々小琴子

生したてし庭のなでしこあさな夕な
つゆおもげなるはなのいろかな　坂本遊多默子

露をたにうちもはらはてなでしこは
にはのをしへもたがへざりけり　本庄志雅子

其の色はからくれなゐにさきながら
こゝろはやまさなでしこのはな　佳山幾子

たちよりて手をるもうれしなでしこの
ゑまひゆかしきはなのおもかけ　潤本家壽子

しき島の大和なでしこ咲きしより　森山悦子

からのにしきはいろあせにけり　森山英子

朝夕におふしたてたるなてしこも
おのかむきむき咲きいでにけり　中村壽枝子

わかやごの庭のなでしこ咲き初めて
夕くれなゐのいろそゆかしき　羽藤榮子

しき島のやまさなでしこむきむきに
咲けさこゝろはひさつなりけり　田代艶子

よもき生の中に生ふれごやさしきは
さすかやまさのなてしこのはな　田代綾子

なつくさのしけみかけに生ひ出てて
やさしくさけるなてしこのはな　秋山もみぢ子

こゝろしてま垣へうへしなでしこの
去年にもましてにほひ出てけり　上杉光子

秋近きつゆをふゝみてにはのおもの
しされさやいはむ常なつのはな　河田いし子

うるはしき花はさくらにおさらしさ
さきいてにけりやまさなてしこ　羽田三嬉子

にしきさもみねわたるかな朝つゆに
ぬれていろますなてしこのはな　石川孝子

めでられてうれしかりけり庭もせに
おほしたてたるなてしこのはな　立田原寛子

おほしたてし庭のなてし子露そひて
ふかきいろにそ咲きいてにける　立田原國子

をりもあらは外つ國ひさにみせはやな
いろもめてたきやまさなてし子　立田原直子

あれはてゝよもぎのしけゐ此の宿に
たれにみよさてなてし子のさく　立山原富子

ふるささの庭はあれ野さなりはてゝ
ひさりほゝゑむなてし子のはな

淺茅生にましるなてしこめかれせす
ものにもうゑてめてにけるかな
林環子

うつくしさ人もほめけりおくつゆに
にほひこぼるゝにはのなてしこ
仁保しま子

昨日みしつほみもけさは咲きぬやさ
さくおきいつるとこなつのはな
橋本さ代子

花の色はからくれなゐにさけれども
みなしきしまのやまとなてしこ
山田璋子

二葉よりまちしかひありうれしくも
けふさきそめしそのゝなでしこ
西元花子

手いれせしそのゝなでしこ咲き出てゝ
はなのさかりとなるそうれしき
西元さも子

朝ゆふのにはのをしへにしたがひて
けだかくさきぬ大和なでしこ
青木治子

なつぐさの中にましりて咲きぬれど
おひたちまさるやまとなでしこ
田坂よし子

いく朝のつゆのなさけになでしこの
はなもいつしかさきそめにけり
山田きよ子

なでしこはおのがむきく＼咲きにけり
たゝひともとのたれのこほれて
名取よし子

こゝろしてをしへの庭にうゑしより
つゆもたがはすにほふなてしこ
名取正代子

なつくさの茂きまがきにさき出てゝ
つゆおもけなるなでしこのはな
大谷津峰子

なてしこのませの内なるはつはなは
あめやふりけんつゆのこほるゝ
服部よれ子

たまちさの道のかたへのなつくさに
ましりて咲ける床なつの花
服部錦子

朝な夕なおくしらつゆにいろそひて
服部道子

なでしこの花はやまともからもあれど
くれなゐにほふなてしこのな
港谷いく子

咫ないさひさふ人もなきいはが根に
こゝろの染まぬいろなかりけり
國井はな子

おほしたてしゝろしの色にあらはれて
咲けるも由かしさこなつのはな
國井しん子

うすくこく色をきそひつさきいでゝ
まがきをかざるやまさなでしこ
尾崎嘉子

花のいろはからくれなゐに匂へども
ながめゆかしなさこなつのはな
佐伯やす子

さゆり葉に枝さしかはすなでしこの
わかしきしまのやまさなでしこ
服部繁子

風のみかつゆにもなひくなてしこの
つゆもいろそふゆうつき夜かな
河方喜代子

去年の秋たれまき置きしさこなつの
いろかそへつゝ咲けるうれしき
大谷友子

うすくこく色さまぐ＼にさきにけり
いろもゆかしくさき出てにけり
紀内せい子

なつくさの中に一きはうすくこく
つゆをよそへるなでしこのはな
木村きうよ子

朝なく＼さきそはりつゝ塵だにも
いろなつかしきなてしこのはな
林禮子

土かひしをしへのにはのなでしこは
おかぬかきれのなでしこのはな
數島花子

さつくにのひさの庭にもさきいてゝ
子等か為まひに匂ひあひけり
笹子茂子

賤か家のにはの小くさのうちにまた
ちりたにすゑぬやまさなでしこ
鵜濃喜代子

さま〳〵の色ににほへさあさからぬ
　つゆのめぐみのにはのなてしこ　羽室家子

あさつ露の玉をかざしてさきにけり
　いろなつかしきなてしこのはな　佐々敏子

賤が家のはらはぬにはもきのふけふ
　にしきおりなすやまさなてしこ　椎野ぬき子

こさくさの花にもましてめてたきは
　わがしめゆひしませのなてしこ　中山さみ子

こそよりはまこゝろ深くさゝきけむ
　さま〳〵にほふやまさなてしこ　曾田なか子

たか露のなさけにぬれし朝な〳〵
　ちふさにゑめるなてしこのはな　齋藤うた子

朝ゆふにおふしたてたるませのうちに
　つゆもいろあるなてしこのはな　横山すが子

なつくさのいろのさま〳〵一もさに
　しむるはあはれなてしこのはな　幹海わか子

露しげきよもきがなかにさき出てゝ
　あはれふかしやなてしこのはな　片山あや子

なてしこの咲出てしよりさま〳〵の
　はなもいろなく見ゐにけるかな　松浦糸子

なてしこにむすへるつゆもたま光る
　あさけのにはそしつけかりける　舘脇ます子

朝またきまがきにさけるなてしこは
　そひふしがほにつゆのおくかな　伊賀直子

露おひて咲けるすがたのうるはしく
　にはふもうれしやまさなてしこ　樋谷たみ子

なつくさのなかに一もさゝこなつの
　はななつかしく咲きいでにけり　勝山忠子

二葉よりこゝろつくししなでしこは
　いろうるはしく咲きいでにけり　志茂多廣子

さきしより色なつかしくちりをたに
　すゑしさおもふさこなつのはな　菅千歳子

しきしまのやまさの庭にうつしては
　からなてしこもなつかしきかな　宇高まつ子

しさろなる賤が垣根もなつかしく
　こゝろのさまるなでしこのはな　白石梅

つゆをおひて咲き出でにけり瞿麥は
　やまさにしきさまがふばかりに　吉田久子

おく露にぬれていろそふなてしこの
　ひさりほゝゑむこのあさけかな　由井浪子

なつくさのしげる中にもこささらに
　めたちて見ゆるなてしこのはな　山根久子

しつの男が垣根にもなほなてしこの
　いろなつかしくさきいてにけり　新泉翠子

おふしたてし恋のつゆをそのまゝに
　ぬれていろそふなてしこのはな　新泉さ代子

夏の夜のふしもみしかき床なつに
　朝つゆふかくおきそはるかな　吾妻ちか子

あれはつる草のまがきもいつしかさ
　にしきなしたるやまさなてしこ　戸塚てつ子

からにしきをりかけたりさ見る迄に
　かきれに咲けるなてしこのはな　松島きみ子

日のもさのみはたの色にさきいでし
　こゝろもあかきやまさなてしこ　齋藤よし子

しづが家の垣根にさけるなてしこは
　はなのすがたもあはれなりけり　河原芳子

土がひしひさのこゝろのやさしさを
　はなに見せたるやまさなでしこ　小林卓江子

しきしまの大和なてしこうすくこく
にはのまがきにさきにほふかな　高やす子

としことに色ふかみ咲くしきしまの
をしへのにはのやまとなてしこ　吉田元子

いとまあらはきてもみよかし唐人よ
ちくさにまさるやまとなてしこ　吉田碩子

春の野にすみれつみにしあさゝへは
からなてしこのはなそ咲きける　吉田靜子

薄く濃く咲き出てにけりきのふけふ
しつかゝきねのなてしこのはな　吉田豊子

妹によく似るはなそともおもふかな
ませのうちなるやまとなてしこ　小林元子

風きよきあをはのかけに咲きいてゝ
すゝしくゝらすとこなつのはな　吉田數枝子

しけりあふ千草のなかに咲きいてゝ
ひとりほゝゑむなてしこのはな　谷畑富士子

みる人はたれもあはれをかけぬらん
つゆをおきたるなてしこのはな　安積茂子

朝またき起きいてゝみれは宵の雨に
ぬれてほゝ笑むなてしこのはな　小林久子

しぼみなばなにを友としなかめみむ
かきねにうゑしなてしこのはな　本多正枝子

朝な〳〵とく起きいてゝなかむなり
かきねに咲けるなてしこのはな　宍粟富末子

なてしこはいつこの庭もへたてなく
めてはやさるゝ花にこそあれ　萩原章子

おのかしゝ庭のをしへのいろ〳〵に
やまとなてしこさきいてにけり　河村君子

手すさひにまきてし花の咲きいてゝ　竹村竹里子

こゝろなき人には見せしたくひなき
にしきもとにほふとこなつの花　武田榮子

いろにさきたるなてしこのはな

人のこぬやとのなてしこさきにけり
たかなさけにておふしたてけむ　李家貢實子

庭のおもにおふしたてたるなてしこの
はなうつくしくさきいてにけり　楠しづ子

たらちねの親のこゝろにあさな〳〵
あかでながむるにはのなでしこ　内海順子

あさにはにおりたちみれは二ッ三ッ
まがきにきけるなてしこのはな　駒澤まつ子

なつ草のみとりがなかにゆかしくも
ひともとまじるとこなつのはな　目黒佐喜子

わが庭のかきのなでしこ咲きにけり
折りてかざゝむつゆのひぬ間に　都水春子

うすくこく色さまざまにさきいでゝ
まがきにあまるなでしこのはな　寺田みち子

はしちかく植ゑしなでしこあさ露に
みだるゝばかり花ぞ咲きける　北原季子

のきちかくうゑしなでしこ花さきて
つゆさへいろをそへてけるかな　八木沼里子

宵のあめをつゆとおきつゝ咲きいでゝ
あさ日ににほふかはらなでしこ　坂田彌代子

わらはへか馬草のなかにましりけり
あら野にさきしなでしこのはな　竹尾小徑子

おにゆりにましりてもさく撫しこの
はなのこゝろはをゝしかるらむ　河合縫子

よわけにはみねてもつよしみな月の
てる日にさきてにほふなでしこ　服部萬子

おく露のしら玉よそふなてしこの　はなにはふくなにはのあさかせ　加藤加壽女

あはれさは誰も見るらんあさつゆに　ぬれていろますなてしこのはな　柳元いさ子

わか園のまかきに咲けるなてしこに　なつかしきまてふくむあさつゆ　尾倉登子

さくおきてはらひてやらん碧參の　はなはつゆにもたへかたけなり　永井あき子

夏くさのしけみのなかになてしこの　ひさりほゝゑむはなのやさしさ　寺澤なか子

露おひてかきれにまけるなてしこの　はなのさかりのいろそねならぬ　須磨つた子

たらちれの親のめくみのおくつゆに　ぬれていろますなてしこのはな　ゆみ子

ふるさとのいかにこひしきわか妹の　かきれに咲けるさこなつのはな　横手こう子

わか宿のにはのかきほはあれぬれさ　ひさりほゝゑむなでしこのはな　横手たつ子

なてしこの雨にたわみてみたるれさ　にほへるいろはかはらさりけり　横手ふく子

朝つゆにほころひそめて日さかりに　かついろまさるなてしこのな　菅原松子

さこなつの花みてくらすこさなれば　なかき日かけもみじかかりけり　服部倫子

夏くさのやつろるなかにうつろはぬ　いろもゆかしきやまさなでしこ　德永萬壽子

あなゆかし色うるはしきなでしこの　つゆおもげなるはなのすがたは　小森田輝子

いろいろの露をかざしてにほふなり　佐々子富枝

朝よひにこゝろつくししかひみねて　さこなづかしきなでしこのはな　佐々値嘉子

誰ゆゑにさてやつゆけきにはの面に　わがなでしこは花さきにけり　佐藤玄子

あさ夕にこゝろにかけしなでしこは　いろなづかしきなでしこのはな　澤田春子

夏くさのしげみがなかにさきいでゝ　いろうるはしきやまさなでしこ　澤田十萬里子

しら露のたまのひかりにてらされて　さやかにほふなてしこのはな　山田いれ子

ならはゞやしづが垣根の咲き出てゝ　いろ香めでたきなてしこのはな　神田秀子

さもすればさつくにぶりをならふ世に　ゆかしのはなやまさなでしこ　神田秀子

塵ならではらはぬにはのあさつゆに　ぬれてしをるゝさこなつのはな　小川清子

遠方なる叔母君の病をとふ文

天　　　甲府山田町　名取正代子

御叔母君さいつ頃より、御心地すぐれさせ給はで、其他の病院に、入らせ給ひぬるよし承り、いみじう驚き入り侍りぬ、其後はいかに少しは、怠らせ給ひつるか。存せぬ事とてとくも伺ひ奉らす、怠りの罪ゆるし給ひてよ。さても此頃は氣候の變り目とて、とかく病もおこり易う侍るに、ましで御持病さへおはし給ふ御身の、殊に旅の空に、れはしませば、いかばかりわびしく

も御心細くもれぼし給ふらんと、推しはかりまつりてなん。妾もいかで御枕邊近うまゐのぼりて、親しく御けしきをも伺ひまゐらせ、且は朝夕の撫でさすりの事ども。何くれとつかうまつらまほしう思ひ侍れど、かく遙に隔たれる身の、いかさまにも心にまかせず、たゞそなたの空のみ打ながめては案じわづらひ侍り。さりながら御地は都の事とて、くすし看護婦などもなかなか手練のものあまた侍るべけれど、それをたのみとせさせ給ひて、御心强う持たせ給ひ、一日も早う御病のおこたらせ給はんとを蔭ながらいのり居り侍り、なは摸樣によりては、母事其御地へ罷り出づべき筈に侍れど、とにもかくにもみけしき委しうもらし給ひてよ。まづは取りあへず御伺まで、　あなかしこ

地　　　　福井縣福井市毛矢町　來栖となみ子

先つ日母上よりまゐらせし文の御かへし、日頃すぢめたゞしき叔母君にもにげなう、かくおくるゝは御病ひにかゝらせ給ふ人にてもおはするにや、はたもだしがたき御事の起り志にやと、そゞろに心痛め居り侍り志に、けふ叔父君よりの御文によれど、誠やいたつきの御床に日數をへつゝ、打なやませれはしますとか、さても、此頃の御有樣はいかに、御藥の志るしはいまだあらはれたまはぬか、御食事はいまだ牛乳をだに召されたまはぬか、いぶせき御ふすまの中にのみたれこめてれはします御心の中、いかに煩はしくれはすらんと推しはかりまゐらするになん、あはれいにし年の如く、此地に居たまはんには、母上なりとも、おのれなりとももしぞしど御許にまゐりて、すこしは御心なぐさめ奉らんすべもあらめど、いかにせん今は海山をへだつる身にしあれど、幾度思ふもかひなしや、されど、御年も末だ御老體と申す程にもなく、日頃の御養生もよろしけれど、やがて御藥のしるしもあらはれ、御食事も進ませられ遠からず、御おこたり給ふらんとそれのみ賴母しくぞんぜられ候、此上は一入御身御大切に遊ばされ、一日も早くよき御たよりのあらんことを、蔭ながら朝夕いのりまゐらするになん、　あなかしこ

人　　　　伊勢度會郡宇治中之切　河村君子

日頃絶え間なく御消息給はる御身の、久しう音づれ給はぬにいかにれはしますらんと、いぶかしみ居候處、故鄕よりの手紙に、叔母君にはさいつ頃より煩ひ給ふとありしに初めて知り侍りしが、とくより聞かましかど伺ひ侍るべきに、此頃の御樣子はいかに候ふか、妾も御許に仕へ奉りて、みとりのわざ致したく侍れど、遠方に物學びする身の致し方なく候へど、御ゆるし下されたく先は、御見舞まで取敢ずかくなん。　あなかしこ

（以下原稿到着順）

中村さく子

さかく不順に候ところ、先日の御手紙にて承り候へば、叔母君様には御心地あしく御ひきこもり遊ばされ候由、此せつは、如何渡らせられ候か、御地は當地にくらべては寒暑もしのぎ安う且つ御薬用も御届き、殊につれ〳〵御養生もよくおはしまし候へば、御當分の事とぞんし候へども、何分御老年の上、時候もあしく候へば、御保養專一と偏に念じ上候、御見舞の印迄に御目にかけ候間、御受納下されたく候、風月堂製カステーラ御見舞用にも相成候や否やはかりがたく候へども、御かたはらに侍りて御看護致したく候へども郵便すら十日あまりも致ゆる程にてたやすう参上なしかたく、せん方なきまゝ手紙を以て御見まひ申上候、先にはあら〳〵かしこ、

大谷津峰子

一筆示し上けまゐらせ候、さて其後は、何かどゝ俗事にのみまぎれうちたゐて御けしきも伺ひ参らず、かく杜若のさきそむゐる頃まで家り候ひし事、いくへにも御ゆるし下され度候、承り候へば叔母君には此程より御いたつきにかゝらせられ候由、此頃は御容体も定かには相分り申さず、日々御案じ申居候、女子のはかなき心より、神だのみなどいたし居候、叔母君にはかれ〳〵御心雄々しく御健にいらせられ候へば、日ならず、御全快遊ばされ候はんと推し上候、何卒御養生遊ばし一日も早うよき御おとづれのきかまほしう一重に念じ上らし先は余り御遥々しさの御わびがてら、御見舞まで　あなかしこ

佐々敏子

あてやかなりし花の色も、いつしかあせはてゝみどりしげれるわか葉のかげに郭公の聲きくころと相成候、叔母上様にはこの頃御容躰いかにわたらせられ候か、遠くへたゝる身のかなしさにしたしくお側にはべりて慰めまゐらすることもかなはず、いと〳〵口惜う存ぜられ候。かつ御地には名高き醫師もおはすここに候へば、御本復近きにあらんとぞんぜられ候へども、猶此の上御養生怠り玉はで一日もはやう癒ゐさせ玉ふ樣、いのりまつるになん。この程は、御消息もうけたまはらればいとおぼつかなさに、廻らぬ筆もて、みけしき御伺ひ申上候、あなかしこ、

紀内せい子

學びの業のひまなきまゝ、思ながら御ぶさた仕候ひしつみ、御ゆるし下されたく、いくゑにもねがひ上候、さてうけ承候へば、御叔母様には先つ頃より御いたつきにておはする由、いとゞむねつぶれ、せめて程近き御わたりだに住み候はんには、直にはせ参して、夜晝御まくら邊によりそひ、つゞくかぎりは御みとり申上ぐ可き筈に候へども、いかにせん雲井はるけき地にしあれば、思ひのまゝにもなりがたく、いと〳〵口惜しく御座候、殊に日頃より御孝心深き雪子様の御心づかひ、いかばかりとおしはかりまゐらするだに、むねのみせまりきて現とも思はれず、一日も早く御全快遊ばされん事のみ朝な夕なにねんじ居候まゝ、御氣長く御保養遊ばし給はん事を、ひたすらねがひ参るになん。あなかしこ。

河方喜代子

折にふれ時に逢ひつゝ、戀しく思ひ参りぬる叔母君のみいたつきは、いかゞならせ給ふらん、御年なみのよろひろわかたず、み心くだき給ふ御さがにましますに、まいて此頃はやましき時候なれは、みひざゐ間近うはんべりて、なぐさめまつらんよすがもと、思ひぬれど、かなしくも二百里あまり遠くへだゝりぬるに、まいて汽車などあらぬ、たよりよからぬ土地にしあなれば、まうのぼらんも、中々に心にまかせぬ、ふしのみにしあなれば、たゞ〳〵、心にのみ、ひと日も、早うすが〳〵しう、ならせ給はん事のみを、神かけて、祈り参るになん、されは敏ならぬ身の、云参らんは、をこがましき事にしあなれども、くすしのぬしやみとりのぬしや、よく〳〵いらませ給へと、ひたすらにねぎまつるになん」あなかしこ

幡谷だみ子

其後は久しくみけしきだに伺ひまつらず、いかに渡らせ給ふらんとおもふ折柄、承り侍れは、叔母君には御心地例ならで、病の床に打ふし給ふよし、知らぬ事とて御見まひも申上げず、誠に申譯もこれなくなん、さても、きのふけふは御容体いかに入らせられてか、せめては近きわたりに居り候はんには、あけくれ御伺ひ侍りて、御なぐさめ申すべけれども、かく海山隔り居候事とて、たび〱訪ひまゐらすることも叶はず、いとゞ心許なき限りにこそ、就ては、母事壹兩日の内、此地出立いたし候まゝ、何とぞ心強う御思召被下度、たゞ〱一日もはやうおこたらせ給ふやう、神かけていのりいりまゐらするになむ、

宇高松子

御別れ申してより、早三年あまりにも相成り、御なつかしく存じ居り候折柄、今年は梅雨にもならば、入湯かた〱出浮だすへくとの御文、うれしく毎日母上様と共に、指折數へて、其日の來るを待侘しかひもなく例のかつけ病おこりて、此度は起居も御意にまかせかね候趣、驚入り申候、其後御容体は如何に御座候か、程近き所ならは、直に馳せ參りて、御看護のかたはしをだに助けまゐらすべきに、何を申すも海山遠くへだて居り候へば、思ふのみにて心にまかせず、誠に〱殘念に存候、さりながら常地などゝはかはり、都の御事とて、名醫も多く候へば、やがては快くならせらるべくとは存じ候へども、時分柄一層御保養遊ばされ、來夏休には、よし子様をも御つれまし、御出被度下候様、一日も早く御全快の程、皆々はるかに念じ上候、右はとりあへす御見舞のみ、かしこ、

大谷美子

受けたまはりぬ、御叔母様の、先比より御病床になやませたまへるよし、けふ御妹子様よりの御玉章にていとゞ打驚かれ候を、ましてや花子のきみには、さぞかし御心くるしめ居たまふらんと、推しはかりまゐらするになん、このころはいかゞ渡らせられ候にや、くはしき御容体御しらせたまはりたうなん、扨て、古人も、一に看病、二に藥とか申せば、この後は御身はいれたまはで、いよ〱ひたすらにおばきみの御看病を怠りたまひそ、日頃御身すこやかにましませば、ちかき内には、御看病の御いさをし表はれて、もとのすこやかなる御身にたちかへりたまふらんとこそおぼゆれ、あはれまゐりたき心はせつなれど、やへのくもきりにへだゝられて、直に伺ひまつりかぬることの口をしさよ、いづれたれかはまゐるべけれど、この後とみに御病状おはしまさはたゞちに御知らせ下されたう、まづはとりいそき御見舞迄かくなん、あなかしこ、

河原芳子

つゝしみて聞えまゐらす、今日故郷よりこの地に罷り越し、友垣に承り侍れば、叔母君には、先つ日よりかりそめならぬいたづきにかゝらせ給ひ、一時はいたく御なやみなされしかども、皆々の手あつきみとりと、くすしの力づくしとによりて、今はすこしくをこたらせ給ひぬれば、やがてはすこやかになりゆきまさんとの御事、げにあさましのまがことやと、驚きはべりてなむ、海山遠くかけへだてたる身には、きゝてこそしれ、そよとだに風のたよりもなきものを、しろよしなくてすぐしなり、さるにてもうらめしきは姉上の御心や、日頃より叔母君の御許にはんべりて、かしづき給ひながら、其の病を、妾にしらせたまはぬとは、そもいかゞにや、しらせなば歎かんことをはかりてなるべけれど、そは事の外に侍り、とにかくに、まことの知らせ給はりて、其の後の病の様などとく〱きかせてよ、なほ叔母君には、姉上よりよきに言告げたまへかし、こはわけて願ふになん、かしこ、

部水春子

其後、叔母君には御いたつき如何におはしますらむ、此程の御消息には御起臥も御心に任せず、夜は殊に御腦み烈しくて、つゆまどろませ給はぬとか、又折々御熱度高まりて、御食もはか〱しからぬ由、御疲れの程もさぞと推計られて傷はしうなむ、御地に在りし時ならむには、御側近參りて心の限り御看護もなし參らせむを、今は遠く隔たれる身の、夫れも叶はず、唯心のみあせりて、日々そなたの空を眺めつゝ案じ暮し侍り、偖こたび此地の某堂にて賣り出したる菓子は、たゞに身の養ひと

なろのみならず、味も殊の外美はしとて、もはら病人の間に持てはやされ、醫師達も許せろものに侍り、いさゝか送り参らするを、試みさせ給ひてよ、納御病の一日も早う愈らせ給ふやう、陰ながら祈り侍るになん

あなかしこ、

藤原菫子

時分柄、暑さいやましにきびしう、耐へがたく侍るを、いかにおはしますらん、伺ひの文さゝげまつらんと思ふ折から、御玉章たまはり、いとうれしうとく拜しまつりしところ、御叔母君には、さいつ頃より御心地例ならず、御發熱にて御食事さへ進ませ給はぬとか。あやめもわかず驚きまつられてなん。かりそめ成る御風邪とは申せ、此頃はまいてをちこちに、いまはしき病の、はびこるとしきけば、いと心元なくなん。母にも、さや角やと案じわづらはせられつるも、八重の海山へだゝれる御ところとて、いかゞはせん、思ふに任せざるを、いたづらに只心のみなやまし侍るを、推し計らせ給ひてよ。何はとまれ、病は心からとこそいへばつとめて御心強う持たせ給ひて、御養生御怠りなく、一日も早う本に復らせ給はん事を、切に祈りまつる。まづは、御病氣見舞までかくなん、あなかしこ。

追てなめげながら、花子の君よ、御母君の昨今の御容体を、詳しく記しておくり玉ひてよ。

坂田や代子

木々の梢も若葉しけりて、空のけしきは夏めき候も、とかくさだまらぬ時候にて病める人も多き由、かゝる時は、いとゞ隔たれる御皆々様は、如何渡らせらるゝかと思ひつゞけ居候に、はからず今日の御手紙に此頃より叔母君には御持病起らせ給ふとの御事、病勢も以前の様にとのを、まことにおどろき如何せんと、とびゆき度候も、こたびはとほき道とてさもなりかたく、只愈えさせ給はん御事のみ、神に念じ今後の御手紙まち居申候、御許様には、御大切に随分御養生に御みとりに御心つけあらん事を祈上候、此御金少々には候へども差上候まゝ何の御滋養品か御求め下され候はゞ嬉しき次第に御座候、右いそぎ御見舞まで、申上候、かしこ、

柳生さと子

取ものも取りあへず、一筆御伺申上まゐらせ候、さて御おば様には、先頃より御心地すぐれさせ給はで、打臥しいらせられ候よし只今の御たまづさにて承り驚入候、此頃はひましに暑さつよく成りまさり候折から、日頃よりかよわき御身の、まして御病にかゝらせられ候ひては、さぞ〳〵御心くるしうおはしまし候はん、わらは今日迄もゆめしらですぎ侍りしこそ、いとくちをしきかぎりに侍れ、海山遠く相へだゝり候ひては、何事も思ふにまかせず、打絶えてみけしきをだに伺ひ侍らず、只々文の音信のみにて、何の御恙もましまさぬやうをみては、よろこばしう思ひ居侍りしに、今思ひよらぬ御消息を、はいし上げ候ひて、ひたすらに心さわぎ早く御介抱いたしたくは、思ひ侍れど、あすあさてばかりは、さてもさても参りがたく、今更に空とぶとりのうらやましうこそ覺え侍れ、去りながら今二日をへなば、御許へ参りのぼりて、煩らはせ給ふらん御心をも慰め奉らん、いかでしばしの怠りを免さしめ給ひてよ、たよりなき御身の、かく御恙まし〳〵ては、御心細さも一しほ成らんと推しはかり参らするとへ、いと痛ましうなんあはれ御いたつきの、一時も早うい えさせ給はん事を、神に佛に祈り侍り、かへす〳〵も常ならぬ御身、御いとはせ遊ばされ候はんやうと、かげながら御ねんじ申上参らせ候、

かしこ、

ゆな女

拙き筆をかへりみるいとまもなう心もこゝろならず候まゝいそぎ御見舞申上候、先つころより叔母君には、心地すぐれさせたまはぬよし、されどそのころは、たゞかりそめの御いたつきと承り候ひしに、今朝母よりの文のさまにては、いまださして御老体にもおはしまさぬ御身にて、日に〳〵衰つかれも見えさせたまふとの御事まことに〳〵御案し申上候、妾事も、父母の許にあらんには、直にまゐりて、及ぶかぎりは御看護申上くべきを、ものまなびのためとは云へ、八重の海山隔たりし都に居り候事とて、御ひざ許にまかりて、御みとりせん事心にまかせ

ず、たゞ〳〵御地の空を打ながめて、御案し申上居候、心のうち御推もしれがい上候、何卒御養生遊ばされ、一日もはや御全快さのよき、御便りを、神かけて待居候

あなかしこ

佐々有鄰子

あつさのをりからふりはへてさひ奉るべくおもひ侍りしに、おもひかけずも、お母さまには、此ごろよりすこし風の御氣にて、うちふしたまへるよし、猶の玉はかけて來しゆゑ、生の親さまよりも大恩を蒙り奉りしものから直に看病のため、はせ參るべくぞんし侍りしも、なりふし學科試けんの時に侍れば、終りなばやがてはせ參りて看護のわざに仕奉るべし、あなかしこ

遠方に留學中なれば、心にまかせ侍らず、一應御見まひのため筆にまかせて申上侍り、大恩忘却のものさなおもひたまひそ、やがてはせ來りて仕へまつらん、ゆめ〳〵なさがめたまひそよ、

尾倉益子

ほのかに承り侍れば、叔母君には、さいつ頃より、いたつきの御床に臥してうちなやませ給へりさか、さても此ごろはいかにおはすらむ少しは御心地のさわやき玉ひてみくすりもしるしありけむかし、奥深き御ふすまの中にのみたれこめておはします御心のうち如何におはすらむさるにても、つれ〳〵御養生よろしく、まして御よはひもまださのみ老い玉へるにもあらず、されば遠からず、み藥の功能あらはれて、御本復遊ばさるらむもさ、あけくれ思ひ侍るになん、あはれ一日も早くおこたらせ給ひて、元のうるはしき御顏にならせ給ひてよさ、神佛にいのりて、待ちたてまつるおのれ等のこゝろやすませ給ひてよ、いさなつかしき御顏にあつき御慈愛の露こほれ出つるを見奉らむは、何時にかなごおもひめぐらすも、涙のみ先立ちぬ、いかで御許に候ひて、御けしきだに何ひ奉らまほしさおもふ心は、袖に包みあまり侍れど、いかにせん千里の海山ほど遠きのみならず、まして勤めの身の上にて、かりそめの暇も得はべられば、こゝろもさなくて、取りあへず心のかたはしばかり聞え奉るになむ、

あなかしこ

永井まり子

ひさへになしき春もいつしかすぎ、山の青葉のいさめだつ頃さ相成候處、伯母君樣には、さいつ頃より御いたつきにてなやみおはする由、これなきゝし妾の心のそこはいかなりしぞ、御在鄕の折は、日々みそばに侍りて、よろづの事ども敎へみちびき給ひ、きろまことの子のごさくに、めでいつくしみ給ひ居しに、去年のくれ、公のまけのまに〳〵、東の都に御移り遊ばされてより、このかた親しく、御溫顏にまみねまつる事のかなはぬものから、折々の文のたよりを、此上なき樂しみさ致し居候ひしに、さいつ日、はからずも御いたつきの御報に接し、私のおどろきいはん方なく、空さぶ鳥さなりてだに、御そばに參り、親しく御容態うかゞひ上度ぞんじ候へさも、つばさなければ通ひ得ず、げにまゝならぬは浮世のならひにて、是非もなきことにこそ、あゝ旅の空さ申すものはたゞさへ物さびしきものなるを、ましてやまひの床に御なやみの御ことなれば、いかばかり御不自由に明し暮し給ふらん、故鄕なりせば、親類友達のいたはりなぐさむるものも數多あるものを、いかに伯母君樣には、ひさり旅のそらに打ふし遊ばさるゝよ、いかに御物すごく御暮し遊ばさるゝよ、思ひやるだに、そゞろに涙にむせび申候、さはさりながら、つさめて御心强うもたせ給ひ、御保養專一にあそばされ候はゞ、御全癒の期も遠くはあるまじさ、不束なる身にも深く信じ申候、爰々も御ゆるみなく御養生遊ばされ、一日もはやく御全快のほど、祈り上げ參らせ候、先は御病氣御見舞までかくなん、あなかしこ、

遠柳　　名取正代子

野燒せしけふりのすゑの消かてに
なひくや遠の柳なるらん

殘花交新樹　　同人

ふきさそふ風にやもれしさくら花
しけるみさりの葉かくれにして

郭公　同　人

うれしくも初聲きゝつまちかねて
たつねいるさの山ほとゝきす

首夏月　坂田きみ子

いつしかも夏きにけりなきのふけふ
かすますなりぬ山のはの月

里擣衣　同　人

さよふけてかすかにひゝくつちの音は
十市のさとのきぬたなるらん

名所落葉　同　人

立田山めくるしくれにきほひつゝ
はれてもふるはもみちなりけり

簾外春月　名取よし子

梅のはなおほろけなからをすこしに
ゆかしく匂ふ月のかけかな

深山餘花　同　人

里遠き深山のおくは夏かけて
世にさき残る花もありけり

深夜燈　同　人

小夜ふけて獨ねさむる枕邊に
こゝろほそくも残るともし火

貯金銀行　日高かす子

一人つみ二人つみつゝ日の本の
こかねの山の高くもあるかな

獨逸國

人皆の言葉の花ににほへとも
我身は春にあふよしそなき

燕　三輪戢方

しのぶおふる軒につばめのこゑすなり
あめのふるすやたつねきにけん

鏡　柴田靜榮

なき人のかたみとおもへばあさなあさな
むかふかゝみのかげもなつかし

殘花　小川清子

しけりあふ若葉のなかのおそさくら
くれゆくはるをこゝにかくせり

子を別る　名取正代子

世に別といへば假初ならんにもかなしきを、まして再びあふよしもなき長のわかれこそいと／＼いみじけれ、さるが中に、親はらからなんどいふも更なれど、いまだ世のうきふしも知らぬ、はしき緑子に別れんこともなかなかにあはれかなしきものなりかし、我家にこぞの冬うまれいでたる緑子、いとよくこえふとりたるが、俄に虫のけにて打なやみければいざくすしよ／＼よと、これかれものせしかど、終に其しるしなくてあへ、なくもみまかりぬるぞかなしとも悲しき、あはれきのふまでは、晝となく夜となく出るに入るにしばしもはなるゝ事なく、あるはせおひあるはいだきてなでいつくしみはぐゝみしものを、けふは手のうちの玉も取られし心地して、俄の事にあきれはてゝ胸ふたがりて涙せきあへず、なほぬぎ捨し衣などたゝみもやらで手にまさひては打なげき、もて遊びしふりつゞみなど取あげては、ちごのゑまひの思ひ出られて、かなしさやるかたなく、我ながら物ぐるほしきさまのはづかしきまで子故のやみ路に迷ひぬるぞ、いと／＼はしたなきや、さてひと日二日をふるいとゞかなしささびしさもいやまさりて、ちかきわたりにちごのなく聲まゝに、なぞきこゆるにつけても、なほある者と忘れつゝ、わが子はやすくねむりやするとかへりみすれど、影だにあらぬぞいと／＼口をしきや、さてもかくいつまでなげゝばとてかへりくべくもあらねばなど、或時は思ひあきらめて、心うつしに前栽の撫子など打ちながむるにもなか／＼になぐさむべくもあらで、おもひはいよゝたちまさりてなん。

西村茂樹翁序
三輪田眞佐子女史著

第五版

女子處世論 全

菊判美本

定價 二十錢 郵稅 四錢

本書は女子教育に有名なる三輪田女史が日常實踐躬行に徵し女子たるものゝ世に處するの道を詳述せしものにして字々皆着實に句々悉く誠意に出で一も虛構の文字なし世の令孃達此に依りて益々女德を養ひ以て神州國民の慈母たらんことに資せられんことを

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 國光社

風調新誌

第七十號
六月發兌

○毎月一回發行○毎號紙數五十頁內外○毎一冊代價郵稅共參錢五厘○六冊郵稅共拾七錢○十二冊郵稅共貳拾四錢○郵券代用は總て一割增

○千家國造館邸內鎭座　天滿宮例祭獻詠兼題

○朝霞○納凉○擣衣○寒松○神祇

（選歌は八月發行の風調新誌に登載す○御詠草は七月廿日限和歌係島宮太郎宛御郵送を乞ふ○出詠者にして選歌登載の新誌要望の向は郵券四錢五厘添送あれ）

○明治三十二年　風調舘月次和歌兼題

○七月（竹風似秋、林下幽香）　○八月（露底朝顏、菅原道眞）
○九月（秋風滿野、萬事如夢）　○十月（紅葉映日、芳野懷古）
○十一月（雲中鴈狩、樵夫歸月）　○十二月（水鄉寒蘆、寄神祇祝）

●出詠規定○毎月五日限（一月分は一月五日限以下準之）御出詠の事○一人一題三首限○天地人の三等に當選せられたる方へは聊か賞品（歌學に關する書籍）を呈す○撰歌は毎月風調新誌に登載す○撰者は島多豆夫佐々鶴城雨大人さす○詠草は半紙罫に書体明瞭に認め住所姓名雅號を詳記し和歌係島宮太郎宛にて御寄送を乞ふ○課題外短歌、長歌、和文今樣、漢詩、俳句等は當季幷雜題の內にて隨意寄稿を乞ふ○出詠規定に違ふ者は總て沒書さす

右規定により精々玉詠御寄贈わらんとを乞ふ

發行所　島根縣杵築町　風調新誌社

櫛の舍　　出雲國杵築町　島宮太郎

六月（螢過窓、夜犬）　七月（遠夕立、山雲）
八月（始聞虫、谷橋）　九月（月前雲、松風）
十月（秋風寒、太洋）　十一月（紅葉深、田家）
十二月（庭早梅、水聲）

出詠毎月廿日迄料紙隨意○点者島多豆夫大人○出詠一人一題二首限点料一人一ヶ月分四錢○選歌は月刊歌文雜誌に登載し尙取纏め習追て類題正葩集二編編纂の節無料編入す○天地人の三等には選者揮毫の短冊を呈す

歌集出版豫約募集廣告

貴顯題字題詠序文　島多豆夫大人選

類題正葩集

全一冊○洋裝中形頗美本○紙數二百頁以上○正價金卅錢○豫約特價金二十五錢○郵稅四錢

本書編纂に付原稿及豫約募集の義屢々各雜誌を以て廣告に及候處非常應募者有之三月末日締切迄に到達せし和歌一萬五千四百八十五首選歌二千七百八十六首の多數に達し申候最初募集の目的は總數一萬首選歌二千首の豫定にて豫約代價等相定め候處前述の如く意外の多數に及び隨て紙數も增加し到底豫約價にては印刷實費だも支拂ふ能はずされど非常の勉強を以て先般來廣告せし如く出詠さ豫約さ併せ御申込の方に限り本集に櫛之舍三代歌抄一冊を添へ送呈可致依て豫約のみ御申込の方は至急豫約一部に付五錢宛の割を以て不足金御送附相成度候○前述の通集歌は已に選擇濟に付目下筆者を督し謄寫せしめ居候然れども題辭題詠序文及び櫛之舍三代歌抄の卷首に挿入すべき三大人の眞筆寫眞版出來致さず且つ活版所多忙の爲來る七月初旬より愈本集の印刷に着手する筈に付仝月中旬又は下旬を以て製本濟さし順次送本可致候

●豫約募集　本集出版は來る七月迄延期に付七月十五日迄豫約の申込を受く有志は同期日內續々申込を乞ふ○豫約正價一部金貳拾五錢郵稅四錢郵券代用一割增○爲替は杵築局宛○豫約申込の方へは櫛の舍三代歌抄一冊宛呈す（諸大家題詠序文幷櫛の舍三大人眞筆寫眞版付）○期限後は定價三十錢郵稅四錢より割引せず○本件に關する照會は往復はがき又は郵券封入の外一切回答せず

豫約申込所　出雲國杵築町　正葩會

責任者　正葩會主　島宮太郎

生田目經德編

標注 雅文消息集 全

●菊版美本
●全一冊
●定價金廿五錢
●郵稅四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもその躰大にとゝのひ雅馴にして艶麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇専心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側におきて摸範となさば益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社

男爵 高崎正風先生序 ◎ 本居豊穎先生序

故 富士谷御杖先生述

土佐日記燈

大和綴優美 自一卷至八卷 紙數壹千百頁 上中下 合三册

◎全三册◎正價壹圓五拾錢◎遞送料 四種郵便冊錢◎小包〇十里迄七錢〇百里迄十二錢〇百里以外二十四錢

富士谷御杖の**翁**斯の學に至り深かりしは今更にいはず其ものせられし**著書**はかれるが中に**燈**ものといふ古事記燈、萬葉集燈は翁か在世の頃にゑり卷となりて、世に廣こりしも、この**土佐日記燈**ものなるかさるよしありて時の**栗田の宮**の請はせらるゝに**稿本のまゝ**奉られしを、後いくはくもなくて翁はみまかれしかは、さなからに**埋**もりて流布せすなりにき、世の學者見まほしふすれとも、さるよしもなくて空しく年經ぬることを玆に數十年、さるを翁の男元廣ぬしかさるへき筋より辛うして**寫し傳**へたるを、いとう摺り卷にもしてこたひ**我社**にて、世に**廣く流布**せしめんとす抑々此の**燈**は世にありふれたる註釋書の類とことにして、貫之朝臣のこの日記を書かれしはかりそめのすさひにあらす、土佐の守に任されし**深き**を深く憤る由ありて、あらはには女のものせしさまになしはその言葉のうちに、ふくめたりといふを、本として**言詞**は更なり**文意**をも**委**しく解かいと**心廣く考證**をも引き出でられたり凡國史國文に志ある士は座右一日も欠く可からざる最良書なり

◎◎發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 國光社◎◎

◎◎特約大賣捌所

杉谷正隆編

修身百首

定價金貳拾錢
郵税金四錢

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてその本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社

近衛公爵題辭
黒田子爵題詠
故勝伯爵題辭
高崎男爵題詠
東久世伯爵題辭
島津久寶氏題詠
副島伯爵題字
寺師宗徳氏序文

照國公感舊録

國光社編纂　松本楓湖氏挿畫

全一册
定價金五十錢
郵税金八錢
郵劵代用一割増

晩近**維新史**の攻究闡明に力を盡すの人多く随て此間に於ける偉人傑士の傳記評論續々として梓刻に上るあるも獨り**島津齊彬公**の詳傳に至ては世未だ好適の著あるなく信憑すべき記なきは識者の常に遺憾となる所なり夫れ**王政維新の原動力**は薩に在り而して**薩の原動力**は實に**齊彬公**其人に在るを知らむ公が詳傳の維新史に欠くべからざるや又言を俟たざる也本書は**公が生涯を詳述**したるものにして、傳記尊王外交經濟文事民政撫恤の七大綱に分ち卷中の事蹟は一々**周密**なる**調査**を遂げ編者が經營慘澹の餘に成りたるものにして事を記する極めて**精細**筆を遣る極めて**謹嚴**明窓の下之を繙かむ公が一生の閲歴、歴々として掌を指すが如く又以て**維新鴻業の由來を知るに足らん**製本亦清麗にして卷中挿む處の**楓湖畫伯**の圖畫と卷末に付する處の**明治諸名家**が追懐の和歌は錦上更に花を添ふるもの也

發行所
東京京橋區築地二丁目廿一番地
靜思館

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	拾錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十二年六月四日印刷
明治三十二年六月五日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木良雄

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　（電話番號新橋八八）　國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可）